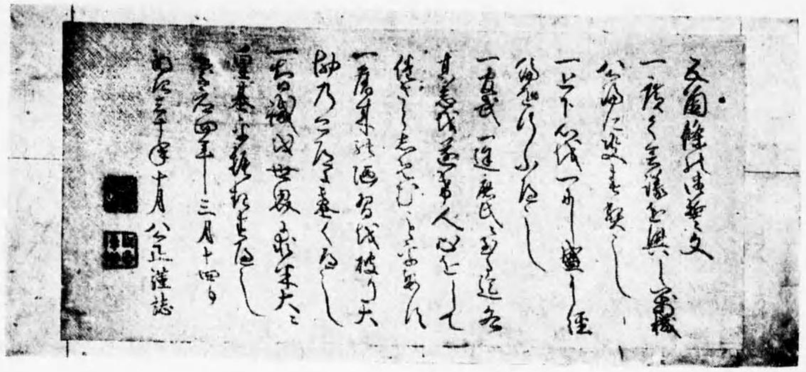
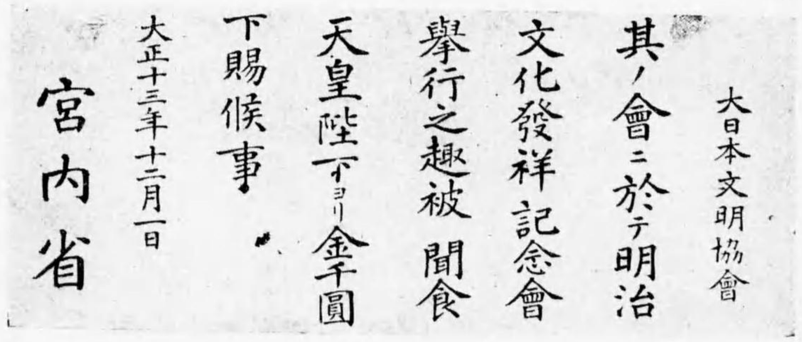
投

210
6

明治文化發祥記念誌

（大日本文明協會發行）





大日本文明協會
其ノ會ニ於テ明治
文化發祥記念會
擧行之趣被聞食
天皇陛下ヨリ金千圓
下賜候事
大正十三年十二月一日
宮内省

THE COMMEMORATION OF MEIJI-CIVILIZATION

During the last half century Japan has undergone a marvellous change. In that space of time she saw a new civilization born and a wonderful growth made in her national life. The Era of Meiji occupies an important place not only in the history of Japan, but also in that of the world, as one of the most remarkable periods in the course of human progress. It was James Russel Lowell who said of the British nation that "it was but the Norman yeast worked upon the home-baked Saxon loaf." Japan is after all Japan and nothing else after her all transformation; her new civilization built up in this period is not a mere wholesale imitation or borrowing of that of Europe or America. However, there can be no doubt whatever that the wonderful yeast of Western culture has worked upon and permeated into every fibre of Japanese society and leavened the dough both materially and spiritually. Japan is a melting-pot in which two different civilizations, Occidental and Oriental, are fused into one harmonious whole. This is the mission Japan should strive to fulfil to satisfaction—a worthy goal for which the late Marquis Okuma, President of the Dai Nippon Bummei Kyokai, was vehement in his propaganda in the latter years of his life.

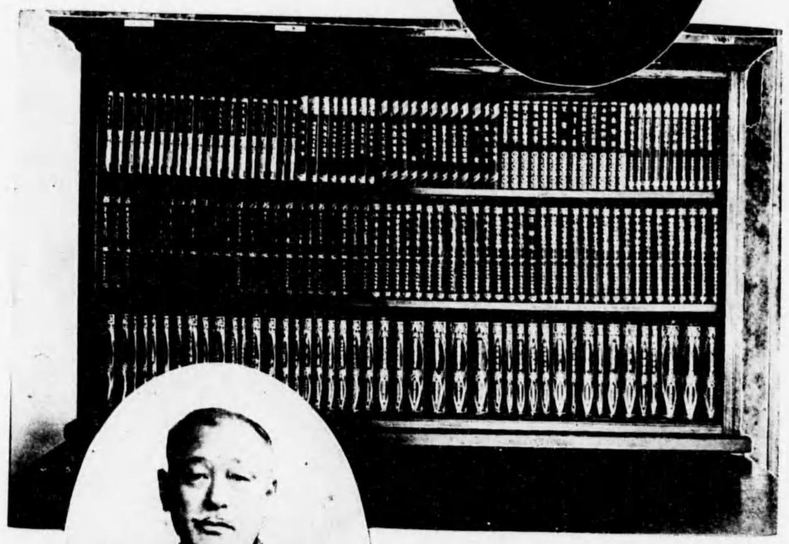
In giving a glance at the building up of New Japan, we cannot lose sight of the important services of those foreigners who took part in the welding of the new civilization and made valuable contributions to the great work in their respective fields. They were our teachers, our co-workers, and our benefactors. The nation is well aware of this fact and deeply appreciate their shares in the work. We respect them and love them and wish to keep them forever affectionately in our hearts. In this connection it comes home to us that time is a great eraser as ever. Now that more than fifty years have elapsed since the Restoration of the Imperial rule, not only those who participated in the work, but even those who witnessed it have passed away—almost all of them. Lest their valuable services often times rendered in self-denial should pass into oblivion, the Dai Nippon Bummei Kyokai has considered it a pressing necessity to collect documents concerning them, and present them in a compilation at the first opportunity. It was some two years ago that the Association began this undertaking, but the progress has not been so satisfactory, the task having proved to be one by no means easy. To our great surprise and disappointment, it has been found that relics and other monuments most needed have already been swept out of existence. To make the matter worse, the earthquake and fire of last year played a havoc on what scanty materials there were left. Seeing that any further delay is injurious to the execution of the work it has set to itself, the Association has decided to hold a meeting to-day, Dec. 7th, as a preliminary step, in honour of those representative foreigners who were most helpful in the building up of our new civilization. The holding of this function, we hope and trust, will induce those who take interest in the materials at their disposal in furtherance of our enterprise. Such is the reason that, in spite of the fact that the preparation is still very incomplete, we have decided to carry out our intention without any further delay. "The sooner the better" is our controlling idea.

The Association takes this opportunity to express its thanks to those who have sympathized with it and rendered it valuable assistance in more ways than one.

A word more by way of explanation: although there were in the pre-Meiji period many foreigners who did good services in the cause of Japan, their names are here omitted for the only reason that the commemoration of their work is outside the scope of our present celebration, as we are now concerned exclusively with the Meiji Era.

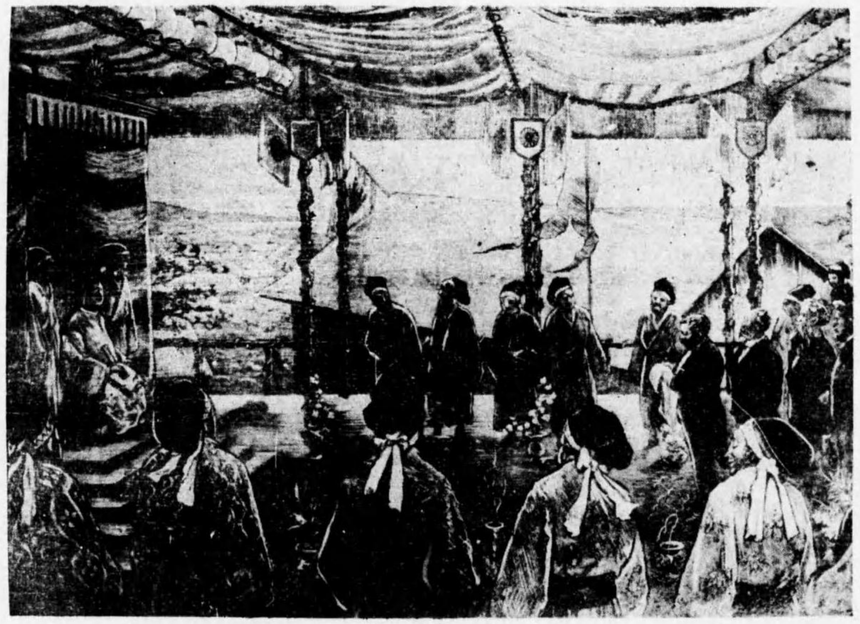
THE DAI NIPPON BUMMEI KYOKAI

前會長故大隈重信侯

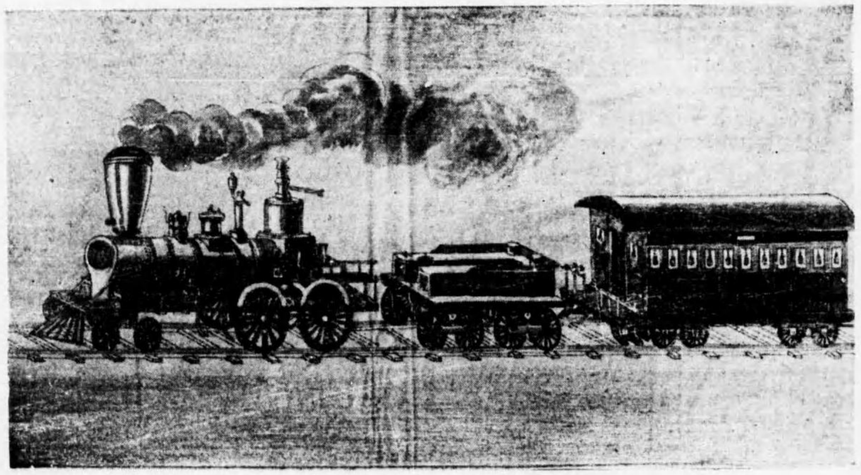


自明治四十一年至大正十三年
協會刊行書二百三十卷の一部

現會長大隈信常侯



明治五年九月横濱東京間鐵道開通式新橋式場に明治天皇御臨幸の圖



明治初年の汽車見取圖

明治文化に貢献せる各國語辭書

藏氏義重山杉頁八九四綴横紙和版再正補氏助之龜堀越年三應慶「書辭珍袖譯對和英補增正改」上右
藏氏郎二修邊渡二三一頁寸六縱寸九横裝洋行發濱横海上年三應慶「集成林語英和」譯編ンポヘ上右
藏氏郎二修邊渡分三寸三横寸八縱〇四四頁總裝洋版里巴年二應慶「書辭和英佛」著ンヨシカ央中
藏氏郎二修邊渡寸四横寸六縱〇六三一頁總裝洋梓上年五治明「書字珍袖和孛」著田小下右
藏氏昂重賀志寸六横寸八縱頁〇〇七裝洋鐫新海上年二治明書辭摩薩謂所「書辭英譯和」下左

2151

210
6 ⓐ

大正十三年十二月七日發行

明治文化發祥記念誌

大日本文明協會發行

2151

明治文化發祥記念誌 目次

Commemoration of the Meiji Civlization (表紙裏)
はしがき……（一）
明治文化發祥記念會趣旨……（一）
發祥時代の明治文化……宮島新三郎……（一）
明治文化に寄與せる歐米外人の略歷……（一）
總覽表（英文説明付）……（一）
略　歷……（三）
法制經濟三十一名（三一）宗　教二十三名（四〇）教　育三十八名（四七）文　藝　二十六名
（三五）理　科二十九名（六三）醫　科二十七名（七五）産　業二十五名（八四）建築土木
十八名（九三）交　通十七名（九六）軍　事十八名（一〇〇）四十一名　補　遺四十一名（一〇三）
明治文化回顧錄……（一）
明治文化發祥の回顧……本會理事長　市嶋謙吉……（一）
日本の新文明の基礎……子爵　金子堅太郎……（二〇）
新日本建設の基礎を固められし福澤先生……鎌田榮吉……（二四）

往時の日本製業と工部大學の沿革……工學博士　石橋絢彥……（二八）
維新當時の醫學界……醫學博士　三宅秀……（三六）
スコット先生とモールス先生……文學博士　三宅米吉……（三八）
ダブリー・イー・エルトン先生……工學博士　淺野應輔……（四〇）
我國に於ける洋算の發達……三上義夫……（四一）
閑話斷片……工學博士　中原貞三郎……（四五）
フェノロサ及びケーベル氏のことども……文學博士　井上哲次郎……（四七）
維新前後の思出……子爵　澁澤榮一……（五七）
モールス先生と進化論……理學博士　石川千代松……（五九）
日本の水産業の創始時代……大日本水産會副總裁　村田保……（六〇）
新聞の創刊時代と創業時代……大阪毎日副社長　矢野文雄……（六三）
新聞記者時代の追懷……箕浦勝人……（六九）
アーサー・ロイド先生及リスカム先生の思出……慶應大學教授　川合貞一……（七七）
維新時代の教育界……工學博士　高松豐吉……（七八）
大學の起原……貴族院議員　加太邦憲……（八〇）
明治時代に於ける建築の和洋折衷について……工學博士　大熊喜邦……（八五）

救世軍の日本に於ける開戰……山室軍平……（八七）
歐洲軍制の渡來……陸軍大將 大島健一……（八九）
ニコライ師のことども……柴山準行……（九一）
明治初年の英語教育……國民英學會會長 磯部彌一郎……（九六）
明治前後日本の事情に精通し國交及學界に功勞ありし アーネスト・サトウ氏……渡邊修二郎……（一一〇）
我林學界に貢獻した四外人……林學博士 ドクトル 本多靜六……（一二一）
明治時代の洋樂……東儀季治……（一二四）
明治時代の化學……理學博士 櫻井錠二……（一二八）
ブリデル先生とモーレー先生の思出……子爵 田中阿歌麿……（一三三）
近代我國最初の築港……工學博士 廣井勇……（一三五）
明治初年の海運及郵便に就いて……塚原周造……（一三七）
ブェーンスと熊本洋學校及同志社……牧師 小崎弘道……（一四三）
維新後の洋畫及び洋風彫刻……東京美術學校長 正木直彦……（一四八）
日本教育の開拓者ヘボン博士……青山學院教授 山本秀煌……（一五一）
内地で初めて觀た外國俳優のシエークスピヤ劇の印象並に我國に於ける沙翁研究……文學博士 坪内雄藏……（一五九）
文明協會だより……（一七九）

明治文化發祥記念會開催要旨

王政維新の大業は我帝國をして列强に伍するを得せしめ、國民の文化も亦之れに伴ふに到つた。この成功は上に　聖帝のましますあり、下に忠良の臣の之を輔翼し奉るあり、上下和衷戮力して庶政の刷新、文化の向上に努めた結果であるが、其間吾人の忘るべからざる一事は、明治大帝の御誓文中にある「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」の聖旨を奉體し、歐米先進國より夙に練達の士を迎へ、新日本建設の爲めに助勢せしめたことである。若し此事なかりせば我文化は斯くまで早く進まなかつたかもしれぬ。開國進取の國是は早く定つたけれども、維新草創の當時は恰も渺茫たる洋上に小艇を泛べたるが如く、其進むべき方向と方法とは混沌たる狀態であつた。其際彼等は學術に實地に各自專門とする所に從つて、或は顧問となり或は教官となり或は教師となり、各々其職に盡し、直接間接我國力の充實、文化の啓發に貢獻した功績は實に著大なるものであつた。徐ろに首を回らして明治文化の迹を繹ね來れば、吾人は如何にしても彼等の功績を葬り去る事は出來ない。茲に於て本會は、維新以後我國運の進展に特に功勳ありし來朝外人の事蹟を調査し、之を後世に傳ふるを以てその責務であると信じ、さて調査に着手して見ると意外に其數が多く、而かも中には知名の人でありながら、正確なる記錄もなく、亦事蹟を語る交友も關係者も乏しいと云ふやうな場合が多く、調査に意外な困難を感じた。さあれ今にして努めて之を調べて置かねば遠からず湮滅に歸し、彼等の功績を終に沒却するにみでなく、爲めに明治文化發達の眞相の一部を失ふに至らんとの感を深からしめた。斯くして吾人は鋭意調査に歩を進めつゝある際に、昨

秋の大震火災は突如帝都の過半と横濱の大部分を灰燼に歸せしめ、最近半世紀間に築き上げた物質文明を一朝にして破壞し盡した。此時に當り吾人は今更是が壞滅を惜しむと共に、此等文明の由來沿革に就て深く憶ばざるを得ない。其結果は之が建設に與つた內外の先輩を追懷するの念をいよいよ加へたのである。然し我國人に屬する事蹟と功勳とに關してはおのづから傳はる途もあるが、外人のそれに至つては今既に忘れられつゝある位で、僅かに研究の資たるべき諸官省の文書も既に其大部分が烏有に歸したとなると、外人の事蹟は永久に亡びんとしてゐるのである。偶然にも吾人の計畫は震災前に手を着けたため、諸官省の文書の寫しが本會に殘り、今は副本が却つて原本の喪失を補ふことになつたのである。

前述の如く有功外人の事蹟調査は今日既に容易でない。若し更に十年を經過したなら如何であらうか。之れを思へば、本會の蒐集したものは充分でないにしても、其人員は四百名あまりを有し、凡そ代表的人物は網羅してあるから、今となつては貴重の資料とせねばならぬ。

今次明治文化發祥紀念會の開催を思ひ立ち、此等外人の功績を顯彰せんとするのは、一つは其事蹟の湮滅を恐るゝからであるが、亦これを機會に蒐集せる資料を訂正增補したいからである。言ふまでもなく明治文化發祥會の趣旨は決して外人の功績のみを表彰するが目的でなく、寧現代の文化的國民生活の起點である、明治初年からの文物の發達を追懷反省して所謂溫古知新の料たらしむるを主眼とするからである。勿論諸外國人から學んだ所も多いに相違ないが、それのみで日本の文化は成つたとは謂はれない。卽ち東西文明の融合が之を招徠したのである。況んや今日となつて徒に歐米の風を模倣すること明治の初年の如くであつては、何日迄も後退的地位に立ち、延て國民精神の獨立を損ふことにもなる。今

後は獨立して吾れ等自らの文化を築かねばならぬ。併しながら彼等の既往の功績は決して沒却し去るべきでない。其恩を恩とし、其德を德とし、それを表彰感謝する途を講ずるは蓋し文明國民の義務であると信ずる。

明治文化發祥紀念會は上述の趣旨を以て十二月七日を卜し廣く內外の紳士を會して式典を擧げ、引續き講演會を催し、紀念冊誌を發刊し、紀念展覽會を開き、文化の史蹟を發揚すると共に、文化の得失を嚴正公平に批判し、將來繼承すべきものと然らざるものとを研究取捨し、以て今後の文化に資せんとする。これが本會の使命であつて顯彰會を開く所以も亦こゝに存するのである。

大正十三年十二月

大日本文明協會長　侯爵　大隈信常

明治文化發祥記念會學行次第

(一) 記念式

大正十三年十二月七日午後一時
牛込早稲田大隈會館に於て

一式辭　會長侯爵大隈信常君
一趣旨（英語）　本會顧問志賀重昂君
一祝詞　來賓代表子爵加藤高明君
一祝詞　外交團代表英國大使サー・チヤールス・エリオツト君
一所感　子爵石黑忠惠君
一同（英語）　子爵金子堅太郎君
一同　子爵澁澤榮一君

(二) 明治文化發祥記念誌發刊

一明治文化に寄與せる歐米人の畧歷
一明治文化回顧錄

(三) 明治文化發祥記念展覽會

十二月七日午前十時より午後五時まで

(四) 近代日本文化批判講演

十二月七日午後五時より
早稲田大學第二十教室にて

講師　文明と教義　前文部大臣　鎌田榮吉君
講師　明治文化と財政　文學博士　井上哲次郎君
日本文化の世界史的觀　經濟學博士　太田正孝君
史料編纂官　中村勝麻呂君

十二月七日午後五時より
芝公園協調會館にて

講師　維新當時の化學的政策　前內務大臣子爵　後藤新平君
プチシュアン師の事　文學博士　姉崎正治君
模倣文化の功罪　法學博士　林毅陸君
近代文化の効過　前代議士　押川方義君

十二月八日午後五時より
帝國大學第三十教室に於て

講　世界大勢より觀たる日米問題　前文部大臣　高田早苗君
　　法學博士　浮田和民君

師　非理法權天　法學博士　下村宏君

　　未定　如是閑　長谷川萬次郎君

十二月八日午後五時より
東京商工奬勵會館に於て

講　明治の文化に就て　特命全權大使　日置益君
　　余の受けたる明治時代の教育　工學博士　高松豐吉君

師　未定　法學博士　吉野作造君

　　日本文化紹介者としての　早大教授　内ケ崎作三郎君
　　小泉八雲先生

はしがき

文明協會がこの明治文化發祥記念會の第一歩の計畫を建てたのは既に二年以前のことになつてゐる。この計畫は明治初年以來日本に渡來し日本の新文明の建設に與つて力あつた諸外人の功績を顯彰せんとするのであつた。然しこの會の趣旨に就ては卷頭の趣旨書に於て詳細にせんとするところであるから此處には略するが、とにかく、その計畫の實現に入る第一歩は、さうした外人の調査であつた。然しこの調査が容易なものでなかつたことは勿論であつて、直接これに關する樣な文獻といふものも極めて尠く、明治初年當時に實際に活動せられた諸先輩を敲くより外はなかつた。それ故本誌に集め得た諸外人の事蹟、經歷等は、直接それらの人に接せられた人々から調査することを得たものであつて、これは本誌が、我國に於て初めて直接の資料から調査編纂することの出來た記錄として誇り得るものと思ふのである。然し、さうした外人の事蹟は今に於てすら、既に湮滅に歸せんとしつゝあるもの、忘れられつゝある者等多く、調査が困難であつただけに、完全なる記錄とすることの出來なかつたことは遺憾である。尤も今迄に調査することの出來た、代表的人物と思はるる者のみでも、やがて四百に近き人名があり、その事蹟は各般に亘つてゐて、範圍が非常に廣いのであるから、これらの總ての完全な記錄を得るまでにはかなりの日子が要されねばならぬであらう。なほ吾々がこの諸外人の事蹟の調査を直接に實際に接せられた人々によつて成就せしめんことを期してゐる以上、これをまた廣い範圍に求めねばならないのである。玆に於てか、今迄に吾々の蒐集し得たる資料をひとまづ纒め、これを基礎としてなほ彼等、日本新文明の建設に盡した諸外人の事蹟の調査を正鵠、精密ならしめ、永く記念せんと欲するのである。それ故、この小冊子に集め得た諸外人名、及その事蹟等は、いまだ、ただ蒐集された者といふのみのものであつて、精密なる調査はこれに基いて他日成就せしめんと欲するので

ある。從つて、吾々は玆に蒐集し得た諸外人名、及その事蹟等によつて、明治初年の世に實際接せられた諸先輩が、かかる外人等の事業功績に就いて思ひ起すことの出來る暗示を與ふるものとなれば幸である。この調査のためにはかなりの苦心と努力とを要したとは云へ、なほ足らざるもの、正鵠を得ぬもの等も存するかも知れぬ。これに就いては唯大方の御教示を俟つのみである。

吾々がかゝる調査をなしつつある場合、最も注意を拂はねばならぬことは、如何なる所に標準を置いて如何なる人々を錄するかといふことである。明治初年歐化萬能の頃には、諸般の新しき學問を得るためには、その師としての人選などは極めて杜撰なるものであつたといふことである。例へば英語の出來る人と知れば、その人格の問題などには何等頓着なく師として英語の教へを乞ふといふが如きものであつたとかいふが、從つて多くの新日本の文明の建設に與つた外人中にも種々なるものがあつたのである。而してそれらの全員悉くが到底錄することが出來ないものとすれば、ここに代表的人物の選定の困難といふことに遭遇せねばならない。これに就いても大方の先輩諸氏よりの御教示あらんことを乞ふてやまぬ次第である。とにかく、本誌中には、多少なりとも事蹟の知り得たる主なる者は總て記入しておいたのである。

また本誌の編纂に當つて困難であつたことは、その人々を如何なる順次のもとに配列するかといふことであつた。四百近くの人員を簡單に見ることの出來るためにはいろいろの工夫もあるわけであるが、これが困難であつたのは不明なるものが往々あつた所以であつた。例へばその名を如何に綴るかといふことの解らぬもの、或はまた年代の不明なるもの、或はまた國籍の不明なる者といふが如きものもあつて、年代順の配列やアルファベット順の配列といふことは行はれず、玆に部類分といふ方法を取つたわけであるが、然しこの部類分の方法もその適否に就いて云ふならばなほ考慮を要するものがあるであらう。せめてこの部類分の中でゝも年代の順次に依るべきであつたのであるが、材料蒐集に苦んだ爲めに殘念ながら順序不同といふことになつて了つたわけで、此點は讀者の諒察を乞ふ次第である。

かくの如き次第であつて、この小冊子は、ただ材料を集めたといふのみに過ぎぬのは恥づる次第であるが、近き將來に於て大方の御聲援のもとに完成せられんことを期してこれを諒とされ度いのである。

本書中總覽表には主要事蹟を英文にて記入したが、これは外人に便ならしめんが爲であるが、その記載されてゐる事項は紙面の關係から主要とおぼしきもの一二を記載したにすぎぬため、或は中には肝要なるものの脫せられてゐるのがあるやも知れぬ。これもこの際諒として頂き度い。

ともかくも、上述の如きいろいろの不備はあるが、かうした記錄編纂の調査への第一歩を踏み出したものとして、敢てこれを大方の前に提供し、その御教示を仰がんことを乞ふてやまぬ次第である。

なほ從來本會がこの調査に着手してより今日にいたるまでいろいろの御教示と御助言を得、この冊誌となるの奇料を與へられた諸氏の芳名を左に記して玆に謝意を表する次第である。

子爵 石黒忠悳　子爵 九鬼隆一　子爵 田中阿歌麿　呉秀三　寺島誠一郎
井上哲二郎　嘉納治五郎　津田梅子　桑田知明　高楯俊
中村勝麻呂　石川千代松　藤澤利喜太郎　志賀重昂　非深梶之助
三宅米吉　加太邦憲　塚原周造　樋畑正太郎　渡邊修二郎
大槻如電　大槻文彦　今西喜藏　巨智部忠承　中原貞三郎
廣井勇　川上鐵二郎　柴山準行　長岡外史　山本秀煌
淺野應輔　スタイヒェン　高松豐吉　姉崎正治　男爵 山川健二郎
下村宏　鎌田榮吉　今澤慈海　矢崎鎮四郎　内藤久寛
上田萬年　伊東巳代治　小林堅三　勝俣銓吉郎　村田保
佐々木勇之助　本多靜六　增田藤之助　小崎弘道　河合謙三郎
須田利信　寺島成信　子爵 後藤新平　高田早苗　村島靖雄

山本忠興　麻生正藏　石坂正信　長谷川誠也　大熊喜邦
下田歌子　三宅秀　澤柳政太郎　櫻井錠二　內田貢
中村孝太郎　古市公威　佐藤功一　山崎覺次郎　金井延
山室軍平　川合貞一　磯部彌一郎　三上義夫　坪內雄藏
金子堅太郎　富士川游　德富猪一郎　石橋絢彥　三宅雄二郎
小藤文二　山崎直方　箕浦勝人　矢野文雄　內ケ崎作三郎
伊坂國太郎　岩倉子爵　濱尾新　林未葵夫　獨逸大使館
英國大使館　伊太利大使館　和蘭公使館　東京帝國大學　帝國圖書館
早稻田大學　日比谷圖書館　青山學院　明治學院　曉星中學校
慶應義塾　日本正公教會　參謀本部　日本石油會社　日本郵船會社　宮內省賞勳局
內閣記錄課　海軍省　陸軍省　宮內省
大藏省　文部省　農商務省　外務省
內務省　鐵道省　逓信省　（順序不同）

以上の外、諸先輩の御教示に基いて、この調査の參考となる書籍記錄等を得たのであるが、これは上述の諸氏が記憶に基いて語られた所を補ふもの、また編輯部に於て參考としたるところのものであるが、この方面にはなほいまだ參考とすべきものが多からうと思ふのである。今までに吾々が以上關係諸氏より指定されたもの或は貸與されたものも種々あつたが、そのうちには近世名醫傳、日本石油史、鴻爪痕、日本組合教會史、日本鐵道史、日本博物年譜、"Protestant missionsinsim Japan," "Tokio missionary Conference" 等の外大學、圖書館その他官廳の記錄があり參考となつたのであるが、この調査に必要なるその他の文獻といふものがまだあらうかと思ふ。これもなほ研究を要する事項と思ふ。

然し顧るに、なほこの調査を進める上に於て他に當然今迄に於ても教を乞はねばならぬ先輩諸氏がある筈であるが、今迄に於ては遂にその機を失して來て了つたことは遺憾である。また今迄にいろ〳〵の御教示を仰いだ方々より各方面の造

詣深き方々を敎へられたもので、その門を敲くの機を失して了つたものも、時日の迫つた爲とは云へ遺憾である。然しなほこの調査を進めるものである限り、その點にも萬遺憾なからんことを期してをるのは勿論であるがなほ大方の御敎示をも更に乞ふて置く次第である。

なほ『明治文化回顧錄』はその當時の實際に當り、また直接に接せられた諸氏の回想談を乞ひ、而してその時勢の一記錄を玆に描かんとするの主意であるが、然しこれは忽卒なる間に企圖され蒐集されたので、充分なることも出來ず、當然參加を乞ふべき諸氏にして漏れたる等の遺憾はあるが、これも他日「文明大觀」誌上に於て時々採錄しその缺を補はんことを期してゐるのである。

勿論かうした計畫は、その完成までにはかなりの年月を要するものではあるが、ともかくも、今日不備なるものとは云へ、その第一歩に踏み入ることの出來たのは、多くの先輩諸氏が吾等の微衷を汲まれ偏にその聲援を與へられたことにあづかつて力のあつたところであるのを思ふて吾等は感謝の念に堪へない次第である。

大正十三年十二月七日

大日本文明協會

發祥時代の明治文化

宮島新三郎

（一）緒言

明治の文化は、その大體の特徴から見て、四つ程に區別され得る。第一は西洋崇拜を根底にした明治文化建設の時代で、年代からいふと初年から二十年前後までであり、第二はその反動期で、所謂國粹主義が盛んになり、それが教育、宗教、文學、政治等の種々なる方面に種々ある形をとつて現はれた時代で、二十六七年頃まで、第三は日清戰爭に依つて國民的自覺を強められた時代で、所謂國民的自覺期で、時代でいへば日露戰爭の前後まで、第四は、日露戰爭に依り、世界的市民としての自覺を強められ、從つて種々の自由思想が生じて、それが文化の諸相に濃淡種々なる影を投げた時代である。この明治文化の全部に亘つてこれを述べることは、この小論文では到底つくせないことであるから、茲ではたゞ發祥時代、即ち西歐崇拜時代の明治文化について、簡單な紹介を試みて置かうと思ふ。外人が遙々海を越えて日本へ來て、西歐文化の移植に貢献したのも、主としてこの初期の明治文化建設時代である。從つてこの時代の文化の一斑を述べることは、やがてさういふ外人功勞者を記念するよすがともなるであらう。

（二）物質文明の建設

明治維新の革命は、一言でつくせば、我が國に於ける大きなルネッサンスである。即ち精神的文化を取除いたルネッサンスと云つて差支へなからう。そしてその根本精神は、云ふまでもなく、歐洲に於けるルネッサンスの根底に横はつてゐた精神、即ち自我の解放と、それを邪魔する偶像の破壞とであつた。政治的には封建制度の破壞であり、同時に自治制度乃至民本主義（デモクラシー）の確立であつた。社會的には、永らく支那文明に培はれてゐた、そして僅かに出島の一角を通して西歐の文明の香ひをかいでゐたに過ぎない鎖國的野蠻性を西歐文化の吸收に依つて、發撫し、以て進歩と自由との實現を期することであつた。

それ故に、凡ての社會組織や政治組織は大改造を加へられて、物質文明は驚くべき變化を遂げた。幕末以來動き出した新潮流は、忽ちにして大奔流、大激浪となつて、舊物舊慣を押流し、舊制度を見る〳〵うちに破壞しつくした。時にこの大潮流にさからつて流れようとする河流がないではなかつた。けれども大潮流の前には、その力恰かも雨樋を傳ふ雨水に等しく、結局は新潮流の眼ざましい勝利となつた。明治文化の基礎は全くこの新潮流に掉したものに外ならぬ。そしてこの潮流を具體化したものは、明治大帝の宣せられた五個條の御誓文である。この御誓文中には、明白に、近年になつて暫りに問題にされた、又現にされつゝある民本政治、普通選擧等の政治概念の萠芽が含蓄されてゐるし、又文化運動の根本精神が遺憾なく發揮されてゐた。既にかやうな新しい革命運動の精神が、大廟の奥所から現はれたのに加へて、當時の政治に參與したものは、悉く新潮流に浴した三條、岩倉の諸公卿に、大久保、木戸、伊藤、大隈等の俊傑ぞろひであつた。彼等は等しく堂々天下に恥ぢざる社會革命家であつた。今の警視廳あたりの眼から見たら、何れもそのまゝにしては置けぬ暴徒であつた。かゝる人々の手に依つて、先づ政治上、財政上の大改革が行はれた。次には社會上、教育上の大改造が斷行された。

新政府樹立の當初にあつては、それは名實相伴つてゐたといふ譯に行かぬ。財力（パース）と武力（スールド）とは依然として諸侯の手中にあ

つて、新政府は全くの無力であつた。依つて政府は公議輿論を後援とし、明治四年に、版籍奉還、廢藩置縣の大改革を斷行した。これに依つて天下の實權は始めて朝廷に歸し、維新の功業は完成を見るに至つたのである。かくその基礎が確實になり、實力を握つた新政府は、諸種の改革事業にこれ日も足らぬ有樣であつた。今それ等を一々列擧することは到底困難である、故にたゞ文化史的見地に立つて特に意義あるものと思はれるもの三四を示すにとゞめて置かう。穢多非人の稱が排されて新平民となつたのはその一、僧侶の肉食妻帶蓄髮が許されたのはその二、人身賣買の禁令を發し、僕婢娼妓の年期を限り、人身賣買に類似のものを解放したのはその三、從來忠臣孝子の美擧として無暗に奬勵せし復讐の擧を禁止したのはその四、外人との婚約を自由にしたのはその五、更に六、七と擧ければきりはない。そしてこれ等の禁令斷行ぶりは、人民の手前をはばかりながら提案する今日の政府の措置とは雲泥の差で、實にキビ〳〵したものであつた。例へば藝娼妓解放令の如きは、徹底を通りこして、寧ろ奇拔に近かつた。即ち、娼妓藝妓等雇入の資本金は賦金と看做す故に右より苦情を唱ふる者は取糺の上其金額を取上げべき事。娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者にして牛馬に異ならず人より牛馬に物の返辯を求むるの理なし故に從來娼妓藝妓へ貸す所の金額等は一切債る可らず右に付ての貸借訴訟は總べて取上げざる事。人の子女を養女の名目になし娼妓藝妓の所業を爲さしむるものは嚴重の處置に及ぶべき事。

かやうに消極的には從來の謂れなき階級的差別を徹し、非人間的差別を廢し、個人の自由を認めて、無意味なる習俗慣例を捨てた。これと同時に積極的には、西歐文明の利器を以て新日本の裝飾とすべく大いに努力した。維新の大業を畫策し實行した當代の大立物が、あらゆる進歩の指導者となつたのは、分りきつたことである。彼等は知識的にも優越してゐたので、自然指導者の役目を演じたのである。即ち彼等は歐米漫遊に依り知識を啓發される機會を既に得てゐたからである。而かも國民は萬事を政府當局に依賴する習慣を未だ失つてゐなかつたのである。しかし彼等が輸入につとめた文明の利器は、永い鎖國の夢に閉されてゐた眼には、餘り眩ゆく見えた。正直にいへば、政府の改革の方が國民のそれに對する

用意よりも二歩も三歩も進んでゐたのである。その結果は、結婚と葬式とが一緒になつたやうな混亂と滑稽とが到るところに演ぜられた。しかし政府はそんなことには頓着しなかつた。盛んに禮を厚うして外人を聘して、或は新事業の調査に當らしめ、或は新知識の普及に盡力させ、或は實地に諸種の制度施設を行はしめた。先づ鐵道の敷設、電信の架設、燈臺の建築及び海軍の組織等には主として英國人が招かれた。當時陸蒸氣といはれて怪物視された汽車の如きは、時の英國大使サー・ハリー・パークス、清國關稅總裁ホレシオ・ネルソン・レーの建言なかりせば、明治五年に於いて京濱間にその姿を見ることが出來なかつたかも知れぬ。鐵道開通の効績は、實にこの英人の建言と、それを採用した伊藤公と大隈侯とに歸さるべきである。更に法律の條正、戰略戰術の訓練は主として仏蘭西人に一任された。佛の法學者ボアソナードが民法編纂に貢獻したこと、ガンベグロースが警察顧問となり、佛國法典を嶺員に講授したことは、誰も知るところであらう。教育事業、郵便制度の組織、農業の改善、及び殖民の業は、專らアメリカ人の監督するところであつた。醫學の教授、商法の編纂、地方自治制度の作製、陸軍將校の養成はドイツ人がその任に當つた。彫刻、繪畫の誘導にイタリー人が與つて効のあつたことはいふまでもない。斯くして日本の文明は、日一日、刻一刻と歐米風を攝取するに至つた。當時の偶語に、『さんぎり頭を叩いて見れば、文明開化の音がする』といふのがあるが、これなどは最もよく時代の風潮を傳へたものである。羽織袴下駄の服裝が洋服靴と變り、悠々たる驛路傳馬は汽車汽船と化し、ぴたんこな日本家屋の間には洋風の建築物が聳立するに至り、日本風の食物に俄かに西洋料理が入り來るといふ風で、凡てが新舊、東西雜然紛然であつた。『洋服に下駄とかけて猫と犬と解く、心はニヤワン』式の不調和不自然が至るところに行はれたことはいふまでもない。しかし西洋風の新文明が巧みに同化され得るものか否か、日本の特色慣習を全く知らない異邦人等が樹てた制度に果して日本が順應し得るか否か、そんな事はてんから問題ではなかつた。しかし國民は在來の傳統や習慣にも未練があつた。そこで自然に複雜な二重三重の生活を送らざるを得なかつた。エンサイクロペディアはその間の消息を次のやうに傳へてゐる。曰く、

『彼（日本人）は勤務時間には洋風の美しい服裝をしてゐた。けれども一度役所を出るか、街路を去るかすると、忽ち獨特の氣持の好い繪もどきの着物に着換へるのであつた。裝麗な家屋が洋風に倣つて建築され、家具がしつらへられた。けれども必ず離れ座敷がついて、それには床の間や緣側や疊や障子があつて、依然として昔ながらの傳統が重ぜられてゐた。折々はビフテキ、ビール、「葡萄酒」、ナイフ、及びフォークが試食試用された。けれども飯櫃や箸やが昔通り日常生活の場所を占めてゐた。』

この雜然紛然たる不調和は如何なる改造期にも見られる變態現象である。新しい酒をもるべく未だ新しい器の出來ない時代に於いて見られる過渡的現象である。しかしこれは見樣によつては、エンサイクロペディア編纂者のいつてゐるやうに、『日本人は鐵道、汽船、電信、郵便局、銀行、諸機械の如き外國文明の利器を採用したとはいへ、又西洋の學術を、大體に於て西洋の哲學を攝取したとはいへ、又歐洲の法制學の長所を認めて、これに從つて自國の法律を制定したとはいへ、決して彼等獨得の生活樣相を捨てたり、彼等の個性を失つたりはしなかつた。』と善意に解釋することも出來る。しかも同じ編纂者がいふほどに、傳統や信仰や習慣を極端に破壞しなかつたかどうかは甚だ疑問である。舊物破壞の斧は、舊道德、舊宗教は勿論、舊文學舊美術にも及んだ。修身教科書に全く國體を異にせる外國人に依つて書かれたものを採用したことは人のよく知るところである。男女交際論、結婚の自由等が盛んに論ぜられたことも吾々の記憶に鮮かである。又森有禮と廣瀨阿常とが始めて西洋流の結婚法に從つて婚姻したことも、熟知のことである。從來の儒教佛教は新文明の開發に適せずとして排せられ、基督教の宣傳が盛んに行はれた。文學の如きは、物質文明の建設に忙はしい時であるから全く顧みられず、特に太平閑日月の間に生れた戲作の如きは、全くその價値を失つて、僅かに新文明の形骸を捉へて、これを戲作風に表白した假名垣魯文のものなどが、多少とも讀まれたに過ぎなかつた。神社佛閣にして破壞されたものがどの位あつたか知れぬ。芝の增上寺や奈良の興福寺の五重の塔さへ無用視されて、まさに燒き拂はれようとした。上野の寛永

寺の庭を菜園にしろといふ說さへあつたときく。古書古畫の類でも、今日では數百萬圓にも及ぶものが、紙屑同樣に扱はれ、甚だしきに至つては團の用にさへ供されたといふ風であつた。

舊物破壞の斧は實に素晴らしいものであつた。或は今のロシヤのボリシェヴィキー以上であつたかも知れない。赤化も赤化、極端な赤化が、今から五十幾年か前には我が國で行はれた。それなのに、吾々は、その時代の大破壞の事業のことはすつかり忘れてゐる。明治創業時代には、徹底的な破壞事業が、弄具の樣な爆彈を持ち廻つたり、杖銃を振り廻したりする現今の社會主義者の手に依つてではなく、堂々と政府の手でどし〳〵行はれたのだ。これに比べると、今日の社會改造の運動の如きは、寧ろ甚だ手温るいといつて好い位である。社會改造論なども時々耳にするが、まことに不徹底である。明治初年に於ける徹底した改造論の二三を擧げるなら、ローマ字論だ、自由結婚論だ、基督教化論だ。

ローマ字問題は、今尙ほ未解決の問題として時に識者の間に論爭が戰はされてゐるが、これは決して最近の問題ではない。抑々ローマ字は明治のずつと以前からあつたものであるが、明治二年になつて、南部義範なる者が、國字を廢してローム字にせよといふ議を始めて提唱した。しかも彼の說は、詔勅や法律の文に至るまでローマ字にせよといふ極端な論であつた。但しローマ字採用を主張した彼の建白書が漢文であつたことは、皮肉の感なきを得ない。彼に續いては、西周がその有名な主唱者であつた。今日、婦人問題の中心になつてゐる自由結婚論なども、既に明治の初年からその後數年に亘つて盛んに論議對究されたものである。三田の福澤諭吉が、一度人間平等論、男女同權論を唱へ出すに及び、女子の獨立自由といふことが問題になり、在來の如く奴隷的生活に甘ずることが如何に不合理であるかゞ明白に論究された。その結論として、結婚の自由が主張された。さきに述べた森有禮はその主張の第一人者、西周亦其の說に加はつた。

更に突飛に思はれた改造論は、基督教を以て國教とすべしといふ論であつた。基督教は、世間周知の如く舊幕時代には非常な迫害を受けてゐた。けれども岩倉右府が歐米漫遊から歸朝すると共に、禁制の高札は撤回され、明治五年には、橫

濱に教會さへ設立された。こゝに該教發展の端緒が漸く開かれることになつた。こゝまで漕ぎつけるにあたつて、開成校のフルベッキ、タムソン、ヴィダの諸氏、札幌農學校のクラーク氏、橫濱脩文館のブラウン氏、熊本英學校のゼンス氏、弘前東奧義塾のイング氏、福井學校のグリフィス氏、中村正直の同人社にあつたカックラン氏等の傳道上の努力が如何に功を奏したものであるかを忘れてはならぬ。尙ほ又、吾々は明治三年の長崎近村の耶蘇教騷動に關係した故大隈侯の感想を思ひ出さずには居られない。侯の曰く、『官の威光を以て、區々たる二八の少女に臨み、嚴然として其信仰を捨てよと命ずるに、何條違背することのあるべきぞと思ひしに、其弱々しげなるにも似ず、不思議にも毅然として更に動かず、お上を恐れざる不屈物と怒つて彌々强迫すれば彌々固し、此に於てか余は宗教なるものは、到底政權を以て動かし難きものなることを發見したり』と。この確信が、政府當局者をして、基督教の禁壓を解かしむる原動力の一となつたことは、今から想像するに難くない。

爾來、基督教は、尙ほ樣々な迫害や反對を蒙つたに拘らず、一つには岩倉右府と共に歐米を漫遊した基督教信者新島襄氏の如き熟烈な信仰家があり、又他方には破壞につぐに破壞を以てし、人の不安動搖その極に達した時代の常として、新信仰、新宗教に對する一種の憧れがあつた爲めとで、基督教は異常な勢力を占めることになつた。而かも當時の基督教の信者といはれた橫井時雄、海老名彈正、山崎爲德、浮田和民の諸氏は、何れも一面に於ては學界の先覺者、指導者であつた爲めに、基督教は忽ちの裡に、思想界を導く新しい理想の靈光となつた。事情既に斯くの如くであつて見れば、基督教を新國教とすべしといふやうな說の出たのも、決して不思議ではない。

以上で、舊物破壞が如何に徹底的に行はれたか、政治上、社會上の施設制度が如何に全的に改造されたか、又西洋の物質文明が如何に崇拜の的となつて、その輸入移植に全勢力が傾倒されたかといふことが、略々理解されたであらう。明治維新の大業は、舊文明を破壞して、その跡に西洋の物質文明を建設しようといふ努力の結晶に外にならなかつた。西洋崇

拜熱、歐化主義が最後の目標であるかの知くに思はれた。そしてこの西洋崇拜熱、歐化主義は明治十年代になり、益々極端となり、政府の外交政策の御都合主義と相俟つて、終に、二十年最後の鹿鳴館の假裝舞踏會に於てその極點に達した。この假裝舞踏會（ファンシー・ボール）は、當時の歐化熱を示すシンボルで、その馬鹿騒ぎに至つては、全く兒戯に類するものであつた、故伊藤公や故大山元帥や故山縣公などが田舍芝居の役者と間違へられるやうな假裝をして踊り狂つて、茶目の限りを盡したといふ記事が、その當時の時事新報に面白く生々と描き出されてゐる。既に政府當路者がさうであつたから、下萬民がこれに倣つたことは別に怪しむに足りぬ。大學生と女學生とが一緒になつて英語の忠臣藏を演ずるとか、束髪や女の洋裝が流行するとか、或はローマ字會が組織されるとか、その他社會の各方面に於て西洋心醉熱の現象が、何處にも見えた。何事も西洋式でなければならぬ、食物はパンに限るといひながら、而かもパンがまだ何處の店にもないので、仕方なく饅頭の皮を蒸させて、これをパンと思つて喜んで食つた學者などもあつたといふ。伊達にならまだしも、西洋人に似せるといつて燒鏝をあてゝ頭髪を縮らした痴漢もあつた。眼の玉を碧く染めることが出來ないといつて怨む阿呆者がゐた。好いお老婆さんが、年甲斐もなく、娘に手を引かれて『イット・イズ・エ・ドッグ』を口にするに至ては、本人が眞面目であればあるだけ、滑稽沙汰の極みである。

斯かる西歐心醉熱、歐化主義は一般の精神界、學術界にも甚大な影響を及ぼした。その當時の學術界、精神界が、如何なるものであつたかを知ることは、やがてその時代の文化の姿を更に一層よく理解することである。

（三）學術界の傾向

前にも述べたやうに、維新の革命は、何よりも先づ物質文明の改造であつたし、實際生活の刷新であつた。從つてそれを指導し若しくはその根底となつた思想や學問も亦た當然功利的な、實用的な、所謂直接吾々の生活に役立つ種類のもの

でなければならなかつた。人生の祕奥を極めた深淵の哲理よりも、帳簿の附け方、算盤のはじき方を說いた實用書の方がどんなに有難かつたか知れない。今日の言葉でいへば、實用主義の學問、功利主義の說話が、一般の學術界を風靡してゐたのである。そして常に野にあつて、この常識的、實用的、功利的の傾向を代表してゐたのが、三田に於ける福澤諭吉氏である。實に氏は實用主義の學問の唱導者であつたと同時に、明治の物質文明に確實な基礎を與へた大恩人である。福澤氏は明治以前既に慶應義熟を起し、專ら英米の實利實益の學風を以て、天下の學生を指導し、政治道德風俗習慣の古きを打破して、一意新文明の建設につとめた。講堂で直接未來ある學生を敎導すると同時に氏は又多くの著述に依つて西洋の學術、道德の普及傳播に力をいたした。數ある著述中『窮理圖解』（明治元年）、『世界國盡』（明治二年）、『西洋事情』（明治二年）、『學問のすゝめ』（明治五年——九年）、『童蒙をしへ草』（明治五年）、『文字の敎へ』（明治六年）等は、最も多く讀まれたものである。福澤氏の知識は決して深遠とはいへなかつたが、實に廣汎であつた。西洋の地歷にも科學にも思想にも一通りの理解は持つてゐた。物質文明の建設時代にあつては、實にかゝる學者こそ必要であつた。恰かも新開地に於いては、精巧なる專門的な品物を商ふ店よりも、何でも屋の雜貨店の方が、より必要である如く、その當時にあつては、一人の深い哲學者、一人の偉大な政治家、一人の熱心な科學者よりも、政治にも經濟にも法律にも地理にも歷史にも敎育にも一通りの知識を具へた者の方が、どの位役立つたか知れぬ。福澤氏は明かにさういふ人の代表的典型であつた。氏は『學問のすゝめ』の中にいふ。

『學問とは唯むづかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂しみ、詩を作るなど世上に實のなき文學をいふにあらずこれ等の文學も自から人の心を悅ばしめ隨分調法なれども古來世間に儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべき者にあらず古來漢學者に世帶持の上手ある者も少く和歌をよくして商賈に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり畢竟學問の實に遠

もして日用の間に合はぬ證據なりされば今斯る實なき學問は先づ次にして專ら動むべきは人間普通日用に近き實學なり。』これが氏の根本思想である。飽くまでも物質上の幸福を基礎とした功利主義の學問、經濟主義を標榜した學說に依據した點に時代を支配した力があつたといふべきである。特に氏が、明治の新政府が財政制度に重きを置いた如く、經濟問題に力點を附したことは、實に卓見であつたといはねばならぬ。

しかし實用主義、功利主義の傍に、理想主義の傾向が芽生えてゐたことを記憶にとめて置く必要がある。中村正直氏の同人社、新島襄氏の同志社の活動は、明かに理想主義の傾向を物語るものである。中村正直氏は、改革家といふよりも、寧ろ學殖深き一個敬虔な君子であつた。在來の儒教と基督教とを調和したものが、此の思想の根底であつた。氏の教へるところは、刺戟的ではなかつたが、奥深く、人格の養成上から見て、青年に感化を與へた點は實に偉大な貢獻である。常に人生の理想的方面、精神的方面を掲げて、暗に福澤氏と對抗した。氏には譯書が多く、就中、『自由の理』(ミルのオン・リバーティ)や『西國立志篇』(スマイルズのセルフ・ヘルプ)、『西洋品行論』(スマイルズのキャラクター)などは洛陽の紙價を高めたものである。氏は又、『同人社文學雜誌』を出して、詩や文章を蒐め、且つ西洋の新知識を紹介した。漢文に長じてゐた爲め、西洋の思想を、頑迷固陋なる漢學者の間に擴めるには甚だ好都合であつた。

精神的方面に一層強い新しい光明を齎したのは、何といつても基督教の傳播である。前にも述べたやうに基督教は明治になつてもひどく虐待されてゐたが、明治五年に禁制の札が撤廢されると同時に、次第にその勢力を挽回し、明治八年に新歸朝者新島襄氏が京都に同志社を設立するに及んで、同宗の者は俄かにその數を增した。世に所謂神學校なるものが各地に出來たのも、又基督教に關する雜誌などの刊行されたのも、皆この前後である。基督教の宣傳及び傳播の經路については、記述を宗教史に讓るとして、吾々はその文化史的若しくは文學的價値を少しく探つて置く必要がある。基督教は元々、人類生活の理想的方面、所謂人道、正義及び博愛を標榜した理想の教へである。この人類の大目的に合致するもので

ければ、如何なる行爲も業蹟も無價値なりとされた。この基督教の根本原理は、明かに福澤氏の實利實益主義とは遠つたある理想へと、人心を向けて行つた。斯くしてそれは當時の人々の心に理想主義の根を植ゑつけた。精神生活の光明、さういつたやうなものを、實利に傾いてゐた人々の心が、動搖不安に襲はれてゐた人々の胸が、暗々の裡に感じてゐたことは明かだ。

更に基督教の傳播は、日本人をして西洋文學殊に英文學へ近付ける方便となつた。バイブルそのものが詩的であり想像的であつて、自づから立派な文學であつて、それを味ふには、是非とも語學の力を養はなくてはならぬ。語學の力を養ふにはこれに關聯した種々の英文學書を讀むに如くはないといふところから、英文學研究の端緒が開けた。從つて聖書は、宗教上の教義を習ふものであると同時に、文學上の趣味を引き出す大きな源泉であつた。勿論基督教の影響は直接當時の文學に影響を及ぼしはしなかつたけれども、二十六七年頃になつて文藝の上に立派な一つの花を開いたロマンティシズムの遠い源流であつたことを思へば、これを輕々に看過することは出來ない。

これを要するに、福澤氏の三田派は飽くまでも實際生活を導く直接の羅針盤となり、中村氏の同人社、新島氏の同志社は、海路を明示した地圖の如きものとなつて、共に人生の行路を圓滑にした。一方は目前の實行に重きを置き、他方は遠く理想を目標とした。二つながら人生を導く力である。吾々は、功利主義、實用主義が、混沌たる實際生活を締めくゝる上に於いて大きな力のあつたことを認めると共に、動搖不安の海に漂はされてゐた人々の心に精神上の糧を與へて、後年の文學を發展せしめる基礎となつた精神主義、理想主義の傾向に對して感謝することを忘れてはならぬ。

建設時代の社會に於いて、最も華々しい活動を示すものは、いふまでもなく政治の舞臺である。明治文化の建設時代に於いて、最も人氣のあつたのは、そして亦最も成功的であつたのは、木戸、大久保、伊藤、大隈、西鄕等の少壯政治家であつた。わけても初期の革命的精神と進取的活動性とを失ひかけて保守に傾きつゝあつた政府に對して革命の烽火をあげ

た西郷が自由に憧れ進歩を理想し、且つ未來の國家の料理人たることを空想してゐた青年等の偶像となつたことはいふまでもない。『書生々々と輕蔑するな、西郷隆盛もと書生』の流行唄さへあつた位だ。政府の要路にあるものは勿論、親讓りの大きなくすぶつた紋のついた羽織をひつかけて、親の脛をかぢつて、下宿の四疊半にごろ〳〵してゐる書生も、その日その日の稼ぎに追はれてゐる商人や、職人や俥夫までも、口を開けば必ず政治を談じた。その當時は人民は、今日の世人よりも遙かに政治的國民であつた。かく政治思想は廣く民衆の間に普及し、その結果は政府の政治から人民の政治への推移に對する熱望となつて現はれた。そしてこの結果が導かれるには內外二つの原因があつた。一つは政府要路者の保守的傾向の漸加に對する進步的革命熱の激層であり、今一つは佛國流の自由思想の輸入である。前者は西南の役を試金石として、劍の上では保守派の勝利を示したが、實質に於いては終に進步派の勝利となつた。卽ち十年の征南役は、反政府側をして暴力を以てしては到底政府に反抗することの不可能なることを實感させた。玆に於いてか彼等は武器にかへるに文章言論を以てした。實に佛國流の自由思想は、その文章言論の內容たるべく、好個の資料であつた。

當時佛國から輸入された思想は、主として十八世紀の思想家、社會改造家たるルソーやボルテールやモンテスキューなどの政治思想で、何れも佛蘭西革命の導火線となつたものである。わけてもルソーの『民約論』は、自由思想を抱いてゐた進步主義者の寶典であつた。この書は中江篤介氏の手に依つて、明治十五年に漢譯された。馬場辰猪氏は『天賦人權說』を明治十六年に出した。箕作麟祥が佛國民法の飜譯を出して、人權論の普及浸潤に貢獻したのもその當時であつた。その他、久しく佛國巴里に留學してゐた西園寺公は、歸朝するや、自ら『東洋自由新聞』を發刊して、自由民權の急進思想を鼓吹し、田中耕造氏は同じく新思想の講述に於て、それ〴〵多大の效果を收めた。

無鐵砲といへば無鐵砲、無批判といへば無批判に相違なかつた。永い間德川幕府の勢力下にあつて、人民の權利が全く抑壓されてゐたのに對し、明治維新の大業は、一擧にしてその封建制度を打破して、人民に自由の天地を與へたとはい

へ、其處には早くも形の變つた選ばれた人々の橫暴史の第一ページが開かれようとしてゐた。否な實際開かれてゐた。この橫暴史を綴らざらしめんためには、どうしても佛國流の自由平等の思想の大劇藥が必要であつた。だがこの大劇藥を緩和すべく、政府が極力手を盡したことはいふまでもない。武器と武器との爭ひなら、政府方に充分の準備があるから先づ安心であつたが、文章言論といふなか〳〵に切れ味の見事な武器に對しては政府も一寸たぢろいだ氣味で、窮餘の一策としてこれに酬いたのは、峻烈な武斷的壓迫である。世にいふ檢束騷ぎはその頃からの產物である。斯くして維新當時の改革の特色は次第に色あせて、褊狹な藩閥や官僚の思想が、政界に橫暴を極める時代となつた。只に政界のみならず、一般社會に於ても同樣で、維新當時士族にして商業に轉じた者の生活の憐れむべき凋落に引きかへ、官吏階級の幅をきかせたことは凄じかつた。當時の俚謠に『鬚を生やしたが官員ならば、猫や鼠は皆官員』といふのがあるが、この事實を皮肉に見たものに外ならない。官吏と共に擡頭し出したのは實業家である。新政府はその財政難を切りぬけるためには、有功な實業家の後援による必要があり、從つて藩閥と彼等との間には早くから腐緣が結ばれてゐた。それに保護主義の產業政策が進行するにつれても、彼等の位置は自づから向上せざるを得なかつた。政府が十三四年頃から干涉主義を捨てゝ、官業を民業に移すに及び、彼等は全く獨自の天地を開拓し、こゝに實業家と官憲とによる資本主義成立の端が開かれた。

しかし如何に官僚系、藩閥の壓迫が大であるにせよ、輿論の聲には勝てず、種々の障害、種々の經違を經て、終に二十二年自由民權思想のあらはれなる帝國憲法の發布を見、翌二十三年には國會の開設となつた。我が國民は、始めて、政治的奴隸の境遇から自由民になつたのである。社會的、政治的に自由平等人となつた譯である。近代文明の大道を濶步し得る資格を始めてこれに依つて得たのである。先づこれを以て明治文化建設の第一步の終りと見てよからう。

(四) ジャーナリズムの一斑

明治以前の日本には、完全な意味のジャーナリズムはなかつた。社會上の出來事若しくは政治上の法令などを報道する機關が全然なかつた譯ではなく、德川時代には、殿中御沙汰書とか、封廻狀とか、祕密公文書とか、外國事情とかいふものがあつたにせよ政府内若しくは上流社會の一部に行はれたに過ぎぬ。民衆の間に行はれてゐたものには、僅かに讀賣といふものがあつた位である。で、始めて新聞紙と名のつくものが出來たのは、文久年間のことであるらしい。文久元年に、幕府から米國へ派遣された小栗上野介といふ人が、始めて歸朝して新聞發行の建議をしたが、容れられなかつた。そのうちに、民間で、『バタビヤ新聞』なるものが生れた。これは、和蘭人が爪哇のバタビアから持つて來た新聞を編譯したもので半紙數枚の木版刷であつた。しかしこれは地方的興味がなかつた爲め一號を出したゞけで廢刊になつた。續いて元治元年には『新聞紙』(月二回)といふのが、横濱で岸田吟香氏に依つて發行された。この新聞は外國の記事と同時に國内の記事をも載せた。これも間もなく廢刊になつた。かういふ有樣で時代は明治へと進んで來た。そして明治元年には亞新聞が十種ばかり一度に生れた。先づ第一に、『太政官日誌』が出た。これは今日の官報の前身で、政府と民衆との掛橋としての役目をつとめた。續いて福地源一郎氏に依つて『江湖新聞』(四六版小冊子)が發行された。時事論、政治論をのせた恐らく始めのものであらう。盛んに薩長攻擊をやり、政府攻擊をした爲め、終には政府の忌諱に觸れて、新聞は發行禁止、主筆は監禁となつた。新聞紙取締法が設けられたのはこの時である。その他で名高いのは、岸田吟香主筆の『もしほ草』(四六版小冊子)などである。爾後、新聞の要求は次第に民衆の間に擴まり、明治四年には、『新聞雜誌』(四六版)が木戸孝允監修の下に、活字版、日刊新聞の嚆矢たる『横濱毎日新聞』(後に東京横濱毎日新聞と改題)が、島田三郎、沼間守一氏等の手に依り、翌五年には『郵便報知』が小西義敬氏に依り、七年には『朝野新聞』が成島柳北氏に依り、八年には『新聞雜誌』が改題して『曙新聞』として岡本武雄、末廣鐵腸等に依り、それ〴〵發行された。是等の世に所謂五大新聞が各々その陣容をとゝのへて、議論縱横攻守矛を交へるに至つて、始

めて新聞雜誌はジャーナリズムの價値を發揮する事になつた。かうして新聞紙の效果は漸く世間に知られて來た。けれども尙ほ以上の諸新聞が取扱ふ材料は主として政治とか上流社會の出來事とかに限られてゐた、未だ一般民衆に殊に婦人に對しては、閉ぢられた書物であるに過ぎなかつた。何處にかまだ學者の臭味があり、上流階級の冠がくつついてゐた。この窮屈な、政論的、貴族的趣味を打破して、一般の民衆に近付いたのが、『讀賣新聞』(明治七年、鈴木田正雄氏によつて創刊である。これは文學も漢字には假名を振つてなるべく容易にし、家庭的の記事も加へたので、中流階級に歡迎された。次いで八年には『平假名繪入新聞』が高畠藍泉、落合芳幾等に依り、『假名讀新聞』が假名垣魯文に依り各々創刊された。これ等には、繪が這入り、それに、當時の劇作者の書いた戲作が續きものとして掲載された。斯くして所謂『三面記事』と新聞小說との先驅を示すに至つた。こゝで吾々が注意すべきことは、これ等の新聞紙が、當時の戲作者の作品をのせたことである。卽ち明治の第一期の文學中特に舊文學の餘光を代表する文學は、これ等の新聞紙に依つて僅かに餘命を保つてゐたのである。

新聞については以上に止め、次には雜誌界のことを一言しよう。明治の初年にあつては新聞と雜誌とは名目こそ違へ、實質や體裁は大同小異であつた。卽ち新聞といつても今日の如く決して日刊ではなく、月二回とか週刊といつた風なもので、内容も亦多くは論說で埋まつてゐた。さういふ譯で、始めて今日見る如き雜誌らしい内容と體裁とを持つたものは、明治七年に明六社から出た『明六雜誌』(四六版)である。これには所謂明六社の同人が筆を揃へて執筆した。その同人中には、森有禮を初め、西周、加藤弘之、西村茂樹、大槻文彥、津田眞道、中村正直、福澤諭吉、箕作秋坪等當時の錚々たる新人が顏を並べてゐた。何れも新思想を抱いて、社會改造の氣運を促進しようとつとめた點から言へば、差當り今日の『改造』格であらう。尙ほその他で注目すべきものは、『洋々社談』(大槻、小中村等執筆)、『共存雜誌』(樋口藏廣主筆)、『同人社文學雜誌』(中村正直)、『扶桑雜誌』『近事評論』『評論新聞』『穎才新誌』等であらう。野崎文夫の『團々珍聞』(大

版）といふやうな滑稽雜誌も、隨分廣い讀者を持つてゐた。これ等諸雜誌の內容についても一々實例を擧げて說明すると可なり文化史的な興味も湧くのであるが、今は紙數が許さないから、別の機會に俟たう。以上新聞雜誌界を總括して見ると、明治十年頃までのそれは、一方に於ては政府攻擊の具として大いに役立ち、他方に於ては、一般民衆の享樂機關として大きな役目をしてゐることに注意される。更にそれが政黨の具となり、コンマーシャル・ジャーナリズムとなつたのは、後のことに屬する。

(五) 文學上より見たる文化相

吾々は最後に、以上に述べた明治建設期の文化と文學との關係交涉を見、尙ほ明治新文學の發生の由來を述べて、この小論を終ることにしたい。

文學は時代の鏡だといはれてゐる。確かに眞理である。それ故、文學は常に最も貴重な文化史の資料とされる。卽ち文學を通じてその時代の特徵を知り、その時代の樣相を通じて文學の傾向を知ることが出來る。然らば明治の建設時代には果して如何なる文學が存し、その文學は何を表現してゐたか。

いふまでもなく文學は精神生活の頂上に咲く花である。從つて物質文明の建設に忙はしい明治の初期に、文學が榮えたとは想像されない。事實殆ど文學と名付けるに相應はしいものはなかつたといつて好いのである。精神生活の全部は擧けて、日常生活を導く手段方便をつくるために費された。當時の知識階級者は、その仕事の全部を實學に供して、毫も惜むところがなかつた。又一般の民衆も花をめで歌を詠むなどゝいふ呑氣な氣分にはなれなかつた。かういふ譯で、明治維新から十年頃までの日本は、文學上の暗黑時代であるといへる。勿論、全然文學がなかつたとはいへない。だが、それが明治の新時代を代表する文學であると誇るに足るものはなかつた。あるものは、たゞ德川のデカタン時代から餘喘をつないで來た戲作文學の殘黨のみであつた。例へば假名垣魯文とか萬亭應賀とか山々亭有人とかの戲作が僅かに存してゐたに過ぎぬ。それが十二三年頃から政治思想、わけても佛國流の自由民權論が盛んになるにつれ、外國の革命小說の飜案があらはれて、世間の人氣に投じ、やがては靑雲をのぞんでゐる靑年の血をそゝるべく所謂政治小說があらはれるに及んで、文學界に新空氣がたゝよひ、そして終に明治十八年に至り、坪內逍遙が『小說神髓』を公けにして廣く泰西の新しい文學思想をあさつて、これを元にした文學上の新觀念を明かにし、同時にその新文學觀念の見本たる小說『書生氣質』を十八年から十九年にかけてあらはし、こゝに始めて明治文學の曉鐘が打鳴らされる事になつたのである。爾來、英國、佛蘭西、獨逸、露西亞等の文學が簇々紹介されて、我が文學界は今日吾々が接してゐる如き文學の園となつたのである。それ故大體に於て、我が明治文學も、他の文化と同じく西歐文學の模倣移植であるといつてよい。他の文化を外國に向つて誇ることが出來ないといふなら、恐らく文學も亦た西歐に向つて鼻を高くすることは不可能であらう。一體誰が鼻を高くしてやつたと突つ込まれる恐れがないと限らぬからである。

それは兎に角として、明治建設時代の文學としては、吾々はたゞ德川の殘黨文學と杜撰な外國の作品の飜案と政治小說とを有するに過ぎぬ。そして今日から見れば、その文學的價値は殆んど問題にならない。たゞ文化史的に見るとき、不思議にもこれ等の文學は尠からざる意義と價値とを帶びて來る。先づ第一に魯文の作がさうである。彼は本來なら德川幕府の倒崩と共に舊時代に置去りにされてしまう筈の作者であつたが、不思議にも時代の推移を見て、その趣向、その動搖、その精神に順應して行くだけの世才があつた。そこで彼は維新の革命に接するや、同じ戲作で飯を食ふにしても、今迄のやうなものを材料にしてゐたのでは到底駄目だと覺悟して、長い間持ちつゞけて來た革袋まで捨てるには忍びず、又捨てることも出來なかつたので、せめては中に盛る酒だけでも新しくして新時代の人々の口に合ふやうにしたいと考へたらしい。その境地から生れたのが『安愚樂鍋』であり、『胡瓜遣』であり、『西洋膝栗毛』であつた。これ等の作中に盛られた新

しい酒とは何であるか。當時の文化相そのものであつた。

既に述べた通り、その當時の文化相といへば、一にも歐化主義、二にも歐化主義、そして三にも亦歐化主義で、あらゆる制度文物、實生活の機關が歐羅巴臭味に中毒してゐたことを指すに外ならない。更に悉しく言へば、社會事情の眼まぐるしい變轉動搖、新舊思想の矛盾、風俗習慣の齟齬、半可通に基く滑稽といふやうに數限りがない。それらを巧みに自家藥籠中のものとして、彼は更にこれを一九や三馬から受けつだた革袋、滑稽諧謔の筆致に盛つた。

以上三篇中、最も弘く讀まれた、又最も文化的價値のあるものは、『西洋膝栗毛』である。これは、言ふまでもなく、十返舍一九の『東海道中膝栗毛』にならつて書いたものである。彼が如何にその時代の趣向に投じようとしたかは、次の凡例の言によく現はれてゐる。

『元祖十返舍一九が作なる道中膝栗毛が初篇刊行なりて世に流布せしは享和二壬戌の春にして當年を去ること既に六十九年に及べり。滑稽の妙逆旅の奇至れり盡せりと雖、所謂流行後れの類ひに落、今日の形勢に比すれば人情齟齬することのみ多かり。是に次で二世三世の一九等が膝栗毛あれども時は文政と隔り弘化嘉永と遠退きたれば今は昔となりにけり。僕年來の戯作の筆に口を糊せど滑稽の道に疎く笑語頗る不可にして斯る稗史を綴らんこと世の嘲を招くに似たれど活計を如何せん。』

或は又『この節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向をこらす』ともいつてゐる。舞臺を江戸にとるのは一九の時代に於てすら最早や古しとされたからこそ、東海道へまで乘り出した。魯文は、日本は既に新しい戯作讀物の舞臺とすべく餘りに陳腐と考へて、日本から英國のロンドンへ行く航路、それに沿うた港々、それからロンドンに舞臺をとつた。彼は勿論外國などへ行つたことはなかつた。『僕が文盲なる書は草冊子の外を讀まず何ぞ學ばん異邦の事情然れども文物盛典の德たる近世福澤先生を始め諸々の洋學先生が著述されし飜譯の書とほしからねばその階梯にとりつい』て出來たのが

『西洋膝栗毛』である。

本篇のプロットは、東京神田に生れた放蕩兒なる彌次郎兵衛北八の二人が、横濱の豪商大腹屋に連れられて、横濱から飛脚船に乘込み、船中や港々で種々樣々な滑稽、惡戯を試みながらロンドンへついて、博覽會を見物してそこ〳〵に歸る迄のことを綴つたものである。樣々の駄洒落、樣々の滑稽、樣々の惡戯のうちに、西洋の半可通が無暗に新しがつたり、まだ見ぬ新奇なものに觸れて驚倒し誤解し眩惑する有樣などがなか〳〵巧みに描出されてゐる。その他、彌次北二人が盛んになまつかぢりの漢語や英語等を使つてゐる點、(例へば『この頃漢語圖解なんづ捻り廻して人參具足』だの、『ヲット待つたり因循姑息の事駄郎』とか、『最午刻だぜチト腹が北アメリカだ』の如き、又二人が盛んに窮理を談じたり、文明開化の餘澤を讃美したりしてゐる點、何れも時代の反映たらざるはない。なまかぢりに覺えた國名を巧みに使ひこなして一齣の歌にしたものがある。一寸面白いから紹介して置く。

雪の普魯西(プロシヤ)も扨アメリカも馬車で通ふてインギリス。僕はこれほどホルトガル君はいつでも佛蘭西(フランス)か。浮世のギリシヤとたゞ印度。床をトルコの一夜着。エヂプトこちらへよらしやんせ。チヤイナ〳〵ととりすがり、おロシヤに見えるが戀の路ハアツトチリトン……

『西洋膝栗毛』につゞいて、廣く讀まれたのは、『安愚樂鍋』と『胡瓜遣』とである。これは西洋料理などが當時一時に流行し出し、尙ほ今迄は食へば罰があたるとか何とかいつて餘り人の口にのぼらなかつた牛肉が一般の食料となり、所謂牛店がそちこちに出來たのにつけこんで、作者が舞臺をこの牛店にとつて、こゝへいろ〳〵の人物、主として明治維新の革命によつて解放された平民階級のあらゆる種類の人物、書生とか、娼妓とか、鄙武士とか、大工とか、商人とかを拉し來たつて、文明開化を讃美させ、放たれた喜びを祝福せしめてゐる。今日でいへば小話を幾つも寄集めたやうなものである。半可通をふり廻して、傳信機(當時用ゐられた文字をそのまゝ)の話をする奴もあれば、風船の由來を物語る男もあり、

蒸汽車の有難味を解く者もある。『新聞好の生鍋』といふ一篇には、こんな面白い建言書があるといつて隣の客に讀んできかす男がある。その建言書なるものが振つてゐる。

『恐れながら書附を以て建言たてまつり候凡無用をして有用に充候義經濟專務御國益第一の義とぞんじたてまつり候人民毎戸炎夏の季に至り候ては一般に蚤を生ぜざるはなし此虫人身を刺傷し短夜睡眠を破り白晝の活計をさまたげ候而已にて實に無用有害の小虫と申ながら彼も億萬生靈の小數なり採用によつては有益の一端ともなるべく哉とぞんじたてまつり候……』

こんな風に說き出して、蚤は火にくべると音を發して死ぬ、このことから自分は好いことを思ひついた、即ち布令を出して各戸にこの蚤を取溜めさせ、これをば毎日十二時の刻砲の火藥代りにしてはどうか、無用を以て有用にあてる何と好い思ひつきではないかといふのである。福澤諭吉氏などに依つて說かれた實利實益主義の鮮かな反映と見て非常に面白い。

次に『胡瓜遺』は、福澤諭吉氏の『窮理圖解』をもぢつたもので、初篇上下二冊しか出なかつた。これも幾つかの小話を集めたもので、運氣の事附り開運の身上話とか食氣の事附り下婢の食亂とかいふ見出しがある。前二者と同じく、或は文明開化の餘澤に濕うて身代を興したり、半可通の知識をふり廻す男があつたりして、文化相の一面を浮立たせてゐる。

以上何れの作品も、これを藝術として見る時には甚だ愚劣なものである。その滑稽諧謔は遠く一九や三馬に及ばず、その布置結構は馬琴の足下へも寄りつけない。而かもその全體の印象をいへば、舊態そのまゝでその趣味は恐しく卑俗低劣である。例へば、『膝栗毛』には北八が上海か何處かで往來を歩いてゐてオワイ屋に突當つて糞尿まみれになるところとか、又は彌次公が香港の妙妓院で、溺器を水差と早我點して、その中の水を飲むとかの例は殆ど枚擧にいとまがない。又その描く事柄も大抵は淺薄皮相にとゞまつて實感として迫つて來ない。更に人物などに至つては、全く死物そのものが作者の滑稽味、諧謔味、諷刺味を傳へてゐるに止まり、全く蓄音機同然である。

しかしさういふものを書いた魯文その人、又はさういふ作品それ自身が最も明白に、その時代の西洋崇拜熱の淺薄さ文明開化熱に醉ふてゐる一般民衆の浮足振を示す恰好のカリケチュアである。この意味で彼及び彼の作品はその時代の立派な證券であるといへる。從つてその時代の社會的空氣、人心の歸趨、一般の風俗習慣を知らうとするものは是非とも一讀せねばならぬ。

明治十年の西南の役を境として舊文學の殘骸は全くその跡をたつた。そして政治思想、自由民權論の勃興と共に新文學の芽がボツ〳〵出て來た。

その當時の政治家又は政論家といはれる人々は、元よりその知識を英語若しくは佛語を通じて外國に求めた。かやうにして自由民權の思想を求めてゐる間に、彼等は端なくも英佛の政治小說、ロシアの革命小說等にめぐり合つた。それ等は、在來の殘黨文學とは思ひもつかぬ面白味のある、そして又彼等の革命思想をいやが上にもそゝるものであつた。そこで別に文學者といふ程でない人々、寧ろ政論家などがこれを飜譯して世に示すといふ結果になつた。『西洋血潮小暴風』(デューマのザ・メモアース・オブ・エ・フィジシャン)、『自由の凱歌』(同人のテーキング・バスチーユ)、『鬼戀々』『夢戀々』等何れも題材を佛國革命又はロシヤの虛無黨の叛逆等にとつた飜案物で、自由民權に關する寓意小說である。作者、飜案者には、宮崎夢柳、小室案外堂等があつた。だがこれ等はその文體が多くは戲作者のそれを離れること遠からず、眞に飜譯小說として明治の新興文學に繰入れることからは差控へなくてはならない。

そこで、小くとも明治らしい新裝をこらした飜譯小說を求めるなら、誰しも、明治十一年に始めてその初篇を出した『歐洲奇事花柳新話』に指を屈しなければならぬ。原著者は、今日の讀者には寧ろ『ポンペイ最後の日』の著者と言つた方が分り好いと思はれる、彼の英のロード・リットン、原作は『アーネスト・マルトレーヴァス』である。それは大政治家、大文學者たることを理想とする主人公アーネストが、樣々な人生の慘苦をなめ、困難に遭遇し、遂に永年の目的を貫いて身に

榮冠を得ると同時に、久しく見失つてゐた戀人を昔のまゝの貞操に於て見出し目出度く結婚するといふ極めて甘い物語（ローマンス）である。この作品は非常に廣く讀まれたものと見え、五六十代の人々に聞いて見ると、みんな面白く讀んだと言ふ。一體、何故そんなに廣く讀まれたのであらうか。それは言ふまでもなく、原作者その人が英國の大政治家であり又文學者であつたからである。單に文學者であるといふだけでなく大政治家といふことが、當時の青雲をのぞんでゐた青年の心を捉へたのであらう。

又この『花柳新話』は、明治の文壇に於ける飜譯小說の嚆矢として、吾々の注意すべき作品である。無論これ以前に於て飜譯文學がなかつたとは言へない。既に明治の初年に於てはシェークスピアの『ハムレット』が何人かの手に依つて、『西洋歌舞伎葉武列士』として平假名繪入新聞にかゝげられたといふ事實もあるし、又明治六年には渡邊溫の譯で、『通俗伊蘇普物語』が出たといふ事實もあるが、前者は殆ど原作の俤を存せず、從つて飜譯文學としての第一義を缺き、又後者は寧ろ文學してよりは童蒙訓として譯出されたのであるから、先づ純文學としての飜譯は、『花柳新話』であると見ることに、異議はないと思ふ。

『花柳新話』が一度人氣に投ずると、こゝに類似の飜譯が簇出した。先づ同じリットンのものでは、藤田鳴鶴譯『繁思談』某氏譯『綺想春史』（ポンペイ最後の日）坪內雄藏譯『慨世史傳』（リエーンジ）や、同じく政治家の崇拜の的になつてゐた英のビーコンスフィールド卿卽ちヂスレリィ（一七六六—一八四八）のものでは、關直彥譯『春鶯囀』（ヴィヴィアン・グレー）等は、何れも有名なものである。なほ此の外、牛山鶴堂譯の『梅黨餘薰』（スコットのアイヴァンホー）、アラビアン・ナイトを譯した『全世界一大奇書』、服部誠一の名で出た『春江奇緣』（スコットの湖上の美人、譯者は坪內、天野、高田の三氏であるといふ）、それから坪內雄藏の『自由刀名殘切味』（シェークスピアのジューリス・シーザーを院本風に綴つたもの）が出たのもこの前後である。

尙ほ飜譯小說に就いて注意すべきことは、それ等の飜譯執筆者が二三氏をのぞいては、皆な政治家若しくは政論家であつたといふことである。これはひとり飜譯小說に限らず、次に述べようとする政治小說の筆者もさうであつた。從つて或る意味では、飜譯小說や政治小說は、文學者の產物でなくて、政治政論家の餘技になつたものといふことが出來る。しかしこれは表面の觀察であつて、眞相を穿つた解釋ではない。元々彼等が政治方面に於て自己の技倆を發揮して成功を收めようとしてゐたことは言ふまでもない。けれども政治の舞臺は野心ある人々全部を主要役者たらしむることは不可能であつた。そこで自然野心を抱きながら尙ほその捌口なく徒らに憂憤憂悶の狀態にあつた。その憂憤憂悶を飜譯の筆に、政治小說の筆に托したのが、彼等なのである。だから彼等には最初から文學的才能はあつたのである。その文學的才能に依つて求めて得られない憂憤憂悶の心境を披瀝したのである。從つて飜譯小說、政治小說の執筆に取つての餘戲ではなく、生命を賭した事業であつた。

以上の如くであるから、その飜譯にしても又その小說にしても、傾向的、槪念的、政治的であることは寧ろ當然すぎることである。彼等は自己の所見と一致するものを求めては飜譯し、自己の政論を披瀝するために小說を書いた。そして一層端的に自己の所論を感情的に訴へることの出來るものは、飜譯よりは寧ろ小說であつた。玆に於てか、飜譯小說の流行と前後して、政治小說の出現を見るに至つたのである。政治小說として當時の讀者を强く動かした主なるものを擧げて見ると、

矢野龍溪著『經國美談』（明治十六年）、東海散史（柴四郎）著『佳人之奇遇』（明治十八年—二十四年）、末廣鐵腸著『雪中梅』上下（明治十九年）、同『花間鶯』（明治二十年—二十一年）、須藤南翠著『綠簑談』（明治二十一年）、同『新粧之佳人』（明治二十年）等で、藤田鳴鶴（茂吉）の『文明東漸史』など小說ではないが、多くの讀者があつた。

今列擧した著作中、最も廣く讀まれ又最も大きな影響を社會に與へたものは、言ふまでもなく、東海散史の『佳人之奇

遇』である。頁をくると、吾々は直ちに米國費府（フィラデルフィア）の獨立閣に導かれる。そこには主人公東海散史が米國獨立當時を追懷思慕してゐる樣が見える。吾々は更に主人公と共に、『春風駘蕩朝霞烟の如き』なかを輕舟に棹して蹄水（ブラウニーフー）の支流を下る。忽ち會す二妃の綽了たる風姿をのせた小艇に。その一妃は女主人公愛蘭の幽蘭女史である。かやうにして舞臺はそれからそれと世界に擴がる。散史はかうして到る處亡國の跡を弔ひ、將來の希望を語る、その間に甘い戀愛を織り込んだものが、この『佳人之奇遇』である。散史自身會津の遺臣で、亡國の非運を身に負つた人であるだけに、全篇に一種のスウィート・ペーソスが漂つてゐる。文體は漢文直譯體で而も一種の句調さへ帶びてゐる。

『經國美談』は『佳人之奇遇』に比べると、その文章が大變やはらかになつて雅文に近い。その內容は、ギリシヤの各邦が競ひ立つて爭つてゐた時に、テーベの名將エパミノンダスとペロピダスとが力を合せて國威の全盛を來した史上の美談中心になつてゐる。理想に燃え、野心にあふり立てられてゐる青年の心に可なり大きな刺戟を與へた作品である。

末廣鐵腸の『雪中梅』と『花間鶯』とは、前二者に比し、甚しく技巧が現代化してゐる。その內容として取扱つてゐるところも、皮相ではあるにせよ、現實生活、卽ち現實の政治を背景として動く人間生活である。自由民權說の主張、各地に於ける宣傳演說、それに對する警察の取締り、過激思想取締り、あつちこつちできく檢束騷ぎ、その間にあつて飽くまでも紳士的に自由民權の思想を國民の頭腦に徹底させようとして幾多の苦難に遭遇する若い政治青年、この殺伐な空氣をいろどるに、『當世の女は昔風では行かぬ琴や三味線は大抵でよいから十分に學問をさせる』との父の意見をそのまゝ受けて育つた新しい而かも美しい女性を以てしてゐる。自由結婚の思想なども、無論作者は無意識であらうが、見えてゐて面白い。須藤南翠氏の『緣籬談』なども當時の政治的空氣の表現と見て面白い。

さて政治小說は、前にも一寸述べた通り、政治家や政論家が、政治の舞臺から引き出された結果、その憂憤憂悶をもらしたもの、若しくは自己の政見を宣傳せんが爲めに書いたものであるから、元より傾向的、第二義的たることを免かれな

い。從つて獨立した第一義の文學といふことは出來ない。文學は常に政治の道具となり傀儡となつてゐた。だから、文化史的見地から見れば、時代の反映として、時世相の寫鏡として存在意義があり、又眞の文學の如何なる物であるかを明白にする對象物となつて飜譯小說と共に、次の新興文藝を培ふ素因となつた所に存在價値がある。けれども文學それ自體としての價値や意義は殆ど認めることが出來ない。性格の描寫に別に見るべき物があるでもなく、事件の發展に自然の推移があるでもなく、空想を深くほりさげて讀む人に銳く喰ひ入るチャームがある譯でもない。時代の推移と共に、其力は失せて行く。

斯やうにして明治第一期後半の文學を代表する政治小說も飜譯小說も次第にその影を沒することになつて、その間に徐々に養はれて來た文學に對する自覺の念は、遂にこつて明治十八年、坪內雄藏の『小說眞髓』となつてあらはれた。その前後を境として、明治の文學は、始めてその眞實の建設期に入る譯である。從つて文學は丁度他の文化の發達に比べて一時代だけ遲れてゐた。これ文化建設期に於ける當然事である。

明治文化に寄せる與歐米人の略歴

ABRIVIATIONS USED IN THE FOLLOWING LIST:

A. for American,
Aust. for Austrian,
B. for Belgian,
Can. for Canadian,
D. for Dutch,
E. for English,
F. for French,
G. for German,
I. for Itarian,
P. for Portuguese,
Russ. for Russian,
Sw. for Swedish,
Swi. for Swiss.

D. N. for Daigaku-Nankō,
D. T. for Daigaku-Tokō,
G. G. G. for Gaikoku-Goggakkō,
K. D. for Kōbu-daigaku,
K. K. for Kaisei-kō,
M. A. for Military Academy,
M. S. C. for Artillery and Engineering School,
T. I. G. for Tokyo-Igakkō,
T. I. U. for Tokyo Imperial University. (Tokyo University included)
a. for arrival in Japan,
c. for circa,
d. for died in Japan.

次の表中、年代の記入は在邦の年代を示すものであるが然し必ずしも來朝歸國の明かなもののみはないので中には或る業務に從つた年代を以て之に當てたものも少くない。例へば何年より何年まで工部省の雇となつたといふが如きものの中にはそれ以前に在邦してゐた者もあるのである。これはただ何年頃に在邦した人であるかを知り得るに便ならしめんための記入に止つたことは紙面の都合上とはいへ遺憾であるがその完成は他日を期するものとして之を諒とせられ度い。なほ括弧付の年代の記入ある者はその時代に在邦したことを示すのであつて、或る事蹟をなした年代が明かなるものによつて、その年代を記入したものである。例へばアンダーソンは工部大學の一部を設計したのが明治八年であつたといふが如きで、其前後の年代は見出し得なかつたものである。また現存者はその現存する地名を記入しておいた。ともかくも記入の年代はその人の在邦の年代が大體知り得るの便に供したものにすぎぬことを茲に斷つておき度い。

REPRESENTATIVE FOREIGNERS WHO HAVE CONTRIBUTED IN THE BUILDING UP OF JAPAN'S NEW CIVILIZATION IN MEIJI ERA

Name		Nationality	Years in Service	Works		Page
ア						
アツペール	Appert, G.	F	1879-99	Prof. law T. I. U. &c.	帝大法學教師	三四
アトキンソン	Atkinson, R. W.	E	1874-81	Prof. & author	教師、著述	九三
アレキサンダー	Alexander, T.	E	1879-86	Prof. engineering K. D.	工部大學教師	九三
アストン	Aston, W. G.	E	1864-89	Author	著述	
アンダーソン	Anderson	E	(1875)	Architect	建築家	九二
アンチゼル	Antisell	A	1873(a)	Manufacture of ink	インキ製造	九二
アンデルソン		E		Physician	海軍病院醫師	
アイクマン	Eykman, E. F.	D	1877-85	Pharmacologist	藥學	八二
アダムス	Adams	A	1876-	Physician & missionary	醫師、宣教師	四二

アダムス	Adams, Miss	A		Missionary	宣教師	
アナトリー	Anatoley	R	1871(a)	Missionary	宣教師	四三
アンダーソン		A		Director of a hospital	東京府病院長	
アダムス	Adams, Miss	A		Education of Poor	岡山貧民教育	
アルブレヒト	Albrecht	G		Prof. botany	大學講科植物教師	

イ

イーバンス	Evans ?	E	1872(a)	Female education	女子教育	四九
イルウヰン	Irwin	A	1873	Emigration to Hawaii	ハワイ移民	五〇
イング	Ing, J.	A	1870(c)	Missionary & education	宣教師、教育	四七
イングルス	Ingles. G. ?	E	1887-92	Adviser (Navy)	海軍顧問	一〇二
イーストレーク	Eastlake, W.	A	1884-1905	English teacher & editor	英語教師、著述	四八
イングランド	England. J.	E	1870(d)	Railroad	工部省鐵道局	六六
インブリー	Embrie, W.	A	1870(c)	Missionary prof. Meijigakuin	宣教師明治學院副總理	四四
イートン	Eaton	A	1873-76	Missionary & educator	宣教師、教育	五一
イービー	Eby, C.S.	Can.	(1876)	Missionary	宣教師	

ウ

ウイルソン	Wilson, H.	A	1871-77	Prof. D.N.	大學南校教師	六六
ウイリアムス	Williams, C.M.	A	1855(a)	Bihop Missionary	監督、宣教師	四〇

ウイリアムス	Williams, G. B.	A	1871	Financial adviser	政府財政顧問	三九
ウイリス	Willis, W.	E	1861-81	Reclamation & physician	醫師	六七
ウイード	Widor ?	A		Cattle-breeding	牧畜	六五
ウエンライト	Wainright	A		Publication of Christian literature	基督教文學出版	
ウエスト	West, C. D.	E	1882-1908	Prof. engineering T.I.U. &c.	帝大機械學教師	五〇
ウイーダー	Veeder	A		Prof. T.I.U.	物理學者	
ウエルニヒ	Wernich	G	1824-76	Prof. medicine T.I.G.	醫學校教師	八〇
ウイルソン	Wilson, A.	E	1869-70	Prof. D.N.	大學南校教師	五一
ウエルチムバー	Werthimber, L.	A		Expert of Jap. Sword	日本刀鑑定者	六二
ウエンチヒ	Waentig, H.	G	1909-12	Prof. economics & politics T.I.U.	帝大政經教師	三七
ウエンカスチルン	Wenckstern, A. v.	G	1893-95	Prof. inance T.I.U.	帝大財政學教師	三七
ウイグモア	Wigmore	A	1390-93	Prof. Keiō	慶應大學教師	三四
ウエルニー	Verneuir ?	F	1965-76	Ship building (Navy)	海軍造船	四四
ウイシャード	Wishard	A	1879	Summer school (Y.M.C.A.)	夏期學校	四〇
ウイッカース	Vickers	A	1895(c)	Prof. Keiō	慶應大學教師	三七

H

エッケルト	Eckert, F.	G		Naval band	海軍軍樂隊	一〇二
エッガルト	Eggert	G	1887-93 d	Prof. finance T.I.U. &c.	帝大財政學教師等	六六
エスメン	Esmein ?	F	1872	Military		一〇一

エリオット	Elliott ?	A	1872 ?	Dentist		八〇
エルメンハス		D	1870–	Prof, Osaka I.G.	大阪醫學校教師	八一
エッチル	Escher, G.A.	D	—1878	Harbour construction	築港	九五
エイトン	Ayrton, W.E.	E	(1878)	Prof. K.D.	工部大學教師	六五
オ						
オールドルス		E	1872 ?	Architect	建築家	七三
オルドリッチ	Aldrich, A.S.	E	1871–97	Railroad managment	工部省鐵道局	九七
カ						
カーギル	Cargill, W.W.	E	1872–77	Railroad	工部省鐵道局	六六
カシヨン			(1876)	Architect	建築家	
カデルソー	Kaderly, J.	Swi.	1870–71	Prof. German D.N.	獨逸語教師	五三
カペルギー	Chapergi ?	I	(1876)	Architect	建築家	九三
カルクワード	Kirkwood, W.M.	E	1885–1902	Adviser (Depart. Justice)	政府顧問	
カッター	Cutter, T.C.	A	1878–87	Prof. Sapporo Nōgakkō	札幌農學校教師	
キ						
キッダー	Kidder, Miss. M.	A	1871 (a)	Missionary & female education	宣教師、女子教育	四九
キャプロン	Capron, Gen. H.	A	1872 (a)	Opening of Hokkaido.	北海道開拓	四九
キヨソネ	Chiossone, E.	I	1875–98 (d)	Printing	印刷	九〇

キント	Quint ?	G	(1877)	Prof. Agriculture Chemistry	農業化學教師	八四
ク						
クローフォード	Crawford, J.U.	A	(1882)	Railway	北海道鐵道	六六
クラーク	Clark, W.S.	A		Prof. Sapporo Nōgakkō	札幌農校教師	四七
クロスビー	Crosby, Miss. J.N.	A	1871–1918	Missionary & female education	宣教師、女子教育	
クリスチー	Christy, F.C.	E	1871–76	Railaoad	工部省鐵道局	六六
クレーベス	Krebes				三菱汽船會社顧問	
クニッピング	Knipping	G	1871 (c)	Meteorologist	氣象學者	七四
ケ						
ケネデー		A			新聞	
ケーベル	Koeber, R.v.	R	1893–1922 (d)	Prof. T.I.U. &c.	帝國大學教授	五五
ケルネル	Kellner, O.	G	1851–1910	Prof. agriculture	農學教師	八四
ケート	Cate. I.W.	A	1890–1908	Missionary	宣教師	
コ						
コックス	Cox, W.D.	E	1876–94	Prof. Eng. Komaba Nōgakkō &c.	駒場農校英語教師	五三
コフチエド		Sw		Zoologist	動物學者	六六
コルネス	Cornes, E.	A	1870 (d)	Prof. Eng. D.N.	大學南校英語教師	五三
コンドル	Conder. J.	E	1876	Prof. architecture K.D.	工部大學建築教師	九三

コンドル		G	1871	Prof. medicine D.T.	大學東校醫學教師	
コール		F	1897	Missionary & leper-house	宣教師、癩病院	
コロンベー	Colombe, Miss	F	1897	〃	〃	
コヤリー		F	1871(a)	Mining	生野鑛山	八
コクラン	Cochran	C		Missionary & educator	宣教師、教育	

ガ

ガロー	Garaud	F	1869–72	Prof. French D.N.	大學南校佛法教師	三
ガーデナー	Gardener ?	A		architect	建築家	

キ

キールケ	Giercke, H.	G	1877–80	Prof. anatomy T.I.G.	東京醫大解剖學教師	七
ギユリック	Gulick, J.T.	A	1864–77	Missionary & prof. &c.	宣教師、教師	四
ギルベルト	Gibbert, G,M.	A		Missionary	宣教師	
ギユーリック	Gulick, O.H.	A	1874	Missionary & editor	宣教師、記者	四
ギルベルト	Gilbert, A.	E	1870(c)	Telegraph	電信	九
ギユーリック	Gulick, S.	A		Missionary	宣教師	

グ

グラバ		A		Employee of Mitsubishi	三菱汽船會社雇	
グロッセ				Expert of Jap. art	日本美術研究者	
グリーン	Greene, D.C.	A	1869	Missionary & translation of Bible	宣教師、聖書譯	四
グリフィス	Griffis, W.E.	A	1870(a)	Educator & author &c.	教育、著者、等	三
グリフィン	Griffin, C.S.	A	1899–1899d	Prof. economics T.I.U.	帝大經濟教授	三七
グレーフェン	Greeven	G	1872(a)	Prof. K.K. &c.	開成校教師等	六
グタロウ		F		Military music	軍樂隊	101
グラスマン	Grasmann, E.	G	1887–95	Prof. Komaba Nōgakko	駒場農校教師	八七
グロート	Groth, A.	G		Prof. German	大學豫科獨逸語教師	
グレイ	Gray. ?	E	1890(a)	Seismologist	地震學者	三
グレー	Gray ?	R		Prof. G.G.G.	外語學校教師	五
グリム	Grimm	G	1888–	Sapporo-Hospital	札幌病院	

ゲ

ゲールツ	Geerts, A.G.C.	D	1885 (?)	Pharmacologist & Meteorologist	藥學及氣象學者	八

コ

コーブル	Goble, J.	A	1860–73	Missionary & jinrikisha inventor	宣教師、人力車考案	九

ゴルドン	Gorden, M.L.	A	1871(c)	Missionary	宣教師	四六
ゴッチエ	Gottsche	G	1882–4	Prof. T.I.U.	東京大學教師	七〇
ゴールウエー	Galway, W.	E	1871–74	Railway transportation	工部省鐵道局	九
ゴルドン	Gordon, M.L.	A	1872–1900	Missionary & physician	宣教師、醫者	

サ

サイル	Syle, E.	E	1874–79	Prof. K.K.	開成校教師	五
サトー	Satow, E.M.	E	1861–	British Minister & author	駐日英國公使	三
サンマーズ	Summers, J.	E	1873–76	Prof. K.K.	開成校教師	五

シ

シエンク	Schenk, C.	G	1871–75	Prof. D.N.	大學南校教師	七
シエンデル	Schendel	G	1875–81	Prof. T.I.G.	東京醫學校教師	六
シモンズ	Simmons, D.B.	A	1859–1889	Missionary & physician	病院設立者	八
シャノイン	Chanoine	F		Army	軍事	
シャンド	Shand, A.A.	E	1874–	Adviser Treasury Department.	紙幣寮顧問	六
シニイダー	Snyder, S.S.	A	1894	Missionary	宣教師	
シュルツエ	Schultze,	G	1874–81	Prof. surgery T.I.	外科教師	六
シヨイベ	Scheube	G	1879–83	Physician Tiōto Hospital	醫者	九

シンクロートン		A	1861(c)	Oil industry	石油業	八
シャン	Shann, T.	E	1871–78	Railroad	鐵道局	九
シドル	Siddall ?	A ?		Physician	醫學	
ショット	Schott	G		Prof. geology	地質學教師	
シュミット	Schmidt	G	1860	Pharmacology	藥學	

ス

スクリバ	Scriba, J.	G	1881(a)	Prof. surgery &c. T.I.U.	外科皮膚科教師	六
スヱフト	Swift,	E ?		Prof. D.N. &c.	大學南校教師	
スコット	Scott	E		English teacher Peers' School &c.	學習院英語教師	
スコット	Scott, M.	A		Economist	(通貨、銀行、特許)	六
ストランヂ	Strang	A		Physical training	兵備門、體育	
スピンネル	Spinner	G		Missionary	宣教師	
スプレーグ	Sprague, O.M.W.	A	1905–8	Prof. economics T.I.U.	東大經濟學教師	三
ストックブリッヂ	Stockbridge	A	1887–89	Prof. agriculture Sapporo Nōgakkō	札幌農學校教師	
スコット	Scott, M.M.	A	1871–85	Prof. D.N.	大學南校教師	四
スミス	Smith	E	1892(a)	Prof. English	英語教師	五
スミス	Smith, R.H.	E	1874–78	Prof. K.K.	開成校教師	六
スミス	Smith, E.P.	A	1871–75	Adviser (international law)	國際法顧問	三
スミス	Smith, W.M.	E	1874–77	Railroad	工部省鐵道局	九
ストーン	Stone, W.H.	E	1872(c)	AD Viser	遞信省顧問	七

ステーチェン	Steichen, M.	F	1886–	Missionary & author	宣教師、著述	
	セ					
セルビントン	Sherving'on, T. R.	E	1873–81	Railroad constructor	鐵道局建築師長	
セッケンドルフ	Seckendorf, B.v.	G		Prof German G.G.G.	外語學校獨逸語教師	
セッペルド	Shepl.erd, C.	E	1870–	Railroad constructor	鐵道局建築副役	
	ソ					
ソーパー	Soper, J.	A	1872–	Missionary & temperance worker	宣教師	
ソープマイニング				Mining	鑛山業	
	ジ					
ジョルダン	Jourdain ?	F	1872–5	Mlitary	軍事	101
ジョルダン	Jordan D.S.	A		Ex-president Stanford University U.S.	魚類研究者	空
ジョンス	Jones, T.M.R.	E	1873–81	Railroad	工部省鐵道局	
ジョイナー		E	1874	Meteorologis	赤坂測候所	
ジオガハル		I		Prof. fine art, K.D.	工部大學美術教師	
	ヤ					
ヤームス	Jhames, T.H.			Enployee of Mitsubishi	三菱汽船會社雇	

セン	Senn, O.	s Wi		Prof. German	大學業科獨逸語教師	
	タ					
タボーン	Taborn			Education.	教育	
タムソン	Thompson, D.	A	1863(a)	Missionary, educator & oil industry	傳道、教育、石油業	八
タルコット	Talcott, Miss E.	A	1873–1910	Female education	女史教育	四九
	チ					
チーガル	Tieger	G	1877–83	Prof. physiology T.I.U.	帝國大學教師	共
チャイルズ		A	1901–3	Oil industry	石油業	八
チャップリン	Chaplin, W.S.	A	1877–80	Prof. K.K.	開成校教師	五
チャンバレン	Chamber'ain, B.H.	E	1886–1890	Prof. philology. T.I.U.	帝國大學博言學教師	四
チュンベルク					醫學	
チソン	Tison, A.	A	1887–1894	Prof. law T.I.U.	帝國大學法學教師	三
	テ					
テヒョー	Techow	G			内閣顧問市町村制	
テリー	Terry, H.T.	A	1876–1919	Prof. law K.K.	開成校法律教師	三
テストビー	Testevinide	F		Missionary & leper-house	宣教師、癩病院	

	ト					
トリート	Treat, U.	A		Canning industry	罐詰業	九二
トレヴィシック	Trevithick, F.H.	E	1876–97	Railroad	鐵道局	九七
トムソン	Thompson	A	1870–70	Prof. Eng. D.N.	大學南校英語教師	五三
	ダ					
ダイエル	Dyer, H.	E	1873–88	Prof. K.D.	工部大學教授	九二
ダイバース	Divers, E.	E	1873–99	Prof. K.D.	工部大學教師	三五
ダラス	Dallas, C.H.	E	1870–70	Prof. D.N.	大學南校教師	五三
ダン	Dan, E.	A	(1900)	Cattle-breeding	牧畜指導	六八
ダラム	Durham, G.	E	1874–	Railroad	鐵道局	
ダイアック	Diack, J.	E	1870–76	Railroad	鐵道局	
ダドレー	Dudley, Miss. J.E.	A	1873–1900	Missionary & ducation	宣教師,教育	四九
	チ					
チェーンス	Janes, Capt. L.L.	A	1871–77	English teacher	英語教師	四四
ヂッセ	Disse J.	G	1880–87	Prof. anatomy T.I.U.	東京大學解剖學教師	七七
チェリー	Derys, L. ?	F	1871 (a)	Prof. French K.G.G.	京都外國語學校教師	五三
チェリー	Dry ?	F		Expert of textile manufacture	織物業	九二

チョンソン	Johnson			Cattle-breeding	牧畜	八五
ヂットリッヒ		AUS		Prof. Tokyo Ongakugakkō.	東京音樂學校教師	
	ツ					
ツレズニー	Zelezny, A.E.	AUS		Prof. German	大學獨逸語教師	
	デ					
デイブスキー	Dybouski	F	1877–81	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	五五
デニング	Dening, W.	E	1878–1913(d)	Missionary, prof. & editor	宣教師,教師,記者	五〇
デビス	Davis, G.D.	A	1871(a)	Missionary & educator	宣教師,教育家	四三
デビソン	Davison, J.C.	A	1873	Missionary	宣教師	
デクソン	Dexon, J.M.	E	1880–92	Prof. K.D. & T.I.U.	工部大學教師,帝國大學	五七
デーデルライン	Doederlein	G	1879–83	Prof. zoology, botany T.I.U.	帝大動植物學教師	五七
デーニッツ	Doenitz W.	G	1872–76	Prof. anutomy T.I.U.	帝國大學醫學教師	六六
デニソン	Denison, H.W.	A	1880–1914(d)	Adviser Foreign Department	外交顧問	三四
デシャルム	Decharme ?	F	1872	Military	軍事	101
デ・レーカ	De Reike, J.	D	1880	Habour construction	大阪築港	八八
デューイング	Dewing, J.A.	E	1871–76	Railroad	鐵道局建築副役	
デフォレスト	Deforest, J.H.	A	1874–1900	Missionary & writer	宣教師,著述家	四一
デュース	Duce, C.	E	1897	Salvation Army	救世軍	四五

	ド					
ドーフライン	Doflein	G		Zoologist	動物學者	
ドロッパース	Droppers	A	1890–94(?)	Prof. Keiō	慶大經濟學教師	三六
ドーン	Deane?	A	1876–77	Missionary & prof.	宣教師、教師	四五
ドサライナ		AUS		Musician	宮內省音樂教師	
ドールン	Dolν, Van	D	1872(a)	Harbour construction	築港	九四
	ナ					
ナップ	Knapp, A.	A		Missionary	宣教師	
ナウマン	Naumann, E.	G	1875–79	Geologist	地質學者	七二
	ニ					
ニコライ	Nicholai, P.	R	1861–1911(d)	Bishop, Missionary	宣教師	四二
ニュートン	Newton			Geologist	地質學者	六十
ニーウヰルト	Niewerth	G	1972–	Prof. pharmacology	大學藥學教師	
	ネ					
ネット	Netto, C.	G	1873–85	Prof. mineralogy TI.U.	帝大鑛物教學師	七八

	ノ					
ノックス	Knox ?			Student of Shintoism	神道研究者	
ノット	Knott, C.G.	E	1883–91	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	二四
ノット	Knott. Mrs.	E		Missionary & leper-house	宣教師、癩病院	
	ハ					
ハウ	Howe, Miss A.L.	A		Kindergarten trainnig school	幼稚園	
ハウス	House, E.H.	A	1871–83	Prof. T.I.U. &c.	帝國大學教師	三七
ハウスクネヒト	Hausknecht, E.	G	1887–90	Prof. pedagogy T.I.U.	帝大教育學教師	四八
ハース		A	1893(a)	Oil industry (well-sinking)	石油業	六六
ハリス	Harris, T.	A	1855–1861(d)	American Minister	米國公使	五五
ハリス	Harris, M.C.	A	1873–	Missionray Methodist Bishop.	宣教師	
ハーン	Hearn, L.	E	1891–1904	Prof. & author	教師、著述家	六〇
ハウス	House ?	A		Musician	宮內省御雇音樂教師	
ハウス	House ?	A		Journalist	新聞事業	
ハラタマ	Gratama,	D	1868	Prof. chemistry Osaka Hospital	化學教師	三五
	ヒ					
ヒル	Hill			Coast Survey	海岸測量	
ヒルゲンドルフ	Hilgendorff	G	1873–76	Prof. TI.G.	東京醫學校教師	六六

ヒキツ		D	1868–	Prof, T.I.G.	東京醫學校教師	六三
	フ					
フトカルズ	Faulds	E		Doctor, Tsukiji Hopital	築地病院醫	
フエスカ	Fesca, M.	G	1882–92	Prof. agricultnre	農業教師	六四
フエノロサ	Fenollossa, E.F.	A	1878–86	Prof. T.I.U. &c.	帝國大學教師	元
フエレツチ	Fellecci	I		Prof. painting K.D.	工部大學美術教師	
フエントン				Zoologist	動物學者	
フエントン	Fenton	E		Naval band	海軍軍樂隊	
フオツクスウエル	Foxwell, E.	E	1796–99	Prof. economics T.I.U. &c.	帝大經濟學校教師	三六
フオンタネシ	Fontanesi, A.	I	1876–78	Painting	工部大學美教師	六〇
フツク	Fuck, P. ?	F	1870–1921(d)	Gunnery, M.S.C.	軍事	100
フルベツキ	Verbeck, G.F.	D	1859–98	Prof. D.N.	大學南校教師	四四
フローレンツ	Florenz, K.A.	G	1889–1916	Prof. T.I.U. & author	帝國大學教師	六一
フアンガント	Van Ghent, J.G.	D	1878–	Harbor construction	築港	
	ヘ					
ヘイト	Haight	A	1889–92	Sapporo Agricultural School	札幌農學校教師	
ヘツク	Heck. E.	F	1891–T	Director Giosei Chugaku	曉星中學校長	三四
ヘーフエレー	Hefele, K.	G	1901–3	Prof. forestry	造林學教師	六

ヘボン	Hepburn, J.C.	A	1860–92	Translation of Bible, female education, compilation of dictionary.	聖書飜譯辭書	四三
ヘンリツク	Henrick, A.	F	1888	Teacher, Gyosei Chugaku	曉星中學校	
ヘルム	Helm, J.	G		Prof German G.G.G.	外語學校獨逸語教師	
ヘーデン	Heyden	D		Prof. Niigata Igakkō	新潟醫學校、病院	
	ホ					
ホイツトマン	Whitman, C.O.	A	1879–81	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	六
ホイトニー	Whitny	A		Missionary	宣教師	
ホエラー	Wheeler, W.	A		Prof. engineering Sapporo Nōgakkō	札幌農學教師	九
ホエラー	Wheeler	A		Doctor, Naval Hospital	海軍病院醫師	
ホートン	Houghton, W.A.	A	1877–1882	Prof. K.G.	開成校教師	五
ホフマン	Hoffmann ?	G	(1871) ?	Prof. medicine D.T.	大學東校教師	三
ホーフマン	Hofmann, A.	AUS	1904–9	Prof. forestry	造林學教師	六
ホール	Hall	E	1871–72	Prof. D.N.	大學南校教師	三一
ホランド	Holland ?			Geologist	地質學者	三
ホルサム	Holtham, E.G.	E	1873–81	Railroad	鐵道	
ホツカ	Fock	D		Prof. Niigata Iggakō	新潟醫學校、病院	
ホルテルマン	H rterman	D		〃	新潟醫學校、病院	
	ン					

バチエス					日本紹介者	
バチエラー	Bathe'or.	E		Ainu language	アイヌ語研究者	
バラ	Bellagh, J.H.	A	1861(a)	Missionary & education	宣教師、教育	四一
バラ	Ballagh, J.C.	A	1872	Missionary	宣教師	
バルトン	Burtor, W.K.	E	1887(c)	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	九三
バールセン	Bahlsen, E.	G	1897–1900	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	七二
バンソン		G				
バラード	Bullard, H.	E	1900(a)	Salvation Army	救世軍	四五
	ビ					
ビヤロー		A		Expert in Jap. Art.	日本美術紹介者	
	ブ					
ブーケマー	Beukema	D		Doctor, Tokyo Home Dept. Hospital	內務省病院	
ブース	Booth, W. Gen	E	1997	Salvation Army	救世軍	四五
ブスケ	De Bousquet	F	1865(a)	Military	軍事	100
ブッセ	Busse, L.	G	1887–92	Prof. T.I.U.	帝大哲學教師	六六
ブライアン	Bryan, S.M.				郵便制度	
ブラウン	Brown, Capt.	E	1871(e)	Navigation Post office	海運	九九
ブラウン	Brown, S.R.	A	1859–1879	Missionary, educator, translation of Bible	宣教師、聖書飜譯	四九
ビンガム	Bingham, J.A.	A	1873(c)	Diplomat	米國公使	

ブランス	Brouns, D.	G	1879–(c)	Prof. T.I.U. & author	帝大教授、著者	七〇
ブラガー		P		Adviser Mint	造幣局顧問	
ブラック	Black	E	1970	Editor	新聞	六二
ブラチキンス		I		Mst. A.E.S.		101
ブラキストン	Blakiston, Capt.	E	1861(a)	Scientist	動物學者	六六
ブラントン	Branton, R.H.	E	(1868)	Light-house	燈臺	九五
ブリュック	Brück, K.A.	G	1874–80(d	Printing	印刷	九九
ブルデル	Bourdelle, L.?	F	1900–13(d)	Prof. law. T.I.U.		三三
ブリンクリー	Brinkley, Capt	E	1870(c)	Editor, Japan Mail		六二
ブルゴアー	Bourgois, G.	F		Introduct. of Jap. Mathenatics		八
ブロックハイス	Blockhuys E.J.	B	1911–T	Prof. commerce T.I.U. &c.		六六
ブリガム	Brigam, A.B.	A	1889–91	Prof. agriculture Sapporo Nōgakkō	札幌農校農學教師	
ブルックス	Brooks, W.P.	A	1876–87	〃	〃	
	ベ					
ベラブリー	Bradbury	A	1902	Prof. English	英語教師	四〇
ベリー	Berry, J.C.,	A	1872	Missionary, phisician, prison reformer		六六
ベルソン	Berson	F	1876–80	Prof. physics & madithematics T.I.U.	帝大物理學教師	六六
ベルタイヤル	Wertheimer ?			Expert of Jap. Sword	日本刀紹介者	
ベルタン	Bertin, L.E.	F	1886–90	Adviser (Navy)	軍事	101
ベルグマン	Bergmann	G		Adviser	司法省顧問	

ベルツ	Baelz, E.	G	1876–1902	Prof. T.I.G.	醫學校教師	七
ベルトー	Berteaux ?	F		Mrt. M.A.	軍事	101
	ボ					
ボアソナード	Boisonade, G.F.	F	1873–1995	Prof. law, T.I.U.	帝大法學教授	三
ボイル	Boyle, R.V.	E	1872–79	Railroad	鐵道局	九
ボアニガイル						
ボルドウイン	Baldwin	E		Prof. G.G.G.	外國語學校教師	
ボードウイン	Boduin	D	(1868)	Doctor, Osaka Hospital	大阪病院醫者	九
ボッター				Mining industry	鑛山業	
ボリアニ		G		Prof. German	一高獨逸語教師	
ボールドウイン	Baldwin, C.	A	(1871)	English teacher	英語教師	五
	パ					
パウネル	Pawnall, C.A.W.	E	1882–96	Railrcod	鐵道局	九
パーソン	Parson, W.E.	A	1875–78	Prof. K.K.	開成校教師	六
パテルノスター	Paternoster	L		Prof. law	法律學教師	
パーマー	Palmer H.S.	E	1885(a)	Harbour construction	築港	九
パーム	Palm	A		Doctor Niigata Hospital	新潟病院醫師	
パーム	Palm	E	-1883	Missionary	宣教師	四

パークス	Parkes. H.S.	E	1865–83	Diplomat	英公使	
パリノー	Parinot	F	1887–	Missionary and author	宣教師	四
パルヴス	Parvis F.P.	E	1901(a)	Prof. T.I.U.	帝國大學教授	四
パンペリー	Pumpelly, R.	A	1861(a)	Geologist	地質學者	二
	ピ					
ピーボディー	Peabody, C.H.	A	1878–82	Prof. Sapporo Nōgakkō	札幌農學校教師	
ピヤソン	Pierson, L.H. Mrs.	A	1871–1899	Missionary & educator	宣教師	
	プ					
プライス	Price			English teacher	英語學校教師	
プライアー				Zoologist	動物學者	六
プライン	Pruyn, M. Mrs.	A	1871–	Missionary & female education	宣教師、女子教育	
プレイフエアー	Playfair	E	1907-1918(d)	Prof. Keiō & T.I.U.	慶應帝大教師	六
プチーン	Putzier, F.	G		Prof. German G.G.G.	獨逸語學校教師	
	ペ					
ページ	Page, W.F.	E	1874–99	Railroad	鐵道	九
ペタン	Petin	F		Navy	海軍	
ペティー	Pettee J H.	A	1878–	Orphan asylum	孤兒院	
ペニー	Penny, G.	A	1873–79	Prof. Osaka Eigogakkō	英學校教師	五

ペリー	Perry	E		Prof. K.D.	工部大學教師	六五
ペリー	Perry	A	1898–1898	Prof. Keiō	慶應大學教師	六八
ペリン	Perin G.L.	A	1891	Missionary	宣教師	
ペルソン	Person	F	1872	Army	軍事	101
ペンハロー	Penhallow. D.	A	1876–79	Prof. botany Sapporo Nōgakkō	札幌農校植物教師	
	ポ					
ポール	Paul, H.M.	A		Astronomy	天文觀測	七三
ポンペ	Pompe, V.M.	D	1856(a)	Phisics & medicine	醫學、藥學	五五
	マ					
マイエル	Mayer, H.	G	1888–91	Prof. forestry	造林學教師	八七
マイヨ	Maillot	F	1870–74(d)	Prof. D.N. &c.	大學南校教師	五二
マクドナルド	McDonald, J.	E	1873–1901	Railroad	工部省鐵道局	九七
マクレー	Maclay, R.S.	A	1873–	Missionary	宣教師	
マコーレー	Macauley, J.K.	A	1880(a)	Missionary	宣教師	四一
マッカルタス	McCarthus, H.			Prof. K.K.	教育	
マカーチー	Macatee, D.B.?	A	1872–4	Prof. K.K.	開成校教師	六八
マッセ	Massé	F	1870(a)	Phisical education	醫學教育	七七
マードック	Murdock	E		Prof. history	一高医史教師	五〇
マクミラン	McMillan	A		Author of Poritical History of Meiji Era	經濟學教師	

マリス	Marris?	A		Adviser	貨幣制度等顧問	三九
マルカリー	Marcilly (?)	F	1874	Military	軍事	101
マーレー	Murray, D.	A	1873–79	Adviser, Department of Education	文部省顧問	四七
マンスフィールド		D	1865(a)	Prof. Osaka Hospital	大阪病院	六六
マンニング	Manning	E		Doctor, Tokyo Hospital	東京病院醫師	
マンロー	Manroe, H.S.	A	1875–76	Prof. K.K. &c.	開成校師師	七〇
マクミラン	Macmillan, A.			Employee of Mitsubishi	三菱汽船會社雇	
	ミ					
ミニエー	Mynuet	F	1878–84(d)	Employee, Military Dept.	軍事	101
ミュレル	Müller	G	1871(a)	Prof. surgery, D.T.	大學東校教師	七七
ミュレル	Müller, A.	Aus	1890–95	Prof. Tōkyō Nōringakkō	東京農林校教師	八五
ミルン	Milne, J.	E	1876–94	Prof. K.D.	工部大學教師	七三
メーク	Meik, C.S.	E		Harbour construction	築港	
	ム					
ムルデル	Mulder, R.	D	(1885)	Harbour construction	築港	八五
	メ					
メーヤル	Meyer	E	1869–70	Prof. D.N.	大學南校教師	五二

メーガミル	Major, A.	E	1871–78	Prof. English physics mathematics D.N.	大學語教師	三
メーソン	Mason, L.W.	A	1889	Prof. music & author	音樂教師	五九
メーソン	Mason, W.B.	E	–1923(d)	English teacher, newswriter	英語教師	六二
メクケル	Meckel ?	G	1885(a)	Military Science	軍事	100
メートル	Maitre ?	A		Translation of Niho-shoki	日本書紀譯	六1
メドハースト	Medhurst	E		Compilation of Chin. Eng. Dictionary	辭書	
メンデンホール	Mendenhall, T.C.	A	1878–80	Professor	教師	六四
メンデル				Mining industry	鑛山業	
	モ					
モーレン	(ドキシイ)	R		Botanist	植物學者	
モッセ	Mosse	G			內閣顧問	
モリス	Morris. A.R.	A	1871–	Missionary	宣教師	
モールス	Morse, E.S.	A	1877(a)	Prof. biology T.I.U.	帝大生物學教師	六九
モルテンセン	Mortensen	G		Zoologist	動物學者	
モレル	Morell, E.	E	1870–71(d)	Railroad	工部省鐵道局	六
モレヤン		E		Gov't employee	輕船課員	
	ヤ					
ヤング	Y ung	A		Newspaper	新聞	

ヤンソン	Janson, J.L.	G	1880 ?	Prof. veterinary science T.I.U.	農科大學獸醫學教師	七〇
ヤングマン	Youngman, Miss. K.M.	A	1873–	Missionary & leper asylum	宣教師、癩病院	
	ユ					
ユーシミル				Mining industry	鑛山業	
ユーイング	Ewing, J.A.	E	1878(a)	Prof. T.D.	東京大學教授	七三
ユンカル	Junker A.	G		Physician	醫師	
ユンカル	Junker E.	G		Prof. Tokyo Ongakugakkō	東京音樂學校教師	
	ラ					
ラートゲン	Rathgen, K.	G	1882–90	Prof. politics T.I.U.	帝大政治學教師	五三
ラーネッド	Learned, D.W.	A	1875–(Kioto)	Missionary, professor & author	同志社教師	六六
ライマン	Lyman, B.S.	A	(1873)	Petroleum industry	石油事業	六九
ライン	Rein	G		Geologist & author	地理學者	
ラグーザ	Ragusa, V.	I	1876(a)	Prof. fine art	美術教師	五九
ラッド	Ladd G.T.	A	1892(a)	Prof. Yale University U.S.A.	エール大學教授	五六
ランガルド	Langard	G	1875–81	Prof. pharmaceutics T.I.G.	東京醫學校藥學教師	七二
ランゲ	Lange	G		Prof. German	大學豫科獨逸語教師	
ローダー	Lawder	E	1870 ?	British Consul & lawyer	英領事、辯護士	五三
ライト	Wright, E.	E	1895–	Salvation Army	救世軍士官	四三

ランゲ	Lange G.G.	G	(1885)	Physician	醫師	八1
ランバス	Lambuth, J.W.	A	1886–92	Missionary & educator	宣教師、教育家	
ラガー	Raguet	I	1879–	Missionary & author	宣教師、著者	
	リ					
リース	Riess, L.	G	1887–1902	Prof. T.I.U.	帝國大學教授	六0
リーベルス	Liebers, B.	G	1974–76	Printing	印刷業	九1
リゼンドル	Lecendre, Gen. C.W.	A	(1874)	Formosan Expedition	臺灣征伐	100
リチャード	Richard, Miss. R.	A		Missionary & nurse	看護術	八1
リッテル	Ritter, H.	G	1870–74(d)	Prof. K.K. &c.	開成校教師其他	七三
リスカム	Liscomb,	A	1890–94	Prof. Keiō	慶應大學教師	六八
リッギンス	Liggius, J.	A	1855–66	Missionary	宣教師	
リッデル	Liddell, Miss ?	A		Leper-house	癩病院設立	
	ル					
ルビリヨカ	Revilliod,A.	F	1889–92	Prof. law T.I.U.	帝大法學教師	三1
ルヴォン	Revon, M.	F	1888–	Adviser Dept Justice	司法省顧問	三1
ルヴォン	Revón ?	F	1872(a)	Military	軍事	101
ルーミス	Loomiss	A		Bible Society	聖書會社	
ルドルフ	Rudolff	G		Adviser	司法省顧問	

	レ					
レーマン	(カール)			Railroad	鐵道	
レーネル	Leynell					
レーマン	Lehmann, R. ?	G	1870(c)	Prof. German G.G.G.	外國語學校教師	五三
レーランド	Leland	A	1878(a)	Teacher gymnastics	體操教師	五0
レーンホルム	Loenholm, L.S.	G	1887–1907	Prof. T.I.U. &c.	大學南校教師	三三
レピシエ	Lepissier	F	1872–74	Prof. D.N. &c.	大學南校教師	七一
	ロ					
ローイー	Loev, O.	G	1893(a)	Prof. T.I.U.	帝國大學教師	八五
ローレッツ	Roretz, A.v.	G	1875(c)	Dermatologist	皮膚病醫師	八0
ローレンス	Lawrence, J.	E	1906–16(d)	Prof. English literature T.I.U.	帝大英文學教師	三三
ロッチ	Loti, P. (Julien Viand Louis Marie)	F		Novelist	日本紹介者	
ロイド	Lloyd, A.	E	1876–1915(d)	Prof. K.K. & T.I.U.	慶應、帝大教師	六八
ロイスラー	Roesler	G		Gov't. adviser	政府顧問	
	ワ					
ワグネル	Wagner, G.	G	1870–88	Prof. D.N. &c.	大學南校教師其他	八九
ワーグマン	Wirgman, C.	F	–1891 (d)	Introducer of Japan	日本紹介者	八三

ワッソン	Wasson, J.R.	A	1875-78	Prof. K.K.	開成校教師 101
ワッデル	Waddel, J.A.L.	can.	1882-86	Prof. engineering T.I.U.	帝大機械學教師 叺
ワルツ	Walz	G	1887-97	Prof. German	第一高等學校教師 五三
ワーレン	Warren, C.F.	A		Missionary	宣教師
ワッチ	(ミヤギ)			Teacher Nursing	大學病院、看護術

編者附記

□吾々が短時日の間に調査して知ることの出來た、明治文化の建設に貢獻した諸外人が、既に上記の如く四百名ばかりあるのだが、然しこの調査は今日ほんの端に就いたものに過ぎず、將來より多くの調査と研究とが必要であることは勿論で、これらの外人の事蹟等は追々その調査を進めて完成させたいと思つてゐる。

□不完全ながらもこれまでに整理をするのには案外の努力を要したが、殊に一外人の事蹟に就いて重復した材料や、多少の誤聞などから一の材料でありながら相違した材料の錯雜を整理することにも、隱れたる材料を求めるといふことの外に苦心があつた。編者が最も煩はされた重復の材料、似て非なるもの、別者の如くして同一なるもの等は嚴密に調査し精選したので、さういふ點の誤や重復はない筈である。

□表中の事蹟はその主要事蹟を英文でも邦文でも記入の筈であつたが、これは忽卒の間に編したこととて、當を得てゐないものもあるかも知れぬが、然し略歷中にその正確なものは求め得られるので、表中のものはその人の事業の概要を示すに止めておいた。

□この略傳にもせよ一覽表にもせよ、その原稿を整理中にも、また甚しいのは印刷中にも重要事蹟や記入すべき新しき人名等の材料が逐次編者の下へ運ばれるので、折角の五十音順の一覽表も最初の文字だけを五十音に分けることが出來ただけで、次位の文字からは順が亂れたのは遺憾であつが、これは諒として頂き度い。

□同時に次の略傳中に於ても、部門を十に分けたが、これも便宜上に當てたもので、中には正鵠を失したものもある樣であるが、その正鵠なる部別は他日に讓つて、兎に角今のところ集められる丈のものを集めたといふことに止めねばならなかつた。

□この册子の刊行は、巻頭の趣旨にも述べておいた如く、これらの外人の事蹟に就いて將來の調査の資料を大方に乞はんが爲、その草案となるものを編したのであつて、その精細なる調査と整理の完成とは他日に讓らねばならぬのはこれを諒とせら度い。而してこの資料に就いては大方の御教示を給はらんことを茲に乞ふておく次第である。

法制經濟

ボアソナード（佛人）G. Boisonade Fontarabie

一八二五年佛國ヴンサンヌ府に生れ、巴里に遊學し法律を學び一八五二年法律博士の稱を得、一八六四年グルノーブル大學法科教授となり後巴里大學に轉じ經濟學を擔當した。

明治五年秋、江藤司法卿明治寮内に法律校を起しジュ・ブスケを教師としたが、六年末ボ氏來朝、聘して教師二名となつた。以來氏は刑法、治罪法の草案作成に從事し之は明治十五年實施された。次いで民法の草案に從ひ其一部は改正後實施を見た。尙氏は其他の法律の顧問となり又内閣外務にも盡す所あり、明治及和佛法律校へも出た。明治七年臺灣事件に際し我全權大使大久保利通に隨行を命ぜられ勳二等を賜つた。氏の功績中特筆すべきは我國の拷問を廢し證據裁判の必要を司法省に進言し實行を見たことである。二十八年歸國に際し勳一等竝に終身年金二千圓を下賜され、三十五年には帝國大學教師の功によつて名譽教師の稱號を得た。

ルヴォン（佛人）Michel Revon

一八六七年三月に生れ、長じてグルノーブル大學法科に入り夙に俊秀の名を得た。全國法科大學競爭試驗には拔群の成績を示し、又氏は首席をもつて文科大學學生を蹤え「リサンシェー・エス・レットル」の學位を得又羅馬法及佛國法に於ける論文提出によつて「ドクトエール・アン・ドロワー」の學位を受領した。尙佛國學士院より二回の賞與を得たこともある。

後ジュネーブ大學助教授として一年間民法の講義をなし、又巴里控訴院檢事局詰として特赦及び復權に關する調査報告をなした。氏が東京帝國大學の聘に應じ來朝したのは二十一年一月である。以來法科大學佛法教師として七年懇篤に學生の教導に從ひ、旁ら司法省名譽法律顧問を兼ね、我法學上の進歩に資せる功忘るべからざるものがある。二十八年敕任待遇となり三十二年勳三等瑞寶章を贈られ且特に拜謁の榮を賜つた。

ルビリヨウ（佛人）August Revillioid

明治二十二年より二十五年まで帝國大學法科大學佛法教師として招聘された、尙司法大臣顧問の要職にもあつた。同二十三年敕任待遇となり歸國に際しては特に陛下に拜謁の榮を賜つた。

チゾン（米人）Alexander Tison

一八五七年ミソリー州セントルイに生れた。二十一才にてミシガン州オリヴェット・カレッヂよりバチェラー・オブ・アーツの學位を得、後二年にして文學博士の稱號を送られ一八七八年より五ケ年に亙り同カレッヂの羅甸語教授となつた。後ハバード大學に入り法學を修め以來同府に代言者として業に就いた。

一八八七年卽ち明治二十二年東京帝國大學の聘によつて來朝し、同二十七年歸國に至る迄法科大學に於て英米法律學を講じた。其任期は短かつたが恪勤學生の進歩に大いに貢獻する所があつた。二十七年勳四等瑞寶章を贈與された。

テリー（米人）Henry T. Terry.

一八四六年コンネクチカット州ハルトホルド府に生れた。エール大學に在ること四年バチェラー・オブ・アーツの學位を得、後再びエール大學神學部に學び、了へて同學校の教職につき旁ら法律を學びハルトホルト府代言人の免許を得其業に從つた。

氏は明治九年東京開成校法律學教師として招傭され十七年一旦歸國しエール大學法律學教授となり、更に明治二十七年

帝國大學に聘されて來邦し、解任に至る迄二十有五年間我教育界に大なる貢獻をなした。氏が我學生の爲に書ける著書の如きは法律の研究上又教授上益する所極めて大なるものがあつた。歸國に臨み勳二等瑞寶章を賜ひ又終身年金二千圓を給與され大學名譽教師の稱をも得た。

レーンホルム（獨逸人）Dr. L.S. Loenholm

一八五四年に生れ、ライプチッヒ、ハルレーの兩大學に法學及び國法學を學んだ。後一九〇六年には樞密參事官の要職に就き又ライプチッヒ大學講師としてその學識を披歷した。

氏の來邦は明治二十年にして初め一ケ年間は獨逸協會に聘せられ法律學教師となり、二十三年九月帝國大學法科大學獨法教師となつた。在職二十一年子弟育成に盡力し、且旁ら司法省顧問となり行政に資益し又大藏省の財政經濟新報に執筆し其編輯に力を致せる等その功少くなかつた。氏の多くの著書中本邦に關するものを擧ぐれば、日本商法註釋（獨文）、同上（英文）、日本民法獨譯、日本民法論（英文）等がある。

明治二十六年敕任待遇となり、四十二年勳二等瑞寶章を下賜され、四十五年終身年金千七百圓を支給され、大正元年には大學名譽教師の稱號を得た。

ブリデル（佛人）Louis Bourdelle(?)

一八五二年巴里に生れた。一九〇〇年卽ち明治三十三年に東京帝國大學の招聘に應じて來邦法科大學佛蘭西法律學教師となり職に在ること實に十有三年の久しきに及んだ。その間氏は終始一貫職務に勤め數百の學士を出し、氏が造士育英に盡したる功は忘るべからざるものである。大正二年三月俄然病を得十三日に不歸の客となつた。享年六十一である。

氏には左の著書がありその學識の一班を窺ふことが出來る。卽ち「婦人及法律」（一八八四年）「婦人の權利及法律」（一八九三年）「同上西班牙語譯」（一八九五年）「同上波蘭語譯」（一八九五年）「婦人問題に關する雜書」（一八九七年）等がそれである。

ウィグモアー（米人）Wigmore

氏はハーバート大學前總長エリオット氏の紹介にて明治二十三年來邦し慶應義塾法學部教師となり教授の旁日本の法律その他に就いて研究し在職三ケ年にして歸國した。氏は才氣に富める少壯學者にして將來を囑目され、歸米後は米國法學界に廣く知られた。國際倫理學雜誌の主筆たりしことあり又法律に關する多くの著述をなした。その中には日本に關するものもある。現にノーストウィスタン大學の法學部長である。

アッペール（佛人）George Appert

明治十二年司法省に招聘せられしが後文部司法に兼任するに至つた。同二十年より二十二年迄は帝國大學法科大學佛法學教師として在任し、功によつて同十七年勳四等に叙せられた。

デニソン（米人）Henry Willard Denison

一八四六年バーモント州ギルドホールに生れた米國法學者である。一八八〇年卽ち明治十三年我國に來り以來大正三年に至る三十四年間我外交顧問として我國の爲に盡した。氏が如何に我國に厚意を有せしかは時の米大統領ルーズヴェルト氏に「君は果して米人なりや日本人なりや」と叱嗔されたと言ふ話柄をもつても分る。氏は實に日本にとつて忘るべからざる人である。大正十一年日本の爲に殁れた。功によつて勳一等を授與された。

サトオ（英人）Sir Ernest Mason Satow

氏は英國の外交官にして一八四三年に生れ文久元年駐日英國領事館通譯生として十八歳の時に初めて來朝し、日本外史の飜譯を試みた。慶應二年領事館員より公使館員となり江戸に來り時の英公使パークス氏の爲に大いに役立つた。氏は晩年駐日英國公使となつて東京に在住し次に支那に轉任し後官を罷め、今は故山に九十に近き高齢を以て老を養つて居る。氏は日本文化に對する功蹟甚だ大にして、ハウス氏との共著に係る日本に關する研究書、石橋氏との共著英和辭典其他

Jesuit Misson, press in Japan 1591-1616 等の著がある。尙晩年エ・デブロマチスト・イン・ジャパンと題せる一書を著した。これは本邦開國の顚末を知るべく最も貴重なる參考資料である。

ハリス（米人）Townsend Harris

一八〇四年サンデーヒルに生れ、ペリー條約後一八五五年第一次駐日米國公使として來朝した。當時我國の諸國に對する外交は極めて幼稚であつたが、氏の進言を得て大いに益する所あつた。一八五八年には辨理公使となり、一八六一年職を辭し、ニューヨルクに死去したのは一八七八年であつた。

ラウダ（英人）Lawder

氏は明治初年英領事として神戸に在りノルマントン號事件に關係し功績多かつた人である。後辯護士として横濱に在住した。

スミス（米人）Erasmus Peshine Smith

一八一四年ニューヨークに生れ、一八三二年コロンビア、一八三三年にはハバート法律學校を卒業し暫らく州の官吏となつた。氏は法律及經濟學者であつて一八五三年に"Manual of Political Economy"を著した。一八七一年に來邦し國際法に關し我國政府の顧問として五箇年在職し、一八八二年ロチェスターにて死去した。

ラートゲン（獨逸人）Dr. Karl Rathgen

氏は一八五五年三月ワイマルに生れた。ドクトル・オブ・ポリチカル・サイエンスの學位を有し、明治十五年四月より同二十三年四月に至る間東京大學文學部に於て行政法及政治學教師として奉職し、旁ら（明治十九年）農商務次官の囑託となり各國相場會所に關する法律規則等取調の質疑に應じた。同二十三年特に拜謁を賜り勳四等旭日章を贈與され、同年五月歸國した。

ベリー（米人）Dr. John C. Berry

氏はマサチューセット州に生れた。明治五年五月來朝後岡山に病院を設置し我國の爲に衛生の道を講じ、又我國監獄の改良すべきことを進言しその實行に盡力した。

ドロッパース（米人）Droppers

氏はハーバード大學出身にして明治二十三年慶應義塾に聘せられて來朝し理財學部教師となり在職四五年にして歸國した。三井銀行の池田氏等は氏に教を受けた人である。歸米後教職に就き又ギリシヤの公使となつたこともあつた。現にウイリアムス・カレッヂ教授である。

スプレーグ（米人）O.M.W. Sprague

一八七三年北米合衆國マサチューセット州に生れ長じてハーバート大學に政治學を修め後ドクトルの學位を得、尋いで同大學旅行研究生として英國に在留し歸國後に同大學經濟學助教授となつた。明治三十八年我東京帝國大學の招聘に依つて來朝し法科大學經濟學及財政學教師の任に就いた。以來職に在ること約三年にして同四十一年七月解任歸國した。氏は明治三十八年高等官五等以上の奏任待遇となつた。

フォクスウェル（英人）Ernest Foxwell

氏は一八七五年ケンブリッヂ大學倫理學試驗科に及第し且同科中の經濟學試驗を通過してバチェラー・オブ・アーツの學位を得た。後醫學に志し數年螢雪の勞を積みしが故ありて之を中止し、一八八一年より同四年迄ケンブリッヂ大學にて經濟學教師の職に就いた。氏は夙に英國鐵道制度の研究に心を留め著書其他實地に功ありしを以つて英國及外國の鐵道管理者より幾多の禮遇感謝を得た。後ケンブリッヂ大學の學位試驗に於ける經濟學及英國文官試驗の試驗官となつたのである。斯くて明治二十八年我東京帝國大學の招聘する所となり同二十九年に來朝し法科大學經濟學及財政學教師となり尋いで東京

高等商業學校經濟學教師を兼ね明治三十二年解任歸國した。

グリフィン（米人）Charles Sumner Griffin

氏は一八七二年北米合衆國カンサス州ローレンス市に生れた。カンサス大學及びハーヴァード大學を了へ尋いでハーヴァード大學經濟學の助手に任ぜられた。後キョークランド氏給費留學生としてハルレー及ベルリン大學に學んだ。我東京帝國大學の招聘に應じて來朝せしは明治三十二年にして爾來法科大學經濟學及び財政學教師として勵精以つて學生指導の任に當り其功績頗る大なるものあつたが、同三十二年九月俄然相州箱根に永眠した。享年三十二。

ウェンチヒ（獨逸人）Dr. Heinrich Waentig

氏は一八七〇年索遜國ツウイカウに生れ、長じて伯林、ミュンヘン、ライプチッヒ、維納の諸大學に歷遊し、一八九三年哲學博士の學位を得、後クライフスワルド大學の經濟學正教授となりミュンスター及ハーレーの兩大學に轉任した。然して明治四十二年東京帝國大學の招聘に應じて來朝し法科大學經濟學及財政學教師として在職約四年餘、氏は學問該博加ふるに授業の勤勉と懇篤以つて學生陶冶に良成績を得たが、會々其本國文部大臣の招還する所となり大正二年中途解約歸國した。

ウエンクステルン（獨逸人）Adolph von Wenckstern

氏は一八六二年グロース・チベルンに生れた。一八八五年迄兵務に服し、同年學術研究を兼ね農業實踐のためスマトラ島東岸煙草耕作地に渡航し、歸國後伯林大學にて經濟學財政學を修め同大學より哲學博士の稱號を得た。

明治二十六年東京帝國大學に聘せられて來朝し理財學教師として二十八年まで在職した。

ヴィッカース（米人）Vickers

氏はハーバート大學のエリオット氏の推薦にて明治二十八年頃慶應義塾に招聘され理財學部教師となつた。氏は立派なる教育家にして在職十數年よく學生の教導に盡し又日本に厚意を有し日本人を妻とした。歸米後も大いに日米親善に盡く

す所あり現にウェストバージニアの教頭である。

ラーネッド（米人）Dwight W. Learned

氏はエール大學を優等にて卒業し、來朝後即ち明治八年頃より現在に至る同志社に於ける經濟學、神學教師として學生の信望厚く好影響を與へ、又聖書註解をもなした。その著經濟學は明治二十四五年頃各校の教科書として使用せられしものにして浮田博士の譯がある。

シャンド（英人）Alexander Allen Shand

氏は英國に生れ經濟學財政學に通じ殊に銀行學をもつて專門とした。早く横濱東洋銀行の書記として本邦に渡來した人である。明治七年紙幣頭外國書記官兼顧問長として傭入られし時は年齢僅に三十歳であつた。明治十年一月に紙幣寮の紙幣局と改稱せらるゝや氏は一時新に設置された銀行局に入つた。氏は在任中銀行檢査、報告、帳簿其他銀行事務の改良に盡力したのみでなく銀行大意及び銀行簿記精法等銀行必須の書を著述し斯業に關する知識を國民に注入した。又明治七年四月銀行課中に銀行學局の開設を見るや氏の指授に出づるもの多く、後に銀行雜誌の刊行に當つては材料を氏の著書より取りしもの少くない。氏の歸國に臨んで大藏卿は特に臚を贈つて其功勞を謝した。後氏は本國に歸り「バース」銀行倫敦ロムバート町支店長となり、明治三十二年本邦公債を同地に於て募集するに際し頗る斡旋する所あつた。

スコット（米人）Matthew Scott

我國に初めて通貨、銀行、特許の範を示せる人である。

ブロックホイス（白耳義人）E.J. Blockhuys

氏は初め東京高等商業學校にて商業學を教へしが、明治四十四年東京帝國大學商業學教師となり今日に及んでゐる。

エッゲルト（獨逸人）Dr. Eggert

一八四六年サクセン府アーク・アルスレーベンに生れた。ハール、ライプチッヒ、ゲッチンゲン三大學に歷遊し一八七五年ゲッチンゲンより理財學及財政學博士號を得、後實地研究に從ひ一八八〇年ゲッチンゲン大學講師となり後教授に擧げられ又マンデウ大學理財學及財政學教授を兼ね、一八八六年には伯林殖民協會名譽書記官長の要職に就いた。

明治二十年來朝法科大學教師となり理財學及財政學の講筵を擔當した。在任六年力を學生教導に用ひ旁ら大藏省財政顧問となり貢獻する所極めて大であつた。

二十六年期滿ちて歸國せんとするや病を得、湘南に靜養したが起たず同年三月四十五歳にして永眠した。

マリス（米人）Marris

氏は我國に貨幣制度及び專賣法を紹介した。

ウィリアムス（米人）Gen. G. B. Williams

氏はインヂアナ州の產にして、我政府の財政顧問であつた。一八七一年初めて外國公債を契約せしめたのは氏の力である。

イルウィン（米人）Irwin

米國パシフィック・メールの代表者であつて、我外務省に對する功績は極めて大であつた。井上侯が明治六年退職し海外貿易を計劃せし時も氏に教へらるゝ所多かつた。これが現在の三井物產の元祖であり引いては日本海外貿易の祖をなしてゐる。又布哇移民を日本に許可したるは氏の力によるものである。氏は功を賞され勳三等に叙せられた。

ウッシャード（米人）Wishard

米國青年會の派遣員萬國青年會幹事たる氏は明治二十二年一月に來朝し各地に信仰復興の集會を催し、殊に同志社に於ける氏の運動は目醒しきものであつた。これがため同年三月二十四日の聖日には一時に百三名の受洗者を出した。又氏の勸誘により米國ノースフォールドの夏期學校に倣ひ同年六月の夏期學校を同志社にて開いた。これ我國に於ける夏期學校の濫觴にして爾來毎年各地にこれを開いた。

ウィリアムス（米人）C.M. Williams

米國にて我邦に最初に宣教師を派遣したのは北米合衆國監督教會外國傳道會社でその第一の宣教師はウィリアム氏及ジ・ン・リッギンスの二名であつた。この二人は元支那傳道の爲に派遣せられた宣教師で三年間同國に傳道したが遂に我國に來り日本最初の新宣教師たるの光榮を史上に殘したのである。氏の來邦は安政六年六月の末で未だ定住の權利を有しない時代である。後氏は慶應二年支那及日本の監督となる禮を擧げんが爲歸國せしが明治二年再度來朝し爾後大阪に定住して傳道に從事した。慶應二年春肥後の下村某は氏より受洗した。

デフォレスト（米人）J.H. DeForest

明治七年渡來し最初十三年間大阪に居た。新島氏等仙臺に東華學校を起すに當つて同地に移轉し、死に至る迄同地方は勿論日本全國に傳道した。氏は日本語に長じ演說に巧にして日露戰爭の際は青年會を代表し北滿の地に活躍した。屢々歸國せしが日本に厚意を有し日米親善に盡せし所尠くなかつた。享年六十五歲にして明治四十三年五月東京聖路加病院にて

永眠し仙臺に葬つた。生前卽ち明治四十一年に功績を認められ勳四等に叙せられた。

マコーレー（米人）J.K. McCauley

ハーバート大學の出身にして一八八〇年に來朝し三田に住して傳道に從つた。氏は鈴木文治氏を今日に至らしめた人で友愛會には間接に援助を與へた。又慶應義塾には種々有益なる助言をなした。

ギュリック（米人）O.H. Gulick

氏は長く布哇に在つて傳道に從事せしが、明治四年三月に渡來し、明治八年神戸に於て七一雜報なる傳道週刊新聞を發行し村上俊吉を編輯人今村謙吉を發行印刷人とした。これ當時邦國に於ける唯一のキリスト教新聞であつた。當時投書家は關西地方のみならず關東奧羽にもあつたのである。氏は明治二十年熊本教會に來つて永住せらるゝことゝなつた。

バラ（米人）J.H. Ballagh

リフォームド教會の氏夫妻は文久元年（一八六一年）神奈川に着し文久三年夏にブラウン氏と共に横濱に移つた。慶應年間ブラウンスと共力して聖書のある部分を譯した。氏の語學教師矢野元隆は洗禮を受け又明治元年粟津高明、淸水貫一の二人も受洗した。

グリーン（米人）D.C. Greene

氏はボールドの幹事ダニエル・デー・グリーンの子にしてアントヴー神學校の卒業生である。アメリカンボールド傳道會社最初の宣教師にして明治二年十一月に來朝した。氏の傳道の動機はアーマスト大學生時代の新島襄氏の慫慂に淵源したるものであつた。當時一人の宣教師なき神戸に住しこゝを傳道の根據地と定めた。これ日本に於ける會集主義教會の發端にして初め邦語を學ぶことゝ該地在住の外人間に傳道することに努めた。明治四年氏の語學教師市川榮之助氏は日本譯の馬可傳を氏より借りて讀みしが爲に夫妻は投獄せられ獄中にて死した。後同五年頃三名の青年は極めて祕密に氏の宅にて

聖書を研究し同七年に至り氏が主となり初めて教會を設立するに至り杉山高吉、前田泰一、鈴木清、小野俊一、佐治職、太田源造、北村元廣、市川まつ、甲賀ふじ、小山りき、太田とら受洗した。これを攝津第一キリスト公會（現今の神戸教會）と稱した。明治七年七月氏は聖書飜譯の任をおびて横濱に移り同年七月よりこれを開始し、氏以外にヘボン、ブラウン、マコーレーこれに當り同十三年四月これを完成した。

アダムス（米人）Adams

明治九年大阪東區高麗橋四丁目に診療所を設けた。當時は公然宣傳することが困難なりしため施療の旁ら宣傳したのである。後日曜學校及祈禱會を開始した。

パーム（英人）Dr. Palm

明治八年五月エヂンボロ醫學會より派遣せられ新潟に來住し傳道及醫療に從事し初め運上所通に講義所を設けた。押川方義氏は氏の事業を助けて同年十一月初めて教會を組織し押川氏と醫療及傳道のため各地を巡回した。同年中條の信徒一教會を組織し且會堂を新築した。これ北越に於ける會堂建設の嚆矢である。同十六年九月歸國せんとするや傳道を米國傳道會社に委托した。氏は北越に在ること八年受洗せるもの百四名醫療を受けしもの四萬信者たると未信者たるとに關せず氏の德をしたふもの該地方には尠くなかつた。

ニコライ（露國人）Pere Nicholai

ニコライはスモレンスク縣ベリヨーザ村の輔祭デイミトリー・カサツトキンの子で、イヲァンと云つた。ニコライとは、修道士となつてからの改稱である。露國神學大學を卒業し彼れが來邦したのは文久元年で二十四歳の時であつた。始め露國公使館の司祭として來たのであつたが、遂に日本全土に布教せんとの考を起し、北海道を中心とし鋭意是に努めた。氏は博覽にして日本文學にも精通し、唯に宗教家として日本に貢獻する所大なりしのみならず、日本初期の外交方面に於ける

氏の功績は極めて著しかつた。日本に於ける五十餘年の生涯は神への奉仕と日本國民の宗教的教育に終始した。四十四年二月七十八才の高齢を以て日本に逝た。

アナトリー（露國人）Anatoley（？）

ニコライ氏と同勞者にして明治四年十二月七日我函館に來た。篤實溫厚の宣教師にして特に神學及哲學に精通せる學者であつた。ニコライの上京後は函館方面の傳道と教育に力を盡した。

ヘボン（米人）J.C. Hepburn

北米合衆國プレスビテリアン教會の氏夫妻は安政六年十月十八日に神奈川に着し、施療院を開いた。患者の來るもの頗る多く遂に政府はこれを禁止した。文久二年末横濱に移るや再び施療院を設け我國人の敵愾心を和ぐるに與つて力があつた。神奈川滯在中男子五名を集めて教育し、夫人も慶應三年頃女子の教養に意を致し女子教育の濫觴をなした。慶應元年頃馬可傳及約翰傳の飜譯に着手せしがこれを終へなかつた。後慶應三年バラ及トムソン兩氏と戮力して馬可傳のある部分を譯了し、又同年文化史上特筆すべき和英英和辭典（和英語林集成）を著し更に宗教上の小册子をも公にした。明治二年中河屋嘉兵衛、岸田銀治の兩氏の油田調査の願出は氏の申言によるものと言はれ、横濱に於ける牛乳搾取業及函館の製氷事業に對する助言も亦忘るべからざるものである。岸田銀治氏の點眼水精奇水は氏の處方に依るものにして氏の好個の紀念である。實に氏は明治二十五年に至る長期間我邦に滯在し我邦文化に盡せる功は忘るべからざるものである。明治三十八年（當時九十歳）氏はその功に依り勳三等を贈られた。

デビス（米人）J. D. Davis

氏は米國ベロイト大學を出でシカゴ神學校に神學を學び後二年半西部の一小邑にて教會に從事した。氏夫妻は明治四年十二月に神戸に着し翌年十二月神戸宇治野村に一英語學校の設立さるるや氏は聘せられて主任教師となり毎日授業前に聖

書を敎へ或は敎科書として舊約書を用ひた。その結果學校關係者中にも受洗者を出すに至つた。氏は又同志社の創立者として新島氏と同功一體の人物で明治八年その敎師となり敎育のため又傳道のために盡す所尠くなかつた。氏の神學思想に對しては同意せざるものもあつたが信仰精神に對しては感服せざるものはなかつた。

インブリー (米人) William Embrie

氏は傳道の爲に來り後明治學院副總理となつた。明治初年島田三郎氏との共著會話篇を公にした。

ギュリック (米人) John Thomas Gulick

氏は一八三二年三月布哇の一宣敎師の子として生れ、一八五八年にはカリフォルニアの礦山事業に關係し一八五九年ウォリアム・カレッヂを卒業した。氏は宣敎師として亦生物學者として嘖々たる名聲を博し特に進化論に對する氏の貢獻は極めて重要視せられ、又ランドセル(陸上貝)の研究者として知られてゐる。一八六四年より一八九九年に亙つては日支兩國の布敎に奉仕し日本に於ては同志社にあつて敎育上、宗敎上盡せし所極めて大であつた。

ヂェーンス (米人) Cap. L.L. Janes

氏はオハヨー州の產にして同州ウェストポイント陸軍兵學校を出、砲兵大尉として加州サンフランシスコ要塞に勤務中明治四年熊本洋學校の招聘に依り來邦した。熱烈なる基督敎徒にして英語を敎ふると同時に日本に於ける精神的方面の改革を志し銳意青年の薰陶に努め在任五年後大阪英學校の敎師となり在任一年にて歸米した。明治九年藩校廢止に際し氏に敎を受けし青年は熊本郊外花岡山に會し日本に於ける精神界の革新を約し熊本バンドなる一團を組織した。氏の感化の如何に大なりしかは之に依つても窺ふことが出來る。後年第三高等學校の敎師として來り居ること三年にして歸國し明治四十二年三月二十七日加州サンダーゼに於て七十三歲にて死去した。

農學者としての氏は我國に養蠶を初めて傳へ、荒廢地開拓法を敎へ且農業用器具を輸入せしむると共に米國種薯種及芹

等の繁殖を計つた。氏の農業上の門下には博士横井時敬氏ありその他の方面に於ては海老名彈正、小崎弘道、浮田和民、德富蘇峰、金森通倫、横井時雄の諸名氏を出した。

ドーン (米人) Doane (?)

創立時代の同志社の敎師にして當時新島襄氏は福音書、デビス氏は詩編、ドーン氏は創世紀の講義をなした。後明治九年京都に三敎會の設立を見るや第三公會の主任者となり翌年三月歸米した。

ブース (英人) William Booth

一八六五年一個の傳道者たりし氏は倫敦東部の貧民窟に入り傳道に從事し「東倫敦傳道會」なるものを組織した。後これを改めて基督敎傳道會と稱し一八七七年卽ち明治十年同傳道會は嚴然たる軍隊組織を採用し救世軍と稱せしむるに至つた。以來その事業の進步發展は目醒しいものであつた。救世軍が日本に開戰せしは明治二十八年にして氏が十數名の男女士官を我邦に派遣せしことに始つた。氏の來邦は明治四十年にして朝野の歡迎を受け滯在僅か一ヶ月なりしが到る處に於ける大將の演說は大いに我國に救世軍を紹介しその主義精神を一般人に了解せしめた。氏は一般人民に歡迎されしのみならず、畏しこくも 明治天皇に謁見を仰付られ而も破格をもつて救世軍大將の制服の儘これを許されたた。其後に於ても皇室より救世軍の事業に對し幾度か巨額のお下賜を拜受した。

ライト (英人) Colonel Edward Wright

明治二十八年に初めて派遣され救世軍士官にしてその時十數名の男女士官と共に氏は司令官として來つた。當時救世軍に對し一人の同情者のなかりし時代にありて力戰奮鬪せしが夫人の健康衰へし爲間もなく歸國した。氏は實に我邦救世軍の開拓者として記憶さるべき人である。

バラード (英人) Commissioner Henry Bullard

氏は明治三十三年の春に救世軍ブース大將に派遣せられて來朝し、我邦救世軍は氏の指導の下に大なる發達を見た。氏は出獄人救濟所を擴張し婦人救濟所を開設した。尙その他氏の時代に創められし事業は失業者救濟、安宿、一ぜん飯屋、餅配り、滿洲に於ける婦人救濟事業等である。

デュース（英人）Lieut. Commissioner Charles Duce

救世軍が日本に開戰後間もなく派遣せられし外國士官にして最初東京聯隊長、士官學校長を勤め後ブラート大佐の時代に書記長官となり可なり長く日本にあつて忠實に奉仕し彼の救世軍の娼妓救濟の特別運動の際には暴漢のため負傷した。後英國に歸り程經て日本司令官として再度來邦大いに爲さんとする所ありしが赴任後眼疾を患ひ已むなく歸國した。

ゴルドン（米人）Rev. M. L. Gordon.

氏は北米合衆國ペンシルバニアに生れ、南北戰爭に加はり後學校に入つた。了へて日本へ傳道せんとの望みを懷き、當時宣教の自由なからしめた醫師として明治四年頃來邦し治療の傍に道を傳へた。二三の著書がある。

教育

マーレー（米人）David Murray. Ph. D., LL. D.

デラウェアに生れ、一八七三年卽ち明治六年に來邦し同十二年まで滯在した。氏は東京師範學校の設立さるゝや聘せられてその學監となり、又文部省の督學として教育行政にも參與し現在の小、中、大學の教育制度の制定に關しても力を盡した。又氏は日本人の數學的方面の幼稚なるを憂ひ一千弗を提供してその奬勵に資せられた。是れ卽ち帝國大學のマーレー氏寄贈數學奬勵基金の基礎をなせるものである。又お茶の水の東京教育博物館を建設せるも氏の力であつた。

スコット（米人）M.M. Scott

明治四年大學南校英語及び普通學教師として聘せられしが、明治五年八月東京師範學校の創設さるゝや轉傭され教育指導の任に當つた。日本の師範教育制度の制定されしは氏の力に依ると言ふも過言ではない。在邦十二年その間教育界に盡せし功はマーレー氏と共に忘るべからざるものである。明治十八年勳四等に叙せられ旭日章を賜り、大正十一年ホノルルに於て高齢をもつて死去した。

イング（米人）John Ing

メソヂスト宣教師にして明治初年ヂェームス氏と同じ頃に弘前に來つた。我東北地方に於ける英語教育の先驅者としての功は沒すべからざるものである。尙氏は東歐義塾を立て多くの人材を養成した。伯珍田捨巳、佐藤愛麿、本多庸一の諸名士はその出身である。

クラーク（米人）Col. Wm. S. Clark, Ph. D.. LL. D,

マサチューセット農科大學學長たる人にして、我國に方て札幌農學校設立に助力し、一方禁酒思想を鼓吹せる人である。氏は恰も熊本のジェームンに比すべき精神教育家にして後進の薫陶に關する氏の功績は極めて顯著であつた。

ハウスクネヒト（獨逸人）Dr. Emil Hausknecht

氏は一八五五年に生れ伯林府フォルク・リアム・ジムナシアムの教諭でありマヂスター・アーチャム・リベラリアム及びドクトル・デル・フィロソフィーの學位を有してゐた。明治二十年より二十三年迄帝國大學文科大學に於て獨逸語及教育學教師として奉職し、我國にヘルバルト學派の教育思想を廣めたのは與つて氏の力に依るものである。氏は亦一方知名なる統計學者でもあつた。

フルベッキ（蘭人）Guido F. Verbeck, D.D.

氏は一八三〇年和蘭ノゼリストに生れ長じてウイレッチ衆藝院を了へ、後米國に渡り北米アーブルン神學校の選に依り安政六年肥前長崎に來航した。我國が公然開國して以來の最初の來朝者である。以來幕府の命により長崎にて八年教育に從事し、明治二年大學南校に入り語學及び學術教師となり後教頭をつとめ同六年迄在職した。同年政院左院に聘せられ翻譯顧問となり八年より十年迄は元老院に職を奉じた。斯く氏は開國擾亂の際に於て我國教育及社會組織改造に盡す所極めて大であつた。尚氏はナポレオン法典を反譯紹介し又我國二百年來の蘭醫に代つて獨逸醫の採用すべきことを進言し政府はボードウイン、マッセ、シモン等を聘用した。我國にて死去する迄三十九年氏の生涯は全く日本の爲に終始した觀がある。大隈侯、副島伯、後藤伯は氏の門下中の人材である。三等勳章を拜受し、一八七四年北米ヌージセセーラッドゲルス學校より神學博士の稱を得た。

イーストレーキ（米人）W. Eastlake

氏は明治十七年頃に來邦し東京にてインデペンデンド（週間英文）を發行せしがこれは我國に於ける英字新聞の鼻祖である。後同二十一年二月磯部彌一郎氏と神田に國民英學會を起せしが同二十三年十二月に分離し氏は自ら英學校を神田に設けた。氏は教授及著述に於て大いに日本の英語發達に盡す所あり、著述には英和辭典、會話篇、英文日露戰爭記等がある。明治三十八年日本に於て死去した。

イーバンス（英人）Evans (?)

明治五年イーバンス夫妻を聘し、京都の官有邸を校舍に當て主として華士族良家の子女に教育を授けた。これ京都女紅場と言へるものにして、現府立第一高等女學校の前身である。氏は實に初期の日本女子教育に對する恩人である。

ブラウン（米人）Rev. Samuel R. Brown, D.D.

米國コンネッチカット州に生れた氏は安政六年に來邦し（ヘボン氏の來朝と同年）明治十三年に歸國した。氏は社會改良事業、女子教育及盲唖教育機關を初めて我國に起せし人にして、又個人の子弟教育にも力を盡し獻身的に布教をもなした。崇高なる隱君子にしてその名を顯はす事を好まなかつた。氏の殘したる人碑としては男都築馨六、工學博士白石直治、島田三郎の如き人材が極めて多い。

キャブロン（米人）Gen. Horace Capron

氏は一八七三年我邦に來り、從來全く荒廢の地たる北海道に初めて移民を企圖したことは一大功績であつた。尚氏は米國產穀類、果樹、畜類等をも移入せしめた。亦氏が一面日本の婦人教育事業に盡瘁せることも記憶さるべきである。

キッダー（米人）Miss Mary Kidder（後 Mrs. E.R. Miller）

一八七一年に來朝し、日本に於ける婦人教育者の先驅者である。

タルコット（米人）Miss Eliya Talcott

ダッドレー（米人）Miss J.E. Dudley.

共に明治六年春來朝し神戸に居を定め、初め附近の小數の女兒に英語を敎へしが、明治八年春九鬼隆義氏を初め神戸在住の邦人有志者に訴へて寄附金八百圓を得これに米國傳道會社の寄附金を加へて山手に三間に七間の三階建一棟を造つた。當時野草茫々たる原野の中にあり校名を神戸英和女學校と稱した。今日の神戸女學校である。タルカット女史は一八三六年五月に生れた。前記女學校の外に女子神學校を起し、又實に模範的人格者にして或は岡山に或は京都に或は東京に傳道し、汽車の上電車の中又船の上と時と所とを選ばず遇ふ人毎に道を傳へて止まなかつた。明治四十三年十一月七十六歳をもつて神戸にて永眠した。尙ダットレー女史は不健康のため三十三年に歸國したが、南部カリフォルニヤにて精養中遂に三十九年病歿した。

デニング（英人）W. Deming

氏は一八七八年に來朝し一八八二年迄北海道の布敎に從事せしが思ふ所ありてこれをやめ、後時の文部大臣森有禮氏に知られて英語讀本の編輯に關係し又文部省の仕事をなした。その後海軍の學校の語學敎師となり新聞(Japan Gazette)に記者となりしこともあつた。二三年間濠洲に暮し再遊後は仙臺高等學校の敎師となり、一九一三年卽ち大正二年十二月同地にて死去した。氏は一般來邦の外人と異り日本語及漢文にも通じた。在邦中に種々の飜譯をなし又日本についての著述例せば秀吉傳、日本物語等がある。

レーランド（米人）Dr. Leland

マサチューセット州に生れ、一八七八年に來朝し我國に體操を紹介せし人である。

ブラッドベリー（米人）Bradbury

高等師範及國民英學會に英語を敎へ後明治三十三年海軍機關學校に轉じ三十五年迄在職した。

マードック（英人）Murdock

氏は第一高等學校の英語敎師にして山縣五十雄氏との共著英文日本歷史がある。基督敎の日本に於ける發達を知るに重要なるものである。東京を去つて鹿兒島造士館中學敎師となり後濠洲にて死去した。

スミス（英人）Smith

明治二十五年頃に來朝し初め國民英學會に英語を敎へ後學習院の敎師となり最後に外國語學校に奉職した。

マイヨ（佛人）Maillot

明治三年氏は大學南校に佛蘭西語學窮理學敎師として傭聘され、同六年より二ヶ年の約をもつて諸藝學校物理學及化學敎師として傭用されしが同七年八月に病死した。

ウォルソン（英人）Alexander Wilson

氏は明治二年より同三年に至る迄大學南校に英語敎師として在職せし人である。

イートン（米人）Eaton

明治六年頃より同九年頃に至る間の大阪英語學校に於ける敎師である。

ペニー（米人）George Penny

氏は明治六年頃より同九年頃迄の大阪語學校敎師である。

ホール（英人）Hall

明治四年大學南校に入り英語敎師として同五年迄在職し、去るに當つて縮緬五反を下賜された。

ボードウィン（米人）Charles Baldwin

明治四年京都に外國語學校が創設されしが、氏は同校英學校の主任敎師として獨のレーマン、佛のヂュリー氏等と大いに盡くす所あつた。

メーエル（英人）Meyer

氏は明治二年大學南校英語教師として招聘せられ同三年四月迄在職した。

ローレンス（英人）Dr. John Lawrence

氏は一八五〇年ヨーク州フラウダース・カレッヂに入り後倫敦大學を了へ、或は學校を設け或は教職に就きしが氏は修學の念強く攻々として努め古文學及近世語學に於けるマスター・オブ・アーツの學位を得た。後ブラーグの獨逸大學に於て英語教員となり旁ら學位論文の執筆に從ひ一八九三年倫敦大學よりドクトル・オブ・リテラチュアーを得た。翌年歸國せしが學問大成の念愈固くオックス・フールド大學に入り了へてマスター・オブ・アーツの學位を得た。一九〇一年倫敦府の女學校に英語及英文學を教へ又同府大學へも出た。東京帝國大學に聘せられしは明治三十九年で文科大學英語及英文學教師となり精博なる學識と得難き經驗とをもつてよく學生を教導した。然るに不幸大正五年病を得六十六歳を一期として永眠した。在職中の功に依つて明治四十三年勅任待遇となり大正四年勳四等に叙せられ旭日小綬章を下賜された。

ダラス（英人）Charles H. Durham

氏は明治三年五月大學南校英語教師として聘せられ、同四年三月迄の期間なりしが、同三年十一月二十三日夜東京神田鍋町に於て遭難負傷せるため解傭された。

トムソン（米人）Thompson

大學南校英語及普通學教師として明治三年八月聘用され、四ケ月在職した。解職に際し物品を贈られた。

コックス（英人）William Dauglas Cox

氏は舊駒場農學校英語科教師として明治九年六月招聘されしが、同十二年九月には豫備門に轉傭せられ、同二十三年六月より二十七年三月迄農科大學英語學及羅甸語學囑託講師として教鞭を執つた。二十一年五月勳五等に叙せられた。

コルンス（米人）Edward Cornes

明治三年一月より同四年一月迄の期限をもつて大學南校英語教師として傭はれしが、不幸、同三年七月五日死去した。埋葬費として月俸三ケ月分洋銀九百元を贈與された。氏の死は横濱築港沖に於て汽船沈没の際その慘禍に罹つたものである。

メーヂル（英人）Alfred Major

氏は明治四年大學南校に聘せられ普通學及英語教師として同七年迄在職、次いで九年開成校物理學及數學教師となり十一年解傭された。功によつて明治十八年勳四等に叙せられ旭日章を授與された。

カデルリー（瑞西人）Jakob Kaderly

氏は大學南校獨逸語學教師として三年一月より四年十一月迄在職した。解傭に際し物品を贈與された。

レーマン（獨逸人）Rudolf Lehmann (?)

明治初年西歐文化はその國語をもつて知るが早しとの見地より京都に外國語學校の創設（明治四年）を見しが、氏は獨逸學校の主任として聘せられし人にして初期語學教育界の功勞者である。

ワルツ（獨逸人）Walz

明治二十年より三十年頃迄在留し後米國に歸化せし人で、國民英學會に英語、第一高等學校に獨逸語を教へた。

ヂュリー（佛人）Leon Derys (?)

明治四年京都に外國語學校の創設さるゝに際し、佛語學校の主任として招聘されたのが氏であつた。獨のレーマン、英のボルドウィンと共に當時に於ける語學上の貢獻者である。

ガロー（佛人）Garaud

明治二年五月より同五年三月迄大學南校佛語教師として在職し、解傭に際しその功を賞し物品を贈與せられた。

グレー（露國人）Gray

氏は舊外國語學校の教師にして、日本に初めて露文學及露語を紹介せし人である。トルストイ等を初めて紹介せしも亦氏である。明治文壇の重鎭二葉亭四迷氏は氏に就いたのである。

チャンバレン（英人）Basil Hall Chamberlain

氏は明治十九年四月帝國大學文科大學日本語及博言學教師として招聘されしが、同二十三年三月病を得靜養の爲一ヶ年間歸國した。その間歐洲に於ける極東（主として日本）の語學の現況及將來に關しての研究を囑託されしも同年九月願について解傭された。同二十四年大學名譽教師となり同四十四年勳三等瑞寶章を下賜された。

文藝　美術

ケーベル（露國人）Dr. Raphael von Koeber

一八四八年露國ニジュニ・ノブゴロットに生れ父母は何れも獨逸の產である。初めモスコー帝國美術學校に入り特に音樂史、音樂理論の研究に意を注ぎ、卒業後エナ大學にてヘッケル等に就き文學、修身、心理學及哲學を研究し後「自由論」を著し哲學博士の學位を得た。其後カルスルーヘにて倫理、音樂史、音樂理論の教師となり一八八五年以來は閑居し著述に耽つた。

明治二十六年東京帝國大學に來り文科大學哲學科教師となり又西洋音樂を音樂學校に講じ、大正三年七月に至る實に二十一年我學界殊に哲學界に貢獻する所頗る大であつた。

明治三十八年敕任待遇を受け、大正三年七月勳三等瑞寶章を下賜され、尙同年九月には終身年金千五百圓を支給さるるに至つた。

サンマース（英人）James Summers

氏は我國に於て論理學を教授せる最初の人であると言はれる。卽ち明治六年より開成學に於て論理學を講じたので、教科書としてはファウラーの演繹法及びミルの論理學を使用した。尙英文學をも講じ同九年八月迄在職した。

サイル（英人）Dr. Edward Syle

明治七年十一月より同十二年四月迄東京開成校に修身及歷史學教師として傭はれた。然してサンマースが初めて論理學を講ぜし如く、サイル氏は哲學（當時理學とも稱せられた）の名をもつて初めて心理學の講義を試みた。教科書としては

ボプキンスの「人論」及びヘーヴンの心理學を使用した。

ラッド（米人）George Trumbull Ladd

氏は一八四二年オハイオ州ペーンスヴィールに生れ、ウェスターン、レザーブ大學を了へてボードウィン大學哲學教授となり、後エール大學に轉じ一九〇〇年名譽教授となり引退した。米國心理學會の創立者であり又氏の著述は實に大册二十八卷に及んでゐる。始めて我國に來遊せしは明治二十五年にて數月滯在各地にて講演を試み又「日本國民の心理」なる一論文を發表し深く日本に興味を感じ爾來日本の良友をもつて自ら任じた。同三十二年再度來朝滯在數月東西大學その他にて講演し學界に大なる稗益を與へ、位及勳章を賜つた。二十九年には夫妻相携へて來朝し滯在約一年各大學及各地にて講演を試た。陛下に拜謁の榮を賜り勳二等旭日重光章を授けられた。氏は又日米親善にも大いに盡力し實に日本の正當なる理解者であつたが、八十才の高齢をもつてニューヘヴンに永眠された。遺志に依り分骨して生前氏の董陶を受けし浮田博士、松本（亦太郎）博士、中島（力藏）博士、村井貞之助氏等の盡力にて鶴見總持寺内に納め記念碑を設立し氏の功蹟を永久に傳ふることとなつた。

ブッセ（獨逸人）Ludwig Busse

一八六二年ブウンシュヴィクに生れ、ライプチッヒ、インスブルッグ、伯林の諸大學に學びロッツェ、ユリウス・ベルゲマンの感化を受けた。

明治二十年米人ノックス氏に代つて東京帝國大學文科大學哲學教師として來朝した。倫理學、論理學、哲學入門等を講じ我國哲學の進歩に盡す所極めて大で、殊に氏が哲學の歴史的研究を奬勵したのは我哲學研究に一轉機を與へたものであつた。在職五年明治二十五年歸國し、ロストック大學（一八九六年）ケーニヒスベルグ大學（一八九八年）ハルレなるミンスター大學（一九〇四年）に教授となり、明治四十年四十六才をもつて死去した。我が哲學界が獨逸を師宗とするに至つたのは

當時より初まつた。

ホートン（米人）William A. Houghton.

明治十年三月より同十五年七月迄開成校英文學教師として在職、氏の在職は僅か五ヶ年に過ぎざりしかども、學生指導に宜しきを得斯方面の進歩頓に著しく、且參考書購入に意を用ひ研究資料に供する等その功績著しく、今日文科大學文學部の盛況を見るに至つたのは氏の熱心なる努力に依る所極めて大であると言はれる。解任歸國に臨み物品を贈られた。

ディクソン（英人）James Main Dixon

明治十三年より工部大學英語及英文學教師、同十九年より同二十五年まで文科大學英語學及英文學教師として傭用されし人である。同二十一年勳四等に叙せられた。

ハウス（米人）Edward H. House

氏は明治四年東京大學文學部英文學講師として聘せられしが、六年病の爲に辭職した。後十五年再びその職に就きしが亦病の爲め十六年退職の止むなきに至つた。

氏はニューヨルク・ヘラルドの編輯者にして我國に古典樂を紹介せし人として注意すべきである。

ヘック（佛人）Emile Heck

氏は一八六六年佛國ベルフォルに生れ、ベルフォル及ブザンソンに於て古文學を修め後巴里に於て高等教育を受けた。明治二十四年東京帝國大學佛文學及佛法教師として聘せられ、在職三十年實に氏は帝國大學最初の佛文學教師にして同科の今日あるは實に氏多年の盡力の結果なりとも言ひ得る。氏は在職中數年に亙り羅甸語を教授せしこともあつた。氏の忘るべからざる功績は我國の國民性を海外に紹介し、常に日本を正當に理解せしめんとしたことである。明治三十八年勅任待遇となり大正四年勳三等瑞寶章を下賜され、十一年大學名譽教授となつた。氏は現に曉星中學校長として宗教界並に教育

界に活動してゐる。

プレーフェヤー（英人）Playfair

氏はカナダ、クィーンス大學出身にして雜誌記者たりしこともあり明治四十年頃に慶應義塾に招聘せられて來邦し同文學部に英文學及英語を教へ八九年在職し後帝大に轉じ日本にて死去した。氏は强記にして殆んどノートを用ひることがなかつた。

ロイド（英人）Arthur Lloyd

氏はインドに生れケンブリッヂ大學に學び又獨逸に遊學した。傳道のために來邦し、旁ら私塾にて英語を教へしが明治十七八年頃慶應義塾に招かれて文學部の英文學及英語教師となり途中クィース大學ギリシヤ及ラテン語教師となつた。後再來し明治三十六年四月帝國大學文科大學英文學講師となり同四十四年十月二十七日死去した。氏には尾崎紅葉氏の「金色夜叉」德富健次郎氏の「自然と人生」及その他の英譯あり又サンスクリット、佛教に通じ佛教に關する著もある。

ペリー（米人）Perry

氏はハーバード大學出身にして同大學助教授たりしが、同大學エリオット氏の推薦にて明治二十八年頃來邦し慶應義塾文學部教授となり在職三ヶ年にして歸米した。氏は黑船にて有名なるペルリの一族である。

リスカム（米人）Liscomb

明治二十三年慶應義塾に初めて大學部を設け、教師を送ることをハーバート大學前總長エリオット氏に依頼した。同年エ氏の推薦に依つてリスカム、ドロッパース、ウォグモアーの三氏が來邦したのである。リスカム氏はブラウン大學出身後は長年教職にありし人にして、義塾には三ヶ年の契約をもつて文學部に英文學及英語を教へ溫厚の人格をもつてよく學生を指導し滿期後更に一ヶ年繼續せしが偶病のため歸米し後コンコードにて死去した。

フェノロサ（米人）Ernest F. Fenollosa.

マサチューセット州に生れ、明治十一年八月來朝しモールス氏と共に頻に講演しスペンサーの社會學に依つて宗教を論じた。同十三四年頃獨逸哲學が紹介され我哲學界は漸く英を去つて獨に向はんとした。氏はこの過渡期に於て一方ミル、スペンサーを講ずると共に、他方カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを說き英獨哲學を綜合せんとの抱負を懷いた。

明治十一年より十五年迄帝國大學文學部政治學同十五年より十九年に至る迄理財學、論理學及哲學教師として在職した。辭職後は文部省に轉じ遂に美術學校教授となり、歸國後明治四十一年(一九〇八年)死去した。

美術に關しては我國の古代藝術を研究し極めて造詣深く、狩野水悳につき復古說を唱道し「日本は斯くの如く源遠く進歩せる美術を有してゐる。之を捨てて徒らに外國を學ぶは己を危くするものである。一國の文化は過去の歷史を基として建てねばならぬ。」とは氏の主張であつた。此の言は日本美術研究をして系統的たらしめし端緒とも見られる。政府は明治十九年氏及氏の美術上の弟子たる岡倉覺三氏を歐洲美術研究の爲彼地に派遣した。東京美術學校の開設は兩氏の力に依ること少くない。有賀長雄氏は文學上の氏の弟子である。明治二十三年勳三等瑞寶章を授與された。

ラグウザ（伊太利人）Vincenzo Ragusa

明治九年來朝、工部大學美術學校に招聘された。氏はフォンタネエージと共に日本に西歐美術を將來した恩師である。刻彫の旁ら裝飾圖案や用器畫を教へ建築方面にも理解ある人であつた。日本に多くの人碑を殘してゐる。卽ち小倉惣太郎、大能代廣、藤田文藏、菊池壽太郎、佐野昭氏等は何れも彼に師事した人である。

メーソン（米人）Luthur William Mason

ローウエル・メースンの子で一八二九年ボストンに生れ、音樂家にして且作曲家であつた。氏は十七年間ボストンにて音樂教師の職に就けることあり又數年間ニューヨークに音樂教師となつたこともあつた。

一八八九年來朝し、初めて音樂教育を我國に敎へた人である。氏には種々の著書があるが、一九〇一年に氏の門弟であるモーチエル、リフツ、ドレースコツク等は "Memories of a Musical Life" を出版した。

フォンタネエジ（伊太利人）Antonio Fontanesi

レエギイヨ・エミリアの生れで、自然主義・田園主義の戰士としてバルビゾン派と相應じて立つた伊國有數の畫家であり トリノ市のアカデミア・アルベルティナで風景畫を敎授した。歿後氏の作品は系統的に同市の博物館に收められ、伊國近代美術史上の一光彩となつてゐる。ラグウザの無名に反して世界的に知名の人であつた。

明治九年より同十一年迄在邦し、工部大學、美術學校に洋畫を敎へ製作も可成多く又子弟の指導にも熱心であつた。氏の門下には小山正太郎、淺井忠、松岡壽、山本芳翠、中丸精十郎、五姓田義松、高橋源吉、守住勇漁の諸氏等明治畫壇の有力なる人人が輩出した。在職僅か二年に過ぎなかつたが我が美術界に與へた感化は實に甚大なるものであつた。

リース（獨逸人）Dr. Ludwig Riess

一八六一年西部普魯西ドヰッチ・クローン市に生れた。伯林大學に學び史學及地理學を修め一八八四年哲學博士の學位を得た。氏は嘗て獨逸史一般に關する材料蒐集のため英國に渡り一年半研究に從ひ歸伯した。其翌年卽ち明治二十年二月東京帝國大學に招聘され文科大學史學教師となつた。在職十五年大學に史學創設以來之が敎授の任に當り、拮据勉勵學生を指導し斯學の發達に盡す所極めて大であつた。明治二十六年一時歸國に際し歐洲各地を經て本邦史料の調査蒐集に努め、得難き幾多の古文書類を齎し歸つて史學研鑽上一大稗益を與へた。實に氏は我が史學界に於ける特筆すべき人であつた。

三十五年七月歸國。三十二年勳四等旭日章を賜り三十五年八月終身年金五百圓を支給された。

ハーン（小泉八雲）（英人）Lafcadio Hearn

英國アイオニア群島のうちにあるルーカヂヤに生れた人である。初め米國に於て新聞記者となつたが、一八九一年卽明

治二十四年日本に渡來した。氏は當時の普通學務局長服部一三氏の斡旋によつて松江の中學に英語敎師の地位を得、一八九一年熊本第五高校英語敎師となり、同年又神戸クロニクル記者となる。一八九五年小泉節子と結婚し小泉家に入籍、一八九六年東京大學英文學敎師となり七年間在職、明治三十七年四月より東京專門學校に聘せらる。同年九月心臟を病んで西大久保の邸に逝く。享年五十五歳。葬儀は佛式を以て瘤寺に營まれ、正覺院淨華八雲居士といふ戒名がおくられた。氏の著書はその多くが日本に關するものであるが、それをあげておけば左の如くである。

Stray Leaves from strange Literature, 1184; Glimpses of unfamiliar Japan, 1894; Out of the East, 1895; Kokoro, 1896 Gleanings in Buddha fields, 1897; Exotics and retrospections, 1898; Ghostly Japan, 1899; Shadowings, 1900; A Japanese Miscellany, 1901; Kotto, or Japanese Curios, 1902; Japan attempt at Interpretation, 1904.

フローレンツ（獨逸人）Dr. K.A. Florenz

一八六五年エルフアルトに生れライプチッヒ及伯林の兩大學に學び後ライプチッヒ大學敎授として印度に於けるサンスクリット擔任に推選されしが辭して東洋の研究を續けた。

明治二十二年東京帝國大學に招聘され文科大學敎師となり同二十六年始めて正式に獨逸語學、獨逸文學、博言學の正敎師となり爾來二十七年營々として職に努め旁ら自家專攻の文學考古學博言學歷史に關する論文を發表し又日本文學を獨逸に紹介し、三十年六月に神代紀註釋に關る論文を提出し文學博士の學位を授與された。氏の東洋に關する論文を擧ぐれば支那に就て、日本古代開化の狀態、日本歌の假名遣、現今の日本文學、頓智の心理學的研究等がある。三十三年勳四等旭日章を賜り、三十八年敕任待遇となり、大正三年年金千五百圓下賜され、十一年大學名譽敎師となつた。

メートル（米人）Maitre (?)

明治十七八年ハノイにゐたる公使にして日本を研究し日本書記の飜譯がある。日本の紹介者として記憶さるべき人であ

る。

ワアグマン（英人）C. Wirgman

氏の來朝は明らかでないが維新後間もなくであつたらしい。日本へはロンドン・ニュース特派員として來たので退職陸軍大尉であつた。常に國中を旅行して居たので英探ではないかとの疑もかけられてゐた。明治二十四年五十七才で横濱に客死した。氏は初めて邦人に洋畫を教へ、五姓田芳柳、川上冬崖、高橋由一、小林清親氏等はその門下である。

ウェルテムバー（米人）Louis Wertheimber

海外に日本刀を紹介せし人である。

ブリンクリー（英人）Captain Brinkley

氏は明治初年に來邦し日本に厚意を有しジャパンメールの主筆であつた。我國美術及歴史に通じ日本語をも話した。氏には菊地大麓氏との共著日本歴史あり又明治六年に出でし語學獨案内は當時大いに學生勉學のためになりしものである。約十年前に死去した。

メーソン（英人）W.B. Mason

氏は第一高等中學校に英語を教へ又神戸クロニクル及ジャパンメールの編輯を助け明治文化に對して功績あり、チャンバレン氏との共著英文日本旅行案内記はこの種のもの、完全なるものであつた。氏は不幸にして昨年の大震災のために横濱に死て去された。

ブラック（英人）Black

明治四年頃に來邦し東京銀座に住み日新眞誌なる邦文新聞を發行した。東京に於ける最初の邦文新聞である。

理　科

ダイバース（英人）Edward Divers

一八三七年英國に生る。初め化學を學び一八五四年クエーンス・カレッジ化學助教授となり傍ら醫學を修め、六〇年クエーンス大學より醫學博士の稱號を得た。後ロンドン市ミッドルセックス病院附屬醫學校に法醫學を講じ七三年同市化學會委員となつた。

氏は明治六年工部大學の招聘によつて來朝化學を擔當し後同校教頭となり、旁ら造幣司東京出張所分析技師を兼ね又内務省石油取調委員囑託となつた。十九年帝國大學の設置を見るや入つて理科大學化學教師となり、二十六年間理學の爲の理學研究を說き、實に本邦無機化學研究の礎を造りたる恩人である。氏は熱心なる學者で帝國大學紀要其他外國雜誌掲載の研究のみでも五十餘に達してゐる。歸國に先ち拜謁を賜り勳二等瑞寶章を授與され尙養老の資として修身年金千八百圓を支給され三二年には名譽教師の稱を得た。四五年四月病を得ロンドンに逝く。享年七十五。

アトキンソン（英人）R.W. Atkinson

明治七年より同十四年に至る間東京開成校に在職し大いに化學研究を奬勵し其の發達を促した。一つの專門學科として化學科を設け泰西化學を組織的に研究するに至りしは全く氏の力に依るものである。氏の擔當課目は分析化學、有機化學理論化學、工藝化學及冶金術であつた。尙氏は日本酒醸篇を著し我學界に稗益した。明治十四年滿期歸國に際し在職中の功により金員を贈られ、特に謁見の榮を賜ひ、勳四等旭日章を贈與された。

グリフィス（米人）William Elliot Griffis

氏は一八四三年九月フィラデルフィヤに生れた米國教育家であり宣教師であつた。一八七〇年に日本に來り翌年聘せられて越前の教育監督となりしが明治五年大學南校教師となり在職二年半其間力を東京開成校化學科の設置に盡し且教授として功績甚大であつた。尙實に氏は我學界に化學を專門學として初めて教へたる人にして五十年間廣く我國發達に貢獻したる功沒すべからざるものがある。

メンデンホール（米人）Thomas Corwin Mendenhall

一八四一年オハヨー州ハノバルトンに生れ、一八七三年オハヨー大學の物理學及重學の教授となつた。氏は哲學博士、科學博士及法學博士の學位を有つてゐる。

明治十一年十月東京大學に招聘されて來朝し理學部物理學教師となつた。在職僅かに二年九ヶ月なりしもよく學生を教導し旁らその研究に意を注ぎ東京及び富士山頂の重力實測に從ひ、地球密度の測定をなし或は大學氣象臺を監督し又は光線研究をなす等氏の功績は頗る大なるものがあつた。明治十四年七月歸國後はローズ諸藝大學、ウオスター諸藝大學の總長に歷任し次いで米國學術界の最高位たる海岸及陸地測量東部總裁に擧げられた。氏は一面常に日本に厚意を示し日本に初めて電話を紹介したのも氏である。植物學者佐藤博士、山口鋭之進氏はその人碑である。四十四年本邦廻航に際し在任中の功により勳二等瑞寶章を追賞された。

ノット（英人）Cargill G. Knott

氏は一八五六年エヂンボルグ府に生れ、エヂンボルグ大學を卒業後同校教授となりて物理學の講義をなし又同府ローヤル・ソサイティの會員に推薦された人である。

氏は明治十六年より二十四年まで東京大學理學部物理學教師として高等電氣學、音響學、磁氣學、力學等を講義し、ユーイング、メンデンホールの二教授と等しく熱心に理學研究を奬勵し、我國物理學の發達に多大の貢獻をなした。

後年物理學中殊に磁氣學研究の旺盛になつたに就いては磁氣專攻のノ氏の感化を決して見逃すことは出來ない。尙明治二十三年氏が本邦全土の磁氣測量に從事したことも學界に對する大なる貢獻であつた。明治二十四年六月特に拜謁を賜り、勳四等旭日章を贈與された。

ペリー（英人）Perry

知名の物理學者であつて舊工部大學が專ら工學專門家の養成を目的となしたのを氏及びエヤトン、グレー三教授の力に依つて物理學者の養成にも意を用ひることゝなつた。我國物理學發達史上氏の貢獻は著しいものがあつた。

エヤトン（英人）W.E. Ayrton

氏は工部大學に於けるペリー、グレー氏と共に有數の學者であつた。工部大學は元來物理學を專門とせず專ら工學專門家の養成を目的としたが、氏はこの弊を見て物理學の忽諸に附すべからざるを說き斯學の爲に盡くした。以來我物理學は急速の進步を見たのである。志田林三郎氏は氏の門下である。亦氏が我國に初めて電燈を點ぜし功も忘るべからざるものである。卽ち明治十一年三月二十五日木挽町に新設せる中央電信局の開業式祝宴を工部大學に開くに當り、同夜晩餐會場の燈火用として同氏指導の下に工部大學生藤岡市助及び中野初子兩氏がグローブ電池を使用して孤光燈を點火した。

ディブスキー（佛人）Dybouski

氏は明治十年十一月東京大學理學部物理學及び重學教師として招傭され同十三年二月期滿ちて歸國した。解傭に際し在職中の功勞を賞して金品を贈與され、明治二十一年五月には勳四等に叙せられた。

チャツプリン（米人）Winfield S. Chaplin

氏は我國に於ける微積分の紹介者であつた。明治十年二月より十三年二月迄開成校土木工學教師として奉職し、十八年二月勳四等に叙せられ旭日章を賜つた。

グレーフエン（獨逸人）Greeren

氏は明治五年九月より同六年三月迄六ケ月の期限をもつて第一大學區第一番數學教師として聘せられたが、六年一月博覽會事務局へ轉じた。其後七年三月より開成校數學教師となり、八年十月には内務省勸業寮へ轉傭され轉傭に臨んで在職中の功勞をもつて物品を贈貽された。

ベルソン（佛人）Berson

明治九年六月より十三年七月迄東京大學理學部物理學、數學及び重學教師として學生を指導し、同年五月特に謁見を賜はり、十八年二月在任中の勳功に依つて四等に叙せられ旭日章を拜授した。

パーソン（米人）W.E. Parson

明治七年九月より十一年七月まで東京開成校數學及び理學教師として在職した。その功によつて明治十八年二月勳五等に叙せられた。

ウヰルソン（米人）Horace Wilson

初め大學南校英語及び普通學教師として明治四年八月に招聘され四ケ年間その職に居り、八年九月より一ケ年間數學教師となつた。十年七月解任歸國に際し、二百圓及び卓氈一枚を贈與され尚二十一年五月には勳五等に叙せられた。

シエンデル（獨逸人）Dr. Schendel

東京醫學校豫科教場算術教授として八年一月に招聘され九年十二月舊約を改め數學及物理學教師として十四年十二月まで教職にあつた。十四年十一月特に謁見の榮を賜り、十八年四月には在任中の功をもつて勳五等を下賜された。

ブラキストン（甲比丹）（英人）Capt. Blackiston

ライミントンに生れた。少壯にして砲兵士官となりロッキー山を横斷すること二回、英領北亞米利加の鳥類に就いて一論

文を發表しカナダ鳥類學の基礎をなし、次いで楊子江の上流を測量し傍ら苗族の研究をなし、英國地學協會より皇立賞牌を受けた。文久元年函館に來り爾來二十三年北海道の鳥類を研究し、津輕海峽が北亞細亞（西比利亞系）と中部亞細亞との動物分界線たることを發表す。世界の學界もこれを認めブラキストン・ラインと命名した。

氏が實に鳥類の研究に熱心であつたのは千三百三十八羽の鳥類を取扱つたのでも分る。氏は亞細亞と濠太利との動物分界線ウオレス・ラインの發見者たるウオレスと竝稱せられ得べき人で二十三年間在留せるは日本の誇りである。更に本邦最初の測候所を設置したのは（明治二十年）全く氏の力に負ふたものである。氏は亦慶應年間製氷事業、明治初年には製材業を企劃した。この方面でも我國に盡す所少くない。明治二十四年サンチゴーで肺炎に罹つて死去した。

ジョルダン（米人）David Staw Jordan

一八五一年一月ニューヨルクに生れ、教育者にして著述家であり且博物學者である。現に七十三歳の高齢をもつて米國スタンフォード大學教授として令名を馳せてゐる。既に數回來朝し我國の魚類に關して研究を重ね、大部の論文等を發表した。これによつて見るも氏が巧に大體を捉へて鋭い觀察力を有する人であることが窺ひ得る。氏の日本魚類研究は我が水産學の發達史上啓蒙的功績を有するものである。又平和運動に就いて氏は盡くすところ尠くなく、在來の米國に於ける排日運動の如きに對しては大いに反對を稱へたる非常な親日家として忘るべからざる人である。

デューデルライン（獨逸人）Dr. Döederlein

東京大學醫學部植物學及び動物學教師（明治一二——一四）であつて、初めて日本の魚類を研究しヒルゲンドルフ氏と共に忘るべからざる人である。元來氏は著名なる醫學者であつて純粹の生物學者ではなかつた。歸國後はストラスブルグ博物館の生物學部長として名望極めて高かつた。我が前水産講習所長松原新之助氏は氏の通譯をなしつゝ水産學を學んだ人である。

ヒルゲンドルフ（獨逸人）Dr. Hilgendorff

氏は明治六年より九年まで東京醫學校豫科教師の職にあり顯微鏡用法、植物學の科目をも擔當してゐた。元來氏は醫學者であつて純粹の生物學者ではなかつたが、鋭意我國に於ける魚類研究に力を盡し、間接ながら日本の水産學の開發者としての功績少なからざるものがあつた。明治九年七月職を辭し歸國後は伯林の博物館長の要職に就いた。デューデルライン氏と同時に研究をなした人で前水産講習所長松原新之助氏は兩氏の通釋をなしつゝ水産學を講習した人である。

ブラノアー

横濱に在住し日本の鳥類に關する研究をなし、ブラキストンと共に日本産鳥類目錄を作つた。又氏は蝶類をも深く研究した。

コフォイド（瑞典人）

日本の浮游生物を研究した人で後米國に歸化した。

マッカーテー（米人）D.B. Macartee(?)

初め明治五年九月より七年三月迄第一番大學區第一番中學に英語學教師として招聘されたが、同七年三月より一ヶ年は開成校に醫術及び博物學教師となり、同八年五月より二ヶ年間は博物學及羅甸語科の教師となつた。十年四月願に依り解約し五月歸國した。功に依つて物品を送られ尙十八年二月勳五等に叙せられた。

ホイットマン（米人）Charles O. Whitman

氏は明治十二年八月より同十四年八月迄の期限をもつて東京大學理學部に動物學及び生理學教師として在任、氏は實にモールス教授歸國後その後繼者として紹介された人であつた。シカゴ大學教授たる經歷を有し、獨逸に學んだこともあり極めて綿密なる研究を得意とする學者であつた。モールスを我國に於ける近世生物學に關する一般的知識の基礎を與へた

人とすれば、ホ氏は部分的の新研究法を傳へた人と言ふべきである。我國の眞の生物學研究は氏の力に依つて築かれたと云つても不可ない。歸國に際し拜謁を賜つた。

モールス（米人）Edward Sylnester Morse

氏は一八三八年ボートランドに生れた知名の動物學者にして、初めハーヴァードのローレンス・サィアンテフィック・スクールに學び、一八六六頃にはアメリカ博物學會を創設し、後ボードウィン大學に於て比較解剖學及動物學教授となつた。明治十年東京大學理學部動物學・生理學教師となり在職僅か二年であつたが、熱心に近世派の動物學を唱道し殊にダーヴィンの進化論を初めて我が學界に紹介した。我が故松浦佐代彦氏及現理學博士佐々木忠次郎氏は當時氏の指導の下に研究し、氏は學生と共に東大博物標本室の基礎を造つた。氏は又大森、北海道等に太古人種の遺物を發掘し人類學の端を開き、次いで理科大學人類學科を創始した。一度歸國せしが再度來邦し我國の治制、家庭的風習、陶磁器等を研究しこれを書になし（例へば Jajanese Homes の如き）母國に紹介し以つて日米親善を計つた。現存の人にして謠に熱中してゐるとのことである。在任中勳三等旭日中綬章大正十一年勳二等瑞寶章を賜つた。

ライマン（米人）Benjamin S. Lyman

北米マサチユーセッツ州ノーサンブトン市に生れ同州大學卒業後諸鑛山の統計作製に關係し南部諸州の鑛山を巡回した。後獨逸某鑛山學校を了へ歸國フキラデルフキアに止り同地地質調査長レスリ博士につき研究を進め、地質圖中にコントルラインを描き俄に學界に重きを爲すに至つた。

明治五年政府は新に開拓使を設け北海道の拓殖に着手し、米非役陸軍少將コーレス・ケブロンを顧問とし各國より知名の地質學者、化學者（醫師）土木技師、牧畜教師、園藝家、鑛物學者を招聘した。氏はその一人で北海道地質調査主任として聘せられた。氏が地質調査に着手したのは同六年四月で二年餘りで一應の調査を完了した。主として炭鑛に關する事項

で石油、硫黄其他の鑛物の所在をもこの時に調査した。同九年二月政府の命により本邦石油調査に着手し數年でこれを了へ歸國し、フキラデルフキヤに居をトし諸學會の會員として東洋文明の紹介に努めた。氏は生涯獨身で終つた。

ゴッチエ（獨逸人）Dr. Carl Gottsche

一八五五年三月シレスウヰグ、ホレスタインに生れた。キール大學地質學、古生物學講師であつてドクトク・オブ・フィロソフィーの學位を有してゐた。

明治十五年一月より十七年まで東京大學理學部地質學、金石學、古生物學の教師であつた。また氏は初めて朝鮮の地質調査をなした人として著名である。氏は解傭に際し在任中の功を謝する爲め物品を贈られた。

マンロー（米人）Henry S. Munroe

氏は初め開拓使の傭であつたのが同使滿期解傭後、明治八年二月開成校地質學、金石學教師として傭はれ、同九年二月滿期解傭歸國した。

ブラウンス（獨逸人）Dr. D. Brouns

ナウマン氏の歸國後氏の從意に依つて來邦し、ナウマン氏が組織的地質學を講ぜるに對して氏は應用地質學を大學に講じた。學識極めて深くナウマン氏と共に我國斯學に對せる功績は特筆すべきものである。氏は嘗てクリミヤ戰爭に參加せる人にして我國に來りし時は既に頒白の老人であつた。Technische Geologie（一八七八年）の著がある。明治十年頃に歸國した。

ナウマン（獨逸人）Dr. Edmund Naumann

氏は我獨國駐在全權公使青木周藏氏に囑し結約招聘し同年八月來朝せしも、恰も諸藝學及鑛山學の廢止に會し當時教授の空位なきをもつて一時文部省に傭はれ專ら內國金石の調査に從事した。然るに同九年金石及地質學教師マンロー滿期解

職せるをもつて該科を擔當し英語を用ひて教へた。以來專心教職に從事し同十二年歸國した。在職中の功によつて明治十九年勳四等に叙せられた。尙氏は在職中組織的に我國全土の地質調査を行はんが爲に調査部設置を內務卿に建議しその設計を提出し翌年それが實現され氏はその管理の任に當つた。これ今日の帝國地質調査所であつて、本邦地質調査の基が茲に開かれたのであつた。

ペンベリー（米人）Raphael Fu npelly

氏はニューヨルクに生れ、地質學の泰斗にして又著名なる著述家であつた。一八六一年（文久元年）來邦一八六三年迄幕府に仕へ、蝦夷北海道鑛山踏査に從事すること三年、鑛山掘開法及爆破法を教へ、同時に熔鑛爐を我國に紹介した。氏は從來世界に聞知されざる地方の探檢旅行を試へては地質學的研究資料を供したが、一九〇三年一ヶ年の中央亞細亞の旅行は氏の最後の探檢であつた。尙氏は支那、蒙古、日本に於ける地質學上の研究論文を發表せる外地質學及其他の科學上の諸問題に關し多數の著書を出してゐる。十二年八十六歳の高齡をもつて死去した。

シエンク（獨逸人）Carl Schenk

學識深き學者にして明治四年大學南校に獨逸語及び普通學教師として傭聘され、後專門學科の設けられるやその教師に擢用せられ鑛山學の一科を擔當した。在職三年ではあつたが我國學生に對し初めて專門學科として鑛山學の大意を授けし功は觀過することは出來ない。八年七月解職に際し功を賞し物品を贈與された。

ベールゼン（獨逸人）Emile Bahlsen

氏は一八六二年智利國コピアポに生れ長じてフライベルグ鑛山學校に入り採鑛學を修め後南米に渡つて鑛山業に關係した。歸國後再び同鑛山學校に學び了へて各所に傭はれしが明治三十年帝國大學の招聘に應じて來朝し工科大學に採鑛學冶金學教師の職を奉じた。爾來二年有餘偶々母病氣の故をもつて滿期前明治三十三年に歸國したが之に先ち拜謁の榮を賜つ

た。

リッテル（獨逸人）Helman Ritter

一八二八年ハノーブルに生れ長じて哲學博士の學位を得た明治三年より五年迄大阪理學所の傭として理化學を擔當し、同六年三月より第四大學區第一番中學に轉傭され次いで東京開成校に鑛山學教師として轉任した。偶々病を得明治七年十二月四十七歳をもつて死去した。

ホランド Holland（？）

氏は知名なる地質學者にしてニュートン氏と共に臺灣及琉球の化石に關する造詣極めて深く、理科大學記要中にあるその論文は注意すべきものがある。

ニュウトン Newton（？）

氏は臺灣及び琉球の化石に對する造詣極めて深くこれに關して重要なる論文を書いた。

ユーイング（英人）James Alfred Ewing

氏はスコットランドに生れ明治十一年九月東京大學の招聘に依つて來朝、理學部機械學教師として在職五年學生指導の旁ら學術研究に意を用ひ、地震計を創製して從來その方面の不備なるを補ひ且つ地震計論を著した。更に理科學部構内に觀測所を設けて實測地震學の基礎を開いた人である。氏は亦理學的研究の發達幼稚なる時代に磁氣に關する實驗的研究をなし大いに理學的精神培養に努めた。後年磁氣研究の大いに發達したのは彼の效績であると見なくてはならぬ。氏は英國有數の學者であつて現にケンブリッヂ大學教授の要職にある。實に氏が日本の學術界及高等教育界に對する貢獻は忘るべからざるものである。明治十六年六月氏は特に拜謁を賜り十四年四月には勳三等瑞寶章を贈與された。

ミルン（英人）John Milne

氏は一八四九年リバプールに生れ倫敦キングス・カレッヂ及同王立鑛山學校を卒業後實地鑛業に從つた。又獨逸フライベルグ鑛山學校に學びサクソニー、ボヘミヤ等の鑛山を視察したこともある。氏が各國鑛山を巡遊し其報告をなしたことは極めて有意義なことであつた。

明治九年三月舊工部省工學寮の招聘に依り來朝元工部大學を經工科大學鑛山學、地質學採鑛冶金及地震學教師となつた。在任十九年餘數多の學生指導の旁、我國の地震を研究し線路及汽關車の改造、耐震建築研究其他約四十餘の書册の私費出版等其功數ふべからざるものがある。同十三年地震學會を創設し組織的研究をなしたのは氏の力である。歸國に先ち拜謁を賜り同二十八年勳三等に叙せられ旭日章を贈られた。同年終身年金千圓を給與され、三十五年東京帝國大學名譽教師となり、一九一三年六十四歳で故國に逝去した。

グレー（英人）Gray（？）

氏はエヤトン、及びペリー氏と共に我國物理學の發達に非常なる功ありしのみならず、我國地震學の發達に大いに盡した。即ち明治二十三年ミルン教授の日本地震學會の創立と共に、グレー氏はユーイング氏と地震の强弱を記錄し且測定方法を改良して理學的研究を容易ならしめたがこれは我國に於ける地震學を組織的に研究せる初である。

ポール（米人）H.M. Paul

公算法及 Theory of Possibility 及 Theory of Least Squares の學說を我國に紹介すると共に米國流の天文觀測法をも紹介した人である。

レピシエ（佛人）Lepissier

明治五年二月に南校數學教師として就任し、六年十二月迄繼續した。同七年一月より一ケ年間は開成校に於て天文學を講じ、同七年六月病氣の爲に辭職し、在職中の功によつて縮緬一匹を贈られた。

クニッピング（獨逸人）Knipping

從來日本の氣象學は極めて幼稚であつたが、明治四五年の頃氏の來朝に依り我國に氣象觀測法を初めて敎へ傳はり、頓に斯學の發展を見た。

ストーン（茂人）William Henry Stone

明治初年我國初めて電信事業を創設するや、氏は遞信省の前身たる工部省電信局（明治五年）に招聘せられ、其指導顧問の任に當り後遞信省に轉じ、四十餘年の久しき一日の如く恪勤精勵常に中央の樞軸に膺り、內國法規の制定、國際規約の協定等より之が技術に至る迄周匝剴切克く斯業の發達を計り其の信用を中外に顯揚せしむるに至つた。尙明治二十七八年及同三十七八年我邦事あるに當りては深く軍國の樞機に參し本邦の爲め貢獻せられたるは氏の隱れたる功績たるを忘れてはならぬ。

氏は天保八年愛蘭の「スライゴー」に生れ、重厚の風格を備へ恬澹にして勢利の念極めて薄く、氏を知る人にして隆德を稱せざるものはなかつた。大正六年春偶〻病を得遂に六月三日芝田町の自邸に八十一歲をもつて溘逝された。氏の病革るや特に勳一等に敍し旭日大綬章を贈與せられる外異數の優典を以つて葬儀を執行せられた。

醫　科

ポンペ（和蘭人）Pompe van Meerervolt

氏は和蘭の貴族にして醫術に長じ陸軍軍醫に任ぜられた。安政三年八月來朝し幕府に聘せられ松本良順は幕府の命に依つて氏より醫術を學んだ。後長崎に病院の設立を見るや氏はその敎師となり學科課程を定めた。これ外國敎師を置き醫學學則を定めし初である。是より先安政五年長崎にコレラ流行し幕府は氏に命じて治療に當らしめた。氏は端嚴にして一言も苟も發せざりしが後進を啓誘するに頗る懇切周到であつた。伊東方成、佐藤尙中、司馬凌海、佐々木東洋等は皆氏の薰陶を受けし人である。氏は又政學に留意し頗る外國事情に達し、我駐劄魯國全權公使榎本武揚に聘せられ大いに贊補する所あつた。功に依つて勳四等に敍せられ旭日小綬章を賜つた。

ホフマン（獨逸人）Hoffmann（?）

明治四年大學東校を改めて單に東校と稱せしが、時に獨逸よりホフマン氏をミュルレル氏と共に招聘した。氏は東校の敎頭となり石黑忠惠、長谷川泰の兩氏を舍長として學生を監督せしめ、相良、岩佐の二氏を輔佐して學則を改正せしめた。これによつて我國の醫學校敎育は初めて其緖に就いたのである。

ハラタマ（和蘭人）Grutama

氏は我國に於ける西洋化學の基礎を造りし人にして、慶應元年開成所に招聘せられ化學敎師となり實驗的に化學を敎授せる最初の外人であつた。而し乍ら未だその效果の擧らざるに明治維新となり同實驗所は廢止の形となつた。後に明治元年十月大阪病院（我國の第二番の病院）の創設に際しボードウイン博士と共に聘せられ當時の我醫學界に大いに盡す所あつ

た。尙同二年大阪舍密局の開かるるや入つてその教師となり數十名の子弟を教育した。こは現在の第三高等學校及び東京帝國大學理學部の基礎である。前者大阪病院は官立醫學校となり一部は現在の府立大阪醫科大學となり、一部は東京帝國大學醫學部となつた。

マンスフェールト（和蘭人）

氏は和蘭安特坦府の人にして海軍二等軍醫なりしが慶應元年幕府に招聘されて來邦しボードウィンの後を繼いで長崎精得館の教師となつた。氏は教則を革めて醫學本科課目を立て又上言して醫學豫科を設け更に蘭人ハラタマを聘して之に任じた。在任六年にしてマ氏はこれを辭し熊本藩に聘せられ肥後に病院及醫學校を創立し、後京都及大阪病院教師に轉じた。氏は性質剛毅方正にして勤勉その日課を懈ることなく而して解剖、組織及眼科に長じた。明治九年先帝陛下九州を巡幸の折熊本醫學校に臨幸ありしが氏は拜謁を許され勅語及慰勞金を賜つた。風雅を愛し、我國の文物を喜び、歸國後は我和蘭公使館に聘せられた。

チーゲル（獨逸人） Dr. Tieger

氏は明治十年より同十六年に至る迄東京醫學校生理學教師として招聘された。明治初年當時生理學教師としてはボードウィン、ミュルレル、ベルツの諸氏ありしが、斯學專門の學者たりし人はチーゲル氏であつた。氏は衛生學をも教授し其講べ『衛生汎論』は大井玄洞氏の譯に依り明治十三年に出版され當時大いに世に行はれた。在職僅か六年なりしが、我醫學教育上初めて生理專門の學科を開講せる功績は沒すべからざるものである。尙『國政醫論』も氏の手に成れるものにして三潴、谷口兩氏の譯がある。明治十五年特に謁見を賜り同十八年勳四等に叙せられた。

デーニッツ（獨逸人） Dr. Wilhelm Doenitz

氏は一八三九年に生る。明治六年より同九年迄の期限をもつて東京醫學校解剖學及組織學教師の職に就いた人である。

斯學專門の同氏の來朝により從來極めて幼稚なりし我國に於ける解剖學は稍形を整へるに至つた。又組織學及び胎生學を我國に初めて紹介せしは氏であると云つても不可ない。尙ほ氏は明治八年警視廳醫學校に兼傭せられて『斷訟醫學』を講じ其講本斷訟醫學の翻譯が明治十五年出版せられた。

チッセ（獨逸人） Dr. Joseph Disse

氏は明治十三年より同二十年迄の期限にて東京大學醫學部解剖學教師に聘用され、同二十年四月勳四等に叙せられ特に拜謁を賜つた。

ギールケ（獨逸人） Dr. Hans Giercke

明治十四年より同十三年まで解剖學專門のデーニッツに代つて東京醫學校に於ける解剖學及組織學教師として聘せられ、初めて我國に比較解剖學を傳へた人である。氏は解任に際し所藏する所の書籍數種を後進研究の資に寄附した。

マッセ（佛人） Massé (?)

明治三年大學東校に教師として招聘されし人である。ボードウィン氏と共に當時の我醫學界に貢獻する所頗る大であつた。

ミュルレル（獨逸人） Müller (?)

大學東校を改めて單に東校と稱せしは明治四年八月のことであつたが、同年氏はホッフマン氏と共に聘せられ同校の教頭となりその學科課程の制定に盡す所あつた。氏は又病院にあつては外科病者の診察に從事し、初めてエスマルヒ驅血法氣管切開術、義布斯繃帶を使用せる等我醫學界に一革命を起した。氏は元獨逸陸軍一等軍醫正なりしが、來朝後は解剖生理學の外に外科を講述した。後侍醫局に兼勤し大いに宮中の醫務に盡す所あつた。滿期歸國後は伯林廢兵病院長となり明治二十六年病沒した。

シュルツエ（獨逸人）Dr. Schultze

氏は一八四四年三月伯林に生れた。伯林大學に醫學を專修し一八六三年ドクトルの稱號を得王立病院の醫院介補となり、後ウォルヘルム醫學校に醫師正を勤め一八七四年陸軍軍醫生となつた。同年卽ち明治七年ミュルレルの後を承けて東京醫學校に聘せられ外科學諸科、外科臨床講義、等を擔當した。同十一年一度歸國せしが翌年再度來朝前職を襲ぎ同十四年四月に至る迄その職を勤めた。氏は敎職にあること約六年我國一般醫學の進步に資する功極めて大であつた。我國に於て明治八年始めてリステルの防腐療法を試みたのは氏であつた。宇野朗氏は氏に親しく敎を受けた人である。初任解職の際陛下の謁見を賜はり勳四等に敍せられ嘉尙の勅語までも賜つた。

ウィリス（英人）W. Willis

氏は文久元年英國公使館の醫員として來朝した。慶應四年伏見鳥羽の戰爭起り創傷者多かりし故、當時日本醫家の外科に不熟なるを知つた英國公使パークスはウィリス氏を推薦して薩藩の傷兵を治療させた。次いで奧羽戰爭起り氏は自ら請願して官軍に從ひ治療に從事した。戰爭平定後氏は東京大學病院長に擧げられ戰後の兵士及一般病者の治療に從ふと共に講筵を開いて生徒を敎育し喊囉仿謨麻醉法、支肢切斷術等を初めて施した。石黑忠悳、池田謙齋、佐々木東洋の諸氏は其門より出た。明治三年大學病院を大學に屬せしめ廟議一變して醫學敎師を獨逸より聘せんとせしに當り、氏は病院を去り鹿兒島藩大參事西鄕隆盛の推薦により鹿兒島に聘され醫學校兼病院を起し醫生の敎育に盡力した。高木兼寬、河村豐洲、三田村肇、加賀美光賢の諸名家は其門下である。氏は鹿兒島に居ること十餘年明治十四年英國に歸り同二十七年病沒した。

スクリバ（獨逸人）Dr. J. Scriba

氏は一八四八年ラインハイムに生れ、長じてハイデルベルヒ大學に醫學を學び、後伯林に轉じ外科學を研究し一八七四年フライベルク外科部の助手となり一八七八年に敎員試驗に合格してその講師となつた。

明治十四年東京大學醫學部に招聘せられ、次いで帝國大學の置かるゝや醫科大學に入り主として外科學及び皮膚病黴毒學の講座を擔任した。爾來二十餘年精勤しベルツ博士の內科に於けると等しく我近世醫學界の大功勞者である。同三十四年大學名譽敎師の稱を受け同三十五年恩給を支給され尙同三十八年には勳一等に叙せられた。

ボードウィン（和蘭人）Bodtuin

醫學博士ボードウィン氏は幕末に長崎に來り同地に敎授たりしが、明治元年大阪病院開設に際しハラタマ氏と共に聘せられ功績著しきものがあつた　博士は卓越せる學者にして五十年前既に日本人に黴毒に基因する花柳病者の甚だ多きことを看取した。尙明治十一年頃癩病患者に水銀局部手術を施せるは全く博士等の說に俟つところ多く實に我國醫界の恩人であつた。

ショイベ（獨逸人）Scheube

氏はライプチッヒ大學內科助手なりしが、明治十二年京都療病院に招聘された。我國特有の疾病にしてショイベ、ベルツ二氏に依り初めて研究されしものは少くない。明治十六年に歸國された。

ベルツ（獨逸人）Dr. Erwin Baelz

一八四九年ウルテンブルヒに生れ、長じてライプチッヒ大學に學び後ウィンナに遊學し一八七二年ライプチッヒ大學に招せられた。

明治九年東京醫學校に招聘され十七年一度歸國せしが十八年再度來朝十九年帝國大學設置と共に入つて醫科大學內科學敎師となつた。

氏は內科學の外に生理學、產婦人科、精神病學をも擔當し、明治十年に人血絲狀蟲を、十一年肺ヂストマに依り起る寄蟲喀血を十四年慈蟲病を調査し洪水病となし又十八年孤憑病を公にせる等我醫學界に大なる光明を與へた。氏は在職二十

有四年明治三十五年歸國し大正二年病を得て六十四才にして永眠した。二十五年名譽教授となり三十三年勳一等瑞寶章を贈られた。

尙氏には日本に關せる著述が甚だ多い。

ウェルニヒ（獨逸人）Dr. Wernich

氏はホフマン氏ベルツ博士に代つて明治七年來邦し同九年に至る迄東京醫學校に在職、內科諸科並に內科及外來內科臨床講義を擔當した。氏は初めての婦人科專門醫として我國に來朝せる人にして在職中『脚氣說』を著した。明治十年歸國し伯林大學婦人科產科講師となつた。

ローレツ（獨逸人）Albert von Roretz

氏はエストライセに生れた人である。明治七八年に來朝し名古屋病院に雇はれた。知名なる精神病醫で十三年四月精神病院創設に際し英獨佛各國の建築法を參酌し日本に適する如き設計を以てした。日本に於ける精神病者隔離室の設立は之を嚆矢とする。子爵後藤新平氏の師である。

エリオット（米人）Elliott (?)

氏は明治初年橫濱に在留せる齒科醫であつて我國に西洋齒科の輸入されしは氏の力によるものと云ふことが出來る。其頃小幡英之助氏は氏に就きて學び齒科專門をもつて東京に開業した人である。

ヤンソン（獨逸人）J. L. Janson

氏は一八四九年伯林市に生れ、初め伯林獸醫學校に學び陸軍獸醫適任證を得一八六九年には牛疫防遏の爲め露國國境に出張を命ぜられた。後伯林醫科大學に入つて專ら病理解剖學を研究し、一八七六年には伯林醫學校助教授となつた。明治十三年元駒場農學校の招聘によつて來朝し、後轉じて農科大學獸醫學教師となり同三十五年迄學生の教導に努め、

その間に獸疫撲滅法の必要を唱道し、獸醫畜產に關する著述をなし、又乳肉檢查法、匹馬改良法を制定し、家畜傳染病を調査せる等我產業界に稗益せる所極めて大なるものがあつた。明治二十五年に大學名譽教授となり、終身年金千二百圓を給せられ同三十六年に勳三等瑞寶章を賜つた。

エルメレンス（和蘭人）

氏は醫學者の子にして博覽洽聞嘗てギリシヤ國の古代典籍を譯し其名夙に世に稱せられた。天資溫厚英敏にして長く獨逸諸大學に遊び歸つて安特坦府に開業し黴毒及皮膚病をもつて專門となした。大阪醫學校教師ボードウィンの後を繼けて明治三年二十八才にて大阪に來り教師となりしが間もなく廢校となつた。

氏は一時陸軍省に聘せられ大阪鎭臺病院に勤務したが同六年東京に新に病院を開設するに際し入つて教師となり名聲益熾にして多治者受教者院內に輻湊したが翌年事ありて辭し歸國した。後年再來大阪にあつて治療に盡せし旁々子弟を誘掖した。氏は明治七年病理學通論を刊行しウィルヒョーの細胞病理學を紹介した。高橋正純氏の日講記聞產科論はエ氏の講述に係るものである。尙氏の著書は數十卷に上る。歸國後歲餘佛國に遊び病を得て一八八〇年齡僅に三十八歲にて長逝した。

シモンズ（米人）Duane B. Simmons

氏は宣教師にして一八五九年に來朝し橫濱に病院を造り、日本の子供の爲に蟲下し藥を拵へこれに氏の名を附してセメンエンと稱した。所謂「セメン先生」とは氏のことである。

ランゲック（獨逸人）Langegg

明治八年初て京都に癲狂病院を創立するに際し院長眞島氏と共に精神病方面に貢獻し其功極めて顯著なるものがあつた。

リチャード孃（米人）Miss R. Richard

女史は宣教師にして我國人に初めてタルコツト女史と共に看護術を教へた、即ち日本人の母とも言ふべき婦人である。

ゲールツ（和蘭人）Dr. A.J.C. Geerts

明治初年當時は勿論醫學は幼稚なものであつたが、追々に發達し明治八年には京都に官立司藥場が設立さるるに至つた。時に政府が醫學の檢査鑑識をなさしめんが爲に特派したのは前に長崎精得館の豫科教師たりしことのある理化學博士ゲールツその人であつた。氏は模範藥局を新設しアポテーキと名附け器械藥品を一切和蘭より購入し所謂藥學分業の理想が實現された譯である。又同十一年には博士及明石博高氏等は氣象觀測の要を當局に建言し同十三年御苑内に日本最初の觀測所が設置され諸器械を歐洲より購入しその名を觀象臺と稱した。

ランガルト（獨逸人）Dr. Langgard

氏は明治八年東京醫學校に製藥化學及其實地演習教師として招聘され尚其他普通化學をも講じ同十四年迄在職した。アイクマン氏と共に斯界に於ける功績大なるものがあつた。明治十四年特に謁見の榮を得同十八年勳四等を賜つた。

アイクマン（和蘭人）E.F. Eykman

氏は一八五一年にゲルデンランド州に生れ一八七五年ライデン府大學に學び測量試驗に及第した。明治十年我内務省衛生局の招聘により來朝し直に長崎出張の命をうけ同所化學場にて化學を教示し初めて藥品試驗をなし後同化學場長に擧げられた。同十一年内務省衛生局司藥場長となり次いで東京大學醫學部招にかれ化學製藥學藥劑學を講じた。氏は在邦八年前記以外に或は日本藥局法編纂委員となりまた中央衛生會委員に擧げられ或は藥物の製法試驗定量分析に從事せる等我藥學界に於ける氏の功績は忘るべからざるものである。

明治十八年歸國に先ち勳四等に叙せられた。

ヒヤツ（和蘭人）

ヒヤツ氏はユトレヒトの陸軍化學學校の教授にして明治元年長崎醫學校の化學及物理學教師となつた。居ること五年に

して内務省衛生局顧問を命ぜられ東京に衛生化學試驗所を設立し、亞いで京都及び横濱に同試驗所を設置するに功極めて著しかつた。氏は其後横濱衛生試驗所長として殊に輸入藥品の試驗を擔任し終生その職に在つた。其著 Produits de la Nature Japonaise et Chinaise に於て日本を外國に紹介した。同著は數卷に及ぶ筈なりしも僅に二卷の完結を見しのみで氏の死を見しは遺憾であつた。加之氏が日、蘭、英、獨各國語を以て日本に關する記事を公にせるものは尠くなかつた。

日本製藥法に關する梗概及入浴心得をも日本語を以て出版してゐる。氏は稀れに見る日本愛好者で死後遺稿中に日蘭親交に關するものも種々發見されてゐる。

フェスカ（獨逸人）Max Fesca

氏は哲學博士にしてゲッチンゲン大學の教授であつたが、明治十五年十一月駒場農學校農學教師として招聘され、同二十五年十一月迄在職しその功により二十年勳四等に叙せられた。

キンチ（獨逸人）Quint (?)

本邦に於て初めて農藝化學の教授に從事せるものは實にキンチ氏であつた。駒場農學校（明治十年設立）に於ける氏の任期は比較的短日月であつたが、我國の農藝化學は氏によつて扶植されたものと言うも不可ない。ケルネル、ロイーブ兩博士は氏の後繼者であつた。

ケルネル（獨逸人）Dr. Oskar Kellner

一八五一年シレジア州に生れ、ブレスラウ及ライプチッヒ大學に入り化學其他の自然科學を研究し一八七四年ライプチッヒ大學より哲學博士の稱號を得た。後ブロスカウ府立生理學實驗所化學技師及同所公立農學校講師たる人であつた。明治十四年我農商務省所轄農學校の招聘により來朝し、後同校の帝國大學に移され農料大學となるや入つて農藝化學の教師となつた。在職十一年學生の教導は勿論、本邦各種土壤の分析、稻の培養、肥料の研究等にも力を盡し、又一般農業及蠶業上の研究等實に枚擧に遑なきの觀がある。ロイーブ博士と共に幾多の人碑を作つたが、古在、鈴木、農永、麻生の諸博士はその主なる人々である。歸國に先ち特に拜謁を賜り、勳三等瑞寶章を賜り大學よりは名譽教師の稱號を贈られた。享年六十にて故國ライプチッヒに逝去した。

ロイーブ（獨逸人）Oscar Loew

一八四四年ババリヤ州レドウッツに生れ若くして意を動植物生理學の研究に注いだ。一八六八年ニューヨルク市專門學校分析化學の助手となり後ミュンヘン府に於てネーゲリー植物生理學教室の助教授となり、一八九二年にはハレー府レオポルト・カール・アカデミーの會員に推薦された。氏が東京帝國大學農科大學に招聘されしは明治二十六年で農藝化學教師となつた。四年後病の爲め歸國ミュンヘン大學にて農藝化學を講じ次いで北米農商務省顧問となつたが三十三年再度來邦農科大學に入り、在任約七年夥多の論文をも發表した。實に氏は前後を通じ約十餘年に亙り我國に幾多優秀の農藝化學者を養成し、單に化學を實地農業に應用するに止らず、深く且つ廣く植物生理學に及ぼせるは日本農藝史上特筆すべきものである。キンチ、ケルネル博士の斯界に於ける功績と相比すべきである。三十八年敕任待遇となり四十一年勳三等瑞寶章を贈與された。

ウィード（米人）Widor (?)

京都府下船井郡須知町に蒲生野と言ふ曠野があつた。そこに農學校を建て氏を聘して始めて組織的に大農式耕作開墾を試みて全國に模範を示した。氏は又その旁ら牛種改良にも力を用ひた。

チョンソン（?）Johnson

明治四年レーマン氏の手に依り搾乳を試みたが、翌年二月農學士チョンソン氏を聘して專らその任に當らしめた。即ち鴨川東涯荒神橋南（京都大學醫學部精神科の地）の舊調練場に牧畜場を設け、種牛數頭を飼養し獨逸より洋苜蓿の種子を取り播殖せしめた。現今我國到る所にこれを見ることの出來るのは氏の好個の記念物である。

ミュルレル（墺國人）Albert Müller

一八六五年マグデブルグ州グラッペン村に生れ、長じて伯林蹄鐵學舍に入り卒へてケブライテンに進んだ。明治二十三年

獨國陸軍省の許可を得東京農林學校の招聘に應じて來朝し蹄鐵術の教職に就いた。同校の帝國大學に移り農科大學となるや入りて舊職を奉じ恪勤大いに盡す所あつた。當時の本邦に於ける蹄鐵術は猶極めて不完全であつたが、氏の來朝によつて新式の蹄鐵術適用され斯界に一大進歩を見るに至つた。尚氏は旗ら陸軍蹄鐵學舍の囑託となり次いで各師團の召集せる蹄鐵工長に蹄鐵法を講じ我が陸軍部内にその新樣式を採用せしむるに至りし功は忘るべからざるものである。明治二十八年滿期歸國に先ち勳六等瑞寶章を下賜された。

ヘーフェレー（獨逸人）Dr. K. Hefele

一八六三年アウグスブルグに生れた。ミュンヘン大學卒業後擧げられてその講師となり、森林保護學特に砂防工學の講義を擔當し後シリヒテンブルグ林區の森林官補となつた。

明治三十四年より三十六年迄農科大學林學教師として林學通論、森林砂防工學、森林經濟の各講座を擔當し、旗ら實地森林視察によつて得たる識見を發表し本邦林學教育上に盡せる效績著しきものがあつた。氏の論著の主なるものを擧ぐれば、山岳林等高所に於ける森林の經營、日本に於ける林業試驗、日本に於ける林業旅行の所感、樺太東部シベリヤ滿洲支那朝鮮の旅行、富士山の森林、日本森林に對する將來の作業法、森林及理水等である。

明治三十六年勳五等旭日章下賜。

ホーフマン（墺國人）Amurigo Hofmann

一八七五年ストリーストに生れ、二十二歳にしてウィンナ高等農林學校を卒業し、一八九七年擧げられて墺國政府の森林官となつた。一八九九年にはツアラーに轉じ一九〇〇年森林監督官となり兼てカタロ砂防工區の森林監督及砂防工事指揮官となつた。

氏は明治三十七年東京帝國大學に聘せられて來朝し、以來農科大學林學教師として森林治水砂防工學の講義並に實習を

擔當し、四十二年迄大いに斯學の發達に盡す所あつた。氏は尚餘暇に日本は勿論朝鮮、臺灣迄も踏破調査しそれに關する著作論文を發表した。其の一二を擧ぐれば、日本の河川及礫流、蓄水溝に就き、日本森林の材木、韓國に於ける森林產物に就き、等はその主なるものである。功により明治四十三年勳四等瑞寶章を贈與された。

マイエル（獨逸人）Heinrich May

バイエルン州ミュンヘンに生れ、哲學博士の學位を有す、帝國大學農科大學林學教師として明治二十一年より二十四年まで在職した。氏は歸國に際し特に謁見の榮を賜つた。

グラスマン（獨逸人）Eustach Grasmann

一八五六年インニングに生れた。ミュンヘン大學を卒業して實務に當つたが、後ミュンヘン大學林學實驗場長ガイエルに招かれその主任助手となり、ドクトル・エコノミー・ブブリケーの學位を得一八八五年職を辭しハンガリーに赴き同國の施業案編成のことを指揮した。

明治二十年東京農林學校の聘に應じ來朝同校林學教師となる。後同校が帝國大學に移り農科大學となるや學理研究及實地研究に學生を指導し、又公費を投じて全國を跋渉し林業の實際を踏査しその改善を計るなどその功鮮くない。明治二十八年歸國。これに先つて將に陛下より謁見の榮を賜ひ、二十八年には勳四等旭日章を拜受した。

コワニー（佛國人）

氏は明治四年鑛山寮に招聘され生野鑛山の開鑿に從事した。これ鑛山に外人を聘用した初めである。明治五年住友家の依囑に應じて別子鑛山を視察し有益なる助言を與へしこと廣瀨宰平氏の自傳「半世物語」に書いてある。

ネットー（獨逸人）Curt Netto

一八四七年八月サキソン王國に生れ、一八六四年フライベルフ鑛山學校に入り後政府の考試を經採鑛冶金學士の稱號を

得た。

明治六年鑛山及冶金技師として工部省に招聘され、秋田縣小坂銀山に勤務、十年十月轉じて東京大學理學部採鑛冶金學教師となつた。在職七年精勵恪勤能くその任を盡くした。「涅氏冶金學」は本邦の刊行に係る氏の著である。明治十八年歸國に際し特に謁見を賜り勳四等旭日章を贈與された。

ダン（米人）Edwin Dan

氏は本邦地質調査の鼻祖ライマン氏と等しく開拓使雇として來朝し、用濟後は米公使館の書記官となり後更らに公使に累進せる人である。極めて日本に厚意を有し公使を罷めし後も日本に止り日本の國勢發展に盡した。

氏の忘るべからざる功は外資輸入に依り日本產業の隆昌を期することを政府に進言し、その贊同を得明治三十三年インターナショナル・オイル・コンパニーを設立せることである。

ハース（米人）

米國テキサス州ワラヴェス郡オースチン市に生れた。氏は學理、實際兩方面に通ぜる鑿井技師にして日本石油會社に招聘せられ明治二十六年來朝した。同會社は曩に米國より鑿機を輸入し斯業界に新生面を開拓したが、更に氏の精妙なる操縱法により本邦の機械鑿井術は玆に忽にして從來の面目を一新するに至つた。

シンクロートン（米人）

氏は文久年間長崎に在住せる醫師であつたが、啻に醫學に秀でたるのみでなく各方面に渡り廣き知識を有してゐた。氏は越後の素封家平野安之丞なる人に石油の說明をなし、文久年間黑川村在に所謂「異人井」なる手掘井を掘鑿し本邦石油發達の基礎を開いた人である。

タムソン（米人）David Thompson

オハヨー州ウェスト・ペンシルヴニヤに生れた米國長老派の宣教師であつた。氏の來朝は文久三年五月であつたが、當時は未だ公然傳導することを許可されなかつたので氏は横濱に居を卜し英語教師をしてゐたが日本基督教會の基礎を關東に布いたのは實に氏であつた。氏の忘るべからざる功績は石坂周造氏を薦めて長野石炭油會社の設立を促したことである。タムソン氏は偶、長野市外採取の露出原油の見本を石坂氏の居室に見出し、石油事業の收益甚だ多く國家の富强に關する由を說き逡巡する石坂氏に再三勸告して漸くその事業を企圖せしめし人である。

チャイルズ（米人）

氏は米國ペンシルヴァニア州クローザス・ワシントン會社の技師にして、明治三十四年日本石油會社の聘によつて來航した。氏は製油技術指導者として招聘せられし人にして製油には十五年の實地經驗を有し且技術者として米國有數の材であつた。氏の在任は僅かに二年、三十六年歸米せしが、我製油界は氏によつて得る所極めて大であつた。

ワグネル（獨逸人）G. Wagner

明治三年より五年迄大學南校に於て英獨語學及普通學教師となり、引續き八年三月迄三ヶ年を東校教師となり、同年九月より一ヶ年東京開成校製作學教師及勸業寮傭となつた。

然るに同十年製作學教室廢止せられしを以て解職されたが、更らに十四年より二ヶ年は東京大學理學部製造化學教師となり十七年より二ヶ年間は東京大學理學部及東京職工學校製造化學教師に、十九年より二ヶ年間は帝國大學附屬東京職工學校に製造化學教師として在任した。この間氏が日本工業の發達に盡せる功績は頗る見るべきものがあつた。功により勳三等瑞寶章を賜つた。

スミス（英人）Robert Henry Smith

明治七年東京開成校機械學教師として招傭され、十一年期みちて歸國した。在職中の功によつて物品を贈られ、同十九

年勳四等に叙せられ旭日小綬章を贈與された。

キヨソネ（伊太利人）Edoardo Chiossone

氏は伊太利アランソンに生れ彫刻を能くしミラン其他にて官立文藝大學に教鞭を執つたが、後獨逸フランクフルトのドンドルフ會社に傭はれた。

明治八年來朝印刷局に傭はれ主として圖案及版面の彫刻法を一新し諸般の新計劃をなし大いに業務を改善した。同年に作製した地券狀煙草、鑑札の原版の圖案彫刻は氏の手になり又紙漉賃製造方を教授し、十年九月に交換銀行紙幣一圓原版を作つた。同年陛下の臨御ありし際拜謁の榮を賜ひ物品を贈られ、十二年に大久保公の肖像を銅版に鐫刻した。これ本邦に於けるメソチンチ式（マニエルノワル式）の嚆矢である。

同年陛下に從ひ各地の景色及社寺の古器物を撮影模寫した。又氏は我古美術品を蒐集しその一部を本國の美術館に送つて日本美術を紹介し、奈良及近畿の諸地に遊び我古代美術の眞隨に觸れ歡喜措く能はなかつたと言ふことである。同十三年に勳四等に叙せられ二十一年に陛下の御正服及御軍服の御尊影を敬寫すべき旨を奉じ次いで御軍服御影を銅版に彫刻すべき命をうけた。

退職に際し勳三等瑞寶章を賜ひ年金を下賜され、尙氏は印刷局を去りて後も我國を去らず明治三十一年四月東京にて歿し青山墓地に葬られた。

ブリュック（獨逸人）Karl Anton Brück

氏はドンドルフ會社の銅版摺職工なりしが我國の招募に應じて明治七年來朝した。初め製肉試驗に從事して製煉法を改良し凸版印刷を擔任し同八年三月初めて見習岩澤松五郎外十九名に凹版印刷法を教へた。斯くて就職以來一職工として活動し傍ら凹版印刷の教師となり又リーベルス解雇後は凸版印刷の業にも關與し功勞少くなかつた。在任中肺患に罹り十三

年十一月歿した。

リーベルス（獨逸人）Bruno Liebers

氏はキヨソネ、ブリユック等と共に本間清雄氏の選拔にて明治七年來朝し同八年より三ヶ年印刷局に傭はれた。氏は同年ブリユック氏と共に製肉の試驗を行ひ製煉法を改善して原料と油とを合せ製煉することに成功した。此の指導に依つて我國の凸版印刷機械の裝置、版面の据付、肉棒、製煉等は大いに進歩をあらはすことを得たのである。又キヨソネの手になつた原版を以つて地券狀、煙草鑑札を印刷した際は日耳曼國製の機械を操縱して始めて鮮麗なる印刷をなすことが出來た。見習木村延吉氏の如きは能くリーベルス法を理解せし者である。解任に際し物品を贈られた。

アンチゼル（米人）Dr. Antisell

一八七三年に來朝し紙幣印刷用インク製造を我國人に紹介した人である。

チュリー（佛人）Dry（?）

氏は日本織物の恩人にして氏を織殿に聘して里昂よりジャカード織機六臺を購入せしは西陣機業の一大革新であつた。我國にて西洋より織機を輸入せるはこれを以つて嚆矢とする。

トリート（米人）Ulysses Treat

我國に初めて罐詰の作製法竝に其利得の多きことを敎へしは氏にして現今斯業の進歩は全く其賜物と言ふべきである。

建築土木

ダイエル（英人）Henry Dyer, C.E.,A.M.,B.Sc.

明治六年工部大學校都檢兼土木工學及機械工學教師として傭はれ十五年迄勤めた。氏は工部大學創業に際し學科課程は勿論、諸規定の選定、校舍の構造教場の配置等を計畫し我國の工學教育の基礎を定めし人である。氏の教を受けしものは極めて多く今日工學の進歩を見しは全く氏の力によるものである。明治三十五年帝國大學名譽教師の稱號を受けた。

コンドル（英人）Josiah Conder

明治六年東京に初めて虎の門工學寮が設けられ後工部大學校となり造家學科の設置を見た。これ建築を一科として取扱つた本邦最初の試みであつた。氏は同科の主任教師として明治九年に招聘せられ主として英國流の建築を教へた。實に氏は我國洋風建築界の鼻祖たる榮譽を擔ふ人で、龍野、片山、横川の各博士を初め明治年間の有名なる建築學者技師の多くは何れも氏の指導を受けた。

カペルチー（伊國人）Chapergi（？）

氏は明治九年印刷局、同十四年遊就館を計畫した、共に北伊式の煉瓦造にして前者には日本風を加味し後者には大理石を應用せる傑作であつた。共に大震災にて燒失又は大破した。又參謀本部も氏の作である。

アンダーソン（英人）Anderson

虎の門内の工部大學の附屬館は氏の設計にしてゴシック式の美しいものであるが、これは明治八年に出來たものである。

オードルス（英人）

明治五年に於ける大火の燒跡に政府は氏に命じて銀座尾張町を中心として洋風家屋（早く本通りには影を沒したが横町や堀端には往々殘つてゐた）を建築せしめたが大震災には悉く焦土となり、一枚の寫眞實測圖をも遺さなかつた。明治の都市建築の發達史研究上惜みても餘りあることである。

アレキサンダー（英人）Thomas Alexander

舊工部大學土木工學教師として明治十二年三月より同十九年七月迄教職に就き、同二十一年勳四等に敍せられた。

ワッデル（英領カナダ）J.A.L. Waddell

氏は一八五三年に生れ明治十五年八月に帝國大學理學部土木工學教師として招聘され同十九年四月に解傭された。同年四月特に謁見を賜り、大正十年十二月には勳二等瑞寶章を授與された。

バルトン（英人）William K. Burton

氏は一八五五年エヂンボルグ府に生れ、キングス大學に學び後大英國衛生會の試驗を經て同會の終身會員となり一八八一年擧げられてロンドン衛生保護會の主任技師となつた。

明治二十年帝國大學の招聘に依つて來朝工科大學衛生工學教師となり學生の教導に從ひ殊に衛生工學は二十年の創設にして氏は即ち該學新設講座に於ける專門教師の嚆矢であつた。氏は又内務省傭となり水道及治水工事等の企畫經營にも參しその進歩改善に益せる功決して少くない。彼の基隆の水源地發見の如き全く氏の力であつた。今日日本の衛生工學の發達は氏の力與つて大であると言ふべきである。明治二十九年勳四等旭日小綬章を下賜された。

ホエーラー（米人）Wm. Wheeler

氏はマサチューセット州に生れた。札幌農科大學土木科教授の職に就き又初めて札幌小樽鐵道設計のため土地踏査に當り功績のあつた人である。

ウェスト（英人）Charles Dickinson West

一八四八年ダブリンに生れ、ダブリン及びトリニテー大學に學び後蒸氣機關其他諸機關の製造事業に從事した。明治十五年機械學校教師として工部大學に聘用され、十九年東京大學と併せて帝國大學の設置さるゝや工科大學に前職を繼ぎ、在職二十五年好く教導の任に當つた。實に氏は學識精確、經驗の豐富なると共にその人格高潔にして人の感歎措かざる所であつた。氏は造船學科の創設に力を用ゆると共に土木工學、電氣工學、造船學、採鑛冶金學、應用化學等を擔當し殊に機械工學中船舶機關學に精通し氏の指導の下に幾多の專攻者を出した。我海軍を初め三菱川崎造船大阪鐵工場等に對しての氏の貢獻も忘るべからざるものがある。明治四十一年一月大學教師室に於て永眠した。同二十八年勅任待遇となり四十一年勳二等瑞寶章を下賜され手當金五千圓を支給された。

パルヴィス (英人) Frank P. Parvis

一九〇一年より東京帝國大學工科大學造船學教師として招聘され、大正九年七月三十一日に至る迄該博なる智識と豐富なる經驗とをもつて終始一貫學生の養成に努め、本邦造船界に幾多の人材を作つた。尙氏は造船工學科の改善に意をそそぎ、在任中五回歸國し親しく歐米造船界の狀況を視察し本邦斯學の發達に資した。又本邦各地の造船所を巡回し忠言を與へ、公務の旁本邦諸學會に發表した有益なる論文を歐米の學界に報告した。

大正四年工學博士の學位を授與され勳三等瑞寶章を賜り、同十年帝國大學名譽教授の稱號を得た。

ウェルニー (佛人) Verneuil (?)

氏は慶應元年七月に主船寮横須賀造船所に造船首長として招聘され明治九年三月迄在職したる人にして維新創業時代の造船に就いて功績があつた。

ヴアン・ドールン (和蘭人) C. J. Van Doorn

內務省に雇はれ明治九年の野蒜築港建設に貢獻した。その目的は東北地方の產業振興の策として仙臺地方を中心とし河海陸運輸路の連絡を施すことにあつたので、此の地點を野蒜に定めたのも主としてヴアン・ドールンの意見であつた。氏は河川改修工事には相當の學識經驗を持ち氣格も他の蘭人に卓越し長工師と稱せられたが築港工事には寧ろ素養を缺いた。

明治五年大阪築港の計畫をたてしも氏はこれには成功しなかつた。しかし大阪築港の計畫者として記憶さるべき人である。明治四十三年歸國し後死去した。

デ・レーケ (和蘭人) Johane De Reike

明治九年來朝。內務省傭土木工師にして淀川改修工事に從事し亦明治十三年ヴアンドールン氏の試みし大阪築港の後を受け遂にその竣工を見た。三十八年淸國に聘せられ、黃浦江の改修に功ありしことも特筆に値する。四十三年歸國し後死去した。

パーマー (英人) Gen. H. S. Palmer

明治十八年來邦、横濱の築港及水道工事は氏の計畫である。即ち明治廿二年に築港に着手し、竣工は明治廿九年である。工費は二百二十五萬圓、工事の監督は內務省がこれに當り、神奈川縣廳內に建築局を置き成功につくした。氏は二十六年に死去された。

ブラントン (英人) R. Henry Brunton

明治元年以來日本政府の燈明臺機械方頭として燈臺建築一切のことに盡力した。彼の神奈川條約による觀音崎燈臺の如きは明治二年に完成せるものであるが、專ら氏の設計によつたものである。

ムルドル (和蘭人) Rt Mulder

バーマー氏に續いて來たのが氏であつた。明治十八年頃內務省に雇はれし技師で、東京灣の築港は此の人が初めて計畫した。亦氏は野蒜築港にも關係した。

エッセル (和蘭人) G. A. Escher

內務省雇工師にして我國築港の先驅たりし越前坂井港の實地調査(明治九年)に當つた人である。十一年任期滿ちて歸國の後は蘭人デレーケが之の後を襲ふて工事を進捗せしめたが、該築港の着手者として忘るべからざる人である。現に尙ほ存命である。

クローフォード（米人）Col. Joseph U. Crawford

一八八二年北海道に於ける鐵道の嚆矢たる小樽幌内間炭坑鐵道施設を計畫したのは氏であつた。尙氏は北海道給水工事のため初めて土地踏査を試みた。

モレル（英人）Edmond Morell

氏は外人にして我國に傭聘せられし最初の鐵道技術者にして、明治三年來朝建築師長に任ぜられた。鐵道の創業に際し建築計畫の氏の手に成れるもの多く、新橋、横濱間及び大阪神戸間の工事に關係し、其功尠くない。工部省の設置の如きも氏の意見に與つて力あると言はる。明治四年肺疾に襲され印度に轉地せんとするやその功績に依り療養資金五千圓を下賜された。然れども未だ旅程に上らざるに病重つて死去された。

カーギル（英人）W.W. Cargill

氏は初め英國東洋銀行社員にして我委託に依り鐵道事務に關係せしが、英本社より歸國を命ぜられしをもつて明治四年大隈工部省御用掛山尾權大丞、井上權大丞より同社に交渉しその承諾を得明治五年より五ヶ年の任期をもつて傭聘され鐵道管配役となつた。明治五年東京横濱間開通に際し馬車一輛馬二頭を獻上し依つて金二千五百兩を下賜され、開通式に際しては恩賞として物品を賜つた。同十年京都にて拜謁を仰付けられ物品を賜り同年四月解傭に際し賞受を下賜された。又同十六年在職中の功を賞され勳三等に叙せられ旭日中綬章を贈與された。

イングランド（英人）John England

明治三年四月工部省鐵道局に傭聘せられ建築副役として新橋横濱間を測量し尋いで大阪神戸間を測量し又關西方面に於ける諸般の工事計畫に參與した。八年セッパルドの後を受け新橋横濱間に在勤し十年九月建築師長として在職中病おもつて歿した。

オルドリッチ（英人）A.S. Aldrich

明治四年十二月工部省鐵道局に傭入せられゴールウェー氏の後を襲ぎ新橋横濱間の營業事務を兼掌しカーギル氏歸國の後は傭外國人の中央部として萬般を總理し局長長官を輔けて功少くなかつた。十六年三月勳四等に叙せられ同年運輸事務兼攝を解かれた。十八年十一月公務をもつて英國に出發し後二十二年十月勳三等に叙せられ、二十九年十二月勅任取扱と爲り三十年一月勳二等に陞り在職二十五箇年餘にして同年三月解傭せられ爾來日本政府より恩給年金を受けた。

マクドナルド（英人）John McDonald (Gray)

明治六年六月工部省鐵道局に汽車運轉方兼造車方として傭入せられ新橋に在勤し、十三年以來職工長として工場に勤務した。後三十三年十一月勳五等に叙せられ在職二十七年餘にして三十四年に解傭せられ爾來我國政府より恩給年金を受けた。

ページ（英人）W.F. Page

氏は明治七年二月工部省鐵道局に傭聘せられ神戸に在勤し十年二月開業式に際し御召列車運轉の廉に依り賞を賜り二十年三月勳四等に叙せられた。後二十二年東海道線全通後東京に在勤し全般の運搬事務に盡瘁し功勞少くなかつた。二十七年七月勳三等に陞り三十一年十二月勅任取扱と爲り在職二十五ヶ年餘にして三十二年三月解傭せられ、爾來日本政府より恩給年金を受けた。

トレヴィシック（英人）F.H. Trevithick

初め明治九年九月汽鑵方頭取として工部省鐵道局に傭聘せられ神戸に在勤せしが轉じて新橋に在勤し汽車監察方助役となり尋いで監察方となつた。後三十年一月勳三等に叙せられ同年三月解職となつた。在職二十ヶ年に亙り日本政府より恩給年金を受けた。

スミス (英人) W.M. Smith

明治七年四月工部省鐵道局に傭はれて神戸に在勤し運轉及工作を主管した。十年二月開業式に際し御召車製造及運轉の廉を以つて賞を賜り十一年八月解傭となつた。

クリスティー (英人) F.C. Christy

明治四年八月工部省鐵道局に傭聘せられ新橋横濱間に於ける運轉及工作の主任者として從事した。開業の際には恩賞として蒔繪冠棚、手箱を賜り九年九月解傭となつた。

シヤン (英人) Theodore Shann

明治四年七月工部省鐵道局に傭聘せられ建築助役として京都神戸間に於ける十三川、神崎川、武庫川、等の橋梁工事に從ひ八年新橋横濱間に移り六郷川其他の架橋に從事した。十一年十一月病を以つて歿した。享年二十九。

パウネル (英人) C.A.W. Pawnall

明治十五年三月工部省鐵道局に傭聘せられホルサムの後を襲ぎ建築師長として神戸に出勤した。二十年四月賜暇歸省し翌年三月歸朝した。後二十二年東京に轉勤し同年十月勳三等に叙せられ在職十四ヶ年にして二十九年二月解傭せられた。

ゴールウェー (英人) Wm. Galway

明治四年二月工部省鐵道局に傭聘せられ初め建築に從事せしも五年以來新橋横濱間に運輸長として在勤し開業の際には恩賞として蒔繪料紙箱、手箱を賜り、七年新線測量に從事し上越線及飯山、松代、上田の線を踏査し又大津長濱間を實測

した。同年十二月解傭せられた。

ボイル (英人) R. Vicars Boyle

建築師長(首長)ボイル氏は前に印度の鐵道に從事したる帶勳者にして、明治五年七月モレル氏の後任として工部省鐵道局に招聘せられ九月着任し爾來神戸に在勤し技術全般を統督した。七年五月自ら中山道を踏査し八年九月再び之を踏査し又尾張線、信越線等を調査し基礎計畫を定め其功少くなかつた。在職五個年明治十二年二月をもつて解傭となつた。

ブラウン (英人) Capt. A. R. Brawn

明治四五年頃政府は明治丸を英國に注文せし時氏はこれに乘つて來朝した。船舶を外國に注文せるはこれが最初であり後この船は燈臺の使用船となつた。氏は最初運轉手なりしが後船長となり、明治六七年臺灣征伐に際し支那より船を購入せし時高千穗丸其他の運輸掛を命ぜられた。其後管船課雇となり外人に對する試驗委員長に任ぜられた。晩年歸國後はグラスゴー日本領事として終身勤め我國に對する功績著しく勳三等を賜つた。

ギルベルト (英人) A. Gilbert

日本最初の電信架設に貢獻せる人である。明治初年工部省内に電信寮を設け實際電信を應用することゝなり、先づ英國より然るべき技手を呼ぶことゝなつたが、此の際五六人の者の上司として來たのがギルベルト氏であつた。學問的方面の人ではなく、建築方面の人であつたが初期の電信に關しては忘るべからざる一人である。

ゴープル (米人) Jonathan Goble

氏は幕末に來航せるペルリ艦隊の水兵にして、我國の道路の劣惡にして馬車の不可なるを見、遂に人力車を考案しこれを秋葉庄助なる者に教へた。秋葉は明治三年初めてこれを造つた。爾後の人力車の端を爲したものである。尙氏は我國、宣教師として滯在せし人である。

ジュ・ブスケ（佛國）De Bousquet

慶應元年幕府は二十名の步騎砲各兵科の教官を招聘したが、氏はその一人であり騎兵大尉であつた。此等教官の來邦は蘭式の兵法を佛式に代らしめたものである。氏は日支兩國語に精通し、日本人を妻として横濱に在住してゐたが後新政府に用ひられ元老院の傭となつた。我國に西洋流の大禮服を制定するに際し氏は各國の長短を取捨し現在の大禮服を案出した。

メッケル（獨逸人）Meckel（?）

明治八年兵學寮の廢止と共に士官學校の設立となり、同十六年陸軍大學成り我軍事教育上大發展を見たのであるが、同十八年にメッケル氏は政府の招聘に應じて來朝し陸軍大學に獨逸式戰術を講ぜし人である。氏が我軍事上に貢獻し又日本に深い同情をよせしは特筆すべきものがある。死後一部の人々の間に遺骨を獨逸より持來らんとの話さへもちあがつた。大學に氏の銅像がある。

フック（佛人）Propelle Fuck（?）

氏は陸軍大尉にして明治三年三十才前後に來朝し後陸軍大學教官となり砲術數學を教授し在邦約四十年の長きに恒り、大正十年頃に死去した。

リセンドル（李仙得）（米人）Gen. Charles W. Lecendre

氏は獨眼の軍人にして勇敢なる人であつた。一八七四年臺灣征伐に際しては政府の顧問として大いに功があつた。氏の著書は震災前までは大藏省に存してゐたといふことである。

ブラチャソン（伊太利人）

氏は陸軍砲工學校に在職し彈道學講師たりし人である。

ベルトー（佛人）Berteaux（?）

氏は獨逸式兵法の移入前に來朝し陸軍士官學校教官となつた。騎兵少佐にして普佛戰爭の勇者であり又博識なる學者にして各國の語學のみならず文學、科學にも精通した。氏等の來邦により後の獨式の軍制が入るの基礎が先づ築かれたのであつた。

ワッソン（米人）James R. Wasson

明治八年より同十一年に至る迄開成校土木工學教師として在任し同年歸國した。同年氏は嘗て我陸軍傭として勳功ありしをもつて勳四等に叙せられ旭日小授章を贈與せられた。

グクロン（佛人）

明治四年頃我陸軍音樂隊に初めて音樂を教授した人にして、海軍に於けるフェントン氏と共に我洋樂に於ける功勞者である。

ミニュエー（佛人）Mynuet

明治十一年より同十五六年頃迄我陸軍に傭はれ、明治十七年に死去した。

マルクリー（佛人）Marcilly（?）

ジュルタン（同）Jourdain（?）

ルボン（同）Revon（?）

エスマン（同）Esmein（?）

デシャルム（同）Decharme（?）

ペルソン（同）Person（?）

右の六氏は明治五年下士十名と共に三ヶ年の期間をもつて招傭され佛國式鍊兵法を敎へた。マルクリー氏はその長なりしが同七年一月解傭を願ひ歸國した。ルボン氏は我砲兵工廠に對しても功績あり現存の人にして陸軍中將である。

ベルタン（佛人）Louis E. Bertin.（?）

氏は明治十九年二月第二局大學校の招聘に依り來朝し海軍大臣顧問並造船研究及監督となり大いに我海軍の爲に盡す所あり、同二十三年二月解傭となる。

エッケルト（獨逸人）F. Eckert

氏は海軍軍樂隊教官として明治十二年三月より同二十二年三月迄横須賀屯營新錢座分營及海兵團に在職した。明治三十年再度招傭され軍樂隊教官となり同三十二年解傭となつた。

イングルス（英人）John Ingles（?）

氏は明治二十年より六年間の約をもつて海軍省軍務局大學校に海軍顧問として招聘されし人である。

補遺

ステーシェン（佛人）M. Steichen

一八五九年佛國ルクサンブルグに生れ、巴里にて中學及び大學を了へ、大學にては神學、哲學を學んだ。一八八六年に來邦し東京にて天主教の布教に從つた。現存の人にして日本に關しては、The Christian Daimyos の著がある。

バリノー（佛人）E. Painot

一八六〇年に佛國マコンに生れ、長じて工科大學及び宗教學校に學んだ。一八八七年にカソリックの宣教師として來邦し東京を中心として傳道に從つた。現に香港に居住し道を弘めてゐる人で、History and georaphy of Japan の著がある。

ブライン（米人）Mrs. Mary. Pruyn

クロスビー（米人）Miss J. N. Crosby

ピヤソン（米人）Mrs. L H. Pierson

此等米國婦人一致外國傳道協會の代表者の三女史は、一八七一年（明治四年）に來朝し、同年横濱山手四十八番館にてミッション・ホームを開設したが、その最初の目的は悲慘なる雜種兒を教育するにあつた。これが今日の横濱共立女學校である。ブライン女史はその總理格にして經營と塾舍の取締りをなし、クロスビー女史は教鞭をとる傍ら會計事務に當り、ピヤソン女史は校長として教授を擔任した。總理ブライン女史は明治八年、ピヤソン女史は同三十二年に歸國した。クロスビー女史は大正六年教育に對する功に依り藍綬褒章を給り、翌年七月八十二歳をもつて逝去せられた。女史は在邦實に四十六

年その間一回も歸國せず、教育の爲傳道のために盡力されたのであつた。

アストン（英人）William George Aston

博士アストン氏は一八四一年(天保十二年)に愛耳蘭ロンドンデリー市の附近に生れ、一九一一年七十一歳で英克蘭イーストデヴォンで歿した。一八六四年(元治元年)初めて日本通譯生となつて來朝し、一八七〇年江戸公使館の通辯兼翻譯官となり、一八七五年から同八二年迄江戸公使館書記官補を勤め、一八八〇年から同八三年まで兵庫領事代理となり、一八八四年に朝鮮國總領事に轉じ、一八八六年更に東京公使館一等書記官となつて東京に歸り、一八八九年(明治二十二年)恩給を受けて退職し、英克蘭に歸りイーストデヴォンのビーアに住んで晩年を文學界にたのしんだ。

氏は實に日本思想及び文學研究者としての大家であつた。日本駐在中日本駐劄英國公アーネスト・サトウ氏と俱に日本語及び日本文學を研究して、其の論說、著述は大いに內外の學界に貢獻した。氏の日本に關する論著は三十餘種の多數に及び、「日本口語文典」「日本文語文典」「日本文學史」「日本神話(俗說)」「日本神道論」等はその主なるものである。

ブールゴアー（佛人）Jaston Bourgois

氏は砲兵大尉にして明治末年に公使館附武官として來朝し後に書記官となつた。日本語にも通じ日佛辭書の著あり又日本數學を海外へ紹介した人である。

モーイツ(マキシム)（露國人）

植物學者にして我北海道の植物研究をなした。天竺花譜の著がある。

モルマン（英人）

艦船課より神戸に出張し、船舶及び船員の試驗委員として功績があつた。

ジョイナー（英人）

明治八年に赤坂區葵町測候所の招聘に依つて來邦し、我國に於ける最初の天候豫報をなした。

コール女史（佛人）

コロンバー女史（佛人）Miss. Colombe

兩女史は天主教宣教師にして、明治三十年熊本に癩病患者のために待老院を立てた。

リッデル女史（英人）

ノット女史（英人）

兩女史は英國宣教師にして明治二十八年、熊本に癩病患者のために回春病院を設立した。

ヤングメン（米人）Miss. K. M. Youngman

米國の宣教師にして明治二十七年東京目黑に癩病患者の爲に慰癩園を設立した。

テストビー（佛人）Testevinide

氏は天主教宣教師にして一八八年御殿場(小山)に癩病院を創設した。一九〇二年支那にて死去した。

ラグーエ（白耳義人）Raguet

一八五四年に生れ、一八七九年長崎に來り以來一度も歸國せずに天主教の布教につくしてゐる。佛日辭典の著がある。

グリム（獨逸人）Grimm

明治二十一年北海道廳に傭聘され、札幌病院の創立に功のあつた人である。

ヘイト（米人）M. Haight

札幌農學校に數學、物理學を擔當した。(明治二十二年—二十五年)

ブリガム（米人）A.Brigam

札幌農學校に農學を擔當した。(明治二十二年—二十四年)

ストックブリッヂ (米人) L.Stockbridge

札幌農學校に招聘され農學を擔當した。(明治二十年—二十二年)

カッター (米人) T. C. Cutter

札幌農學校に醫學を擔當し(明治十一年—二十年)歸國後死去した。

ピーボヂー (米人) C. H. Peabody

札幌農學校に明治十一年より十五年迄工學、物理學を教授し、後年工學博士の學位を授けられた。歸國後はマッサチューセッツ・インスチチュー・オフ・テクノロジーの教授となり今尚鄉里に存命してゐる。

ペンハロー (米人) D. Penhallow

札幌農學校に明治九年より十二年迄植物學を擔當した。

ブルックス (米人) W. P. Brooks

札幌農學校に農學を擔當し明治九年より二十年に至つた。後年農學博士の學位を授けられた。尚鄉里に存命の人である。

ミーク (英人) C. S. Meik

明治二十年北海道廳の傭聘に依つて來朝し、諸港灣修築の調査に從事し、明治二十一年に歸國し、後死去した。

フワンゲント (蘭人) Joh. G. Van Ghent

明治十年開拓使に傭聘され、石狩川口改修・岩内港修築等の調査に從事し、十一年歸國の途中死去した。

ヘンリック (佛人) Alphonse Heinrich

氏は一八六〇年に生れ、一八八六年巴里カトリック大學を卒業し、一八八〇年より一八八七年迄佛國モアサック、ブザン

ソン、カーン等にて教育に從事せしが、明治二十一年に日本へ渡來し、同年二月東京に私立瞻星學校(明治三十二年私立瞻星中學校となる)を設立した。次いで二十四年に長崎に私立海星商業學校を設立したが大正四年に廢校となり、四十四年には私立海星中學校を同地に立てた。また三十五年大阪に明星商業學校、三十四年に横濱に私立聖ジョセフ學院、四十四年に長崎市外浦上に聖理學院を設立し共に現今に至つてゐる。

ユンケル (獨逸人) Juncker(?)

兩氏は東京音樂學校に管絃樂教師として招聘された人である。

ハウス (米人)

ドヴライッチ (墺國人)

宮内省御雇教師として招聘され、洋樂の發達に貢獻した。

チットリッヒ (墺國人)

エッケルトの後に東京音樂學校教師として來り、專ら聲學、絃樂並に「ピアノ」「オルガン」等を教授した。

ペテー (米人) J. H. Pettee

氏は宣教師として明治十一年來朝し、明治十八年頃に基督教徒石井十次氏を助けて岡山孤兒院を設立した。

フェレッチ (伊人) Frecci (?)

サン・ジオヴンニ (伊人) San Giovanni

兩氏はフォンタネジイ氏の後を承けて工部大學の美術學校に教官たりしが、明治十六年に同校は廢止せられた。

チボシー (佛人)

氏は工部省工作局横須賀造船場副首長として明治二年二月に聘せられ、明治五年十月海軍省へ轉じた。品川、觀音崎、

野島ヶ崎の三燈臺は氏の建設したもので、これはブラントンの建てた燈臺よりも早く、日本に於て最初に灯のつけられた燈臺であつた。

ミッドフォード（英人）A. B. Mitford (hord Redesdale)

氏は英國公使館員として來邦し、日本に關係せる著書に、Tales of Old Japan, The Caster Mission to Japan 等がある。

アーノルド（英人）Sir Edwin Arnold.

英國知名の詩人たる氏は一八三二年に生れ、キングスカレッヂに學んだ。多數の著書を有する内にも特に "The Light of Asia" (1879) は氏の名聲を頓に高からしめた。氏は後年來邦し日本人を妻とし日本に對する貢獻者であつた。日本の生活の興味ある研究としては特に "Seas and Lands" (1891) 及び "Japonica" (1892) がある。一九〇四年に死去した。

クレブス（瑞典人）F. Krebs

氏は明治初年三菱汽船會社の顧問として招聘され洋人監督の任に當り、其後三菱が共同運輸會社と合併した後も引續き三菱に留まつた。

マクミラン（英人）A. Macmillan

三菱の機關監督より郵船會社に移り監督長に進み同社の船舶業務に關し貢獻せる所多かつた。

ゼームス（英人）H. Jhames

三菱の統海監督より郵船會社に轉じ、同社が歐洲航路を開始し倫敦支店を新設するに方り選ばれて支店長と爲り、同航路の發展に大いに寄與する所あつた。

明治文化回顧錄

明治文化發祥の回顧

滑稽のかずかず

市嶋謙吉

はしがき

明治以來の文明の推移に就き、追懐談をすることは案外困難である。何故なれば、明治となると、もはや、かなり西洋文明が具體的になつて來てゐるので、その移り變りを考へて見ても、突飛に人の耳目を惹くやうなものは既になくなつてゐて、漸次に移り遷つてゆく頃であるので、特にきはだつた物などもしたがつて尠いのである。それ故、この推移の模樣などをいくらか面白味のあるやうに話すことは、一寸むづかしい。しかし、いろいろ思ひ出づるままに語つて見よう。けれども、これは沿革的に文明の推移を語ろうとするのではなく、明治の初年、まづ九年頃までの間に、西洋文明が日本に入つたとはいへ、まだ充分にそれが消化されぬその間に、いろいろの滑稽味のある事や、今日から考へれば兒戯に類するかの如き感のあるものを主なる材料として、聊か語つてみよう。

一

幕末に亞米利加の軍艦が日本へ來て、當時日本の大官がその艦の招待を受けたことがある。當時の日本の禮服は例の衣

冠束帶、卽ち今の神官の服裝の如きものを着して艦に臨むだわけである。

この時に當つて日本の外國通が三ケ條の注意書を棧橋の入口に墨黑々と書きつけて貼り出した。その第一は艦の中はペンキがまだ乾いて居らぬから、狹い場所を歩く時は袖の觸れぬ樣注意せよといふこと。第二は、艦の中には壁の代りに大きな鏡が裝してある、その鏡に映る自分の姿に驚いてはならぬ。且つそれに突き當つてはならぬといふこと。それから第三は、日本の禮式では饗應に出た食物を紙に包んで持ち歸るのが例であるが、斯樣なことをしてはならぬといふ意味が書かれてゐたのである。當時日本の大官が外國の風俗に就て如何に幼稚であつたかゞ窺はるゝであらう。

二

明治になつてからの風俗上のことに就いて一二の話柄をあげると、斷髮令が出た時に、自分のごときはまだ少年であつて鄕里越後に居つて頻りに漢學を學んでゐた頃であつた。その頃新潟縣令として、楠本正隆氏がやつて來た。此人は非常な文明鼓吹家であつた。從つて盛に斷髮を奬勵したのであるが、その手段として、縣下に知られてゐるやうな家柄に向つては、模範的に斷髮をさせて、これを以て一般に對する斷髮奬勵の材料としたのである。私の家などへはわざわざ役人を派遣して、是非卽座に髮を切れといふわけで、否應なしに役人の目前で斷髮をさせられたのであつた。中には髮を惜んで躊躇した者もあつたが、これは年の長じた人たちのことで、自分などは喜んでこれに應じた。その理由は、當時の髮を結ふ爲には隨分煩らはしく、櫛で頭の痛むほどスクやら油をつけるやらするのが苦惱で、髮を結ふことは避けられるだけ避けようとしてゐた位であつたからである。それ故に喜んでその命に從つたが、父から褒美として帽子を與へられたのが嬉しかつた。

楠本縣令で思ひ出したが、此人が越後へ赴任した時の事である。勿論當時は汽車もなく、人力車もなく、淸水峠といふ

難所を經て來た楠本氏自身、當時奇なことがあつたと云つて或る時語られたことがある。氏は徒步で此の峠を上つて、汗だらだらで絕頂の茶屋に憩ひ、水を求めて飮まんとする時、カバンの中から炭酸マグネシアを取り出して、それを少し茶碗(勿論コップなどは無かつた)の中に入れて水を注がせると、渦を卷くやうに沸騰したので、茶店の主人はこれは魔法使に違ひないと驚いたといふが山間の僻地で驚いたのも無理は無かつた。

三

戊辰戰爭の時、後に陸軍中將となつた三好といふ人が官軍を指揮して越後に來た。その人の書いた手紙を自分は所持してゐるが、その手紙に當時の樣子が偲ばれることが書かれてゐる。それは用度係長に送つた手紙で、寒冷紗で作つた筒袖を二百ばかり至急送れ、雪中で戰ふには黑の筒袖では、敵の彈丸の的になる樣なものであるから、羅紗の筒袖の上にこれを着ける必要があると書かれてゐるなど滑稽である。

明治の草創にはまだ廢刀令も出なかつたので、今の帝國大學の前身である大學南校などには、學生は多く士分から拔擢されて出てゐたから、外人敎師に就て學ぶに若なる各自脇差を帶びて、講堂に臨むだことである。西洋人が無禮な言でも吐けば中には刀を按じて質問を試みるといふ連中もあつた。

四

新聞紙などは割合に早く出來た。しかし極めて幼稚もなのであつたが、とにかく慶應の頃から出てゐる。その形式は今の雜誌のやうなもので、半紙を二つ折にして五枚乃至十枚を綴つたのが多かつた。今のやうに一枚物にした最初のものは、日本紙で西の內位の大きさなものであつた。東京日々新聞の初號などそれである。

その書かれてゐる事柄は官令やその日その日の出來事、市井の瑣事などで、甚しきに至つては某風呂屋に何々の忘物があるなどいふことまでも書かれて、幼稚なものであつた。

半紙二枚折の新聞が雲程となく出て來たなかで、面白いと思つたのはそれに小さな字書が添はつたもののあつたことである。その字書には難解の字に註解を施し、新語には特に説明を加へたものであつた。その字引は現に早稲田大學の圖書館に二册ばかり藏してある。

昨秋の震災前まで殘つてゐた京橋角の讀賣新聞社の建物は、例の煉瓦造りで明治の初年は餘程立派に見えたらしく、田舍の赤毛布連は其の入口の樣子や受付のアンバイが神社に似てゐると思つて受付にお賽錢を投げこんで、拜をしたものもあつたといふもだ。自分もこの新聞には關係があつたが、その當時創立に關係のあつた人の話に聞いたところに依ると、當時新聞の配達をすることも甚だ簡單で、事務員が夕刻歸へりがけに幾枚かの新聞を携へて途中配達をし、或は翌朝配達したこともあつたといふ、今からみれば珍談である。

また尾崎咢堂氏が一たび主筆たりし吾鄕國の新潟新聞を見るに、種子切のためでもあつたか、社説として世界の英傑傳を數十日連載してゐたことなどもあつた。また犬養木堂氏が秋田の新聞の主筆をやつた頃、社説に西洋の學者をいろいろ引き合に出したのを、よく讀むで見ると、それが西洋料理の名からひねり出したオムレツト氏曰くだとか、ブランデー氏曰くなどいふ出鱈目であつて今から見れば噴飯に價することで滑稽を極めた。

五

明治六年、郵便の元祖である前島男爵が、郵便の機關として、どうしても新聞がなくてはならぬといふて新聞を發行したことがある。全體男爵は極端なる文明論者で、慶應二年あたりに既に漢字廢止を主張し、時の將軍にまで建白した位であつた。その人が新聞を出したのであるから、いきほひ假名書を主義とする新聞となることも首肯かれるのである。

即ち明治六年二月、神田淡路町の啓蒙社から發行させた新聞は「毎日平がな新聞」といふので、半紙二つ折、三枚位が一號となつてをるもので、而もその全文が偏平體の平假名ばかりで印刷されたものである。一時萬朝報などが使つてゐた平がなの字體と同じ型の活字であるが、全文がすべてその假名書であつたのである。それは一には假名のみで書くために、語を組むことの上から殊更に偏平の活字を鑄造したといふことは當時に於て非常な創意といはなければなるまい。これなどは決して幼稚なものと云ふことは出來ぬ。むしろ時代に先んじた擧とも云はねばなるまい。

然し漢字を廢すといふことは今日に於てすら出來ぬ位のものであるから、かかる目新しいものは人の珍重するまでには至らず、折角かうした主意のもとに起された新聞もあまり長くは續かなかつた。何號まで出たか知らないが、自分のところにあるのは第十號である。

ついでに活字のことに亘つて云ふが、活字の働をはじめたのは明治よりずつと以前で、慶長あたりに始つてゐるが、維新後に至つては無論盛に用ゐられた。全體活字といふ名を誰がつけたか知らないが、一つ一つの字を嵌めていろいろに組むことが出來る、その轉換が活字の特徴であるといふことからして、一の惡い癖を生じた。それはよい加減な原稿を活版所へ回はしておいて、校正の時にうんと直すといふ癖が、今でも改まらず、活版所がそれで苦しめられてゐるが、西洋では校正が出來てから、著者の方で直す時は手數料を取ることになつてゐる。しかし日本では活版だから、直すのが當然とあつて、加藤弘之先生などは脱稿に至らない草稿を同じておいて組んでから縱横に直された。先生に云はしむれば、直すことが出來るから活版といふのであつて、活の字はそこに意味があるのだと云はれた。

六

明治の初年にヘボンの英和辭典が出來た。これは英學者に非常の便を與へた。政府でもこれを奬勵して二千部丈買上げた。大隈侯のもとに遺つてゐる文書によると、大學南校で此二千部を買ひ上げるに就て、此の字書の可否に就てはボアソナードの鑑定を經たとある。いくら便利のものでも、當時二千部賣ることは容易で無かつたので、政府が奬勵的に買上げたと見える。

その頃バタビヤで出來たボツケツト日英辭書を飜刻したが、ボツケツトとあるから、袖珍と譯したは無理もないが、それが日本紙で五寸もある厚さの本で尨大のものである。なかなか懐中など出來兼ねるものであるのにボツケツト、デクシヨナリーだからと云つて正直に之れを懐中したものもあつた。

茲に又字書に就て一笑話がある。前島男が英學者として薩摩藩に教師として迎へられた。藩では大學者として尊敬を拂

つた。或る時藩では大切な寶物を見せるから禮服で出頭せよといふから、男は禮服を着けておごそかに出頭に及ぶと、「濫りに見せるものではないが、學頭であるから特別に見せるのである」といふて、箱に入れてあるものを持ち出して來た。それが二三重の箱に丁寧に納めてあつて段々開いて見ると立派な帛紗に包まれたものが出た。それは何かと思ふとウエブスターの大辭書であつた。その頃にはもうウエブスターの辭書は珍しいものでもなかつた。然し薩摩では餘程前に外人から贈られたので、これを大切にしたのである。まだ何處にも無かつた時分外人から寄せられたから大切にしたのも無理はないが、前島男も吹聽が餘りエラかつた爲め、見て一笑を禁じ得なかつたといふ。

七

明治の初年は禮服の制はまだ舊式であつた。自分の鄕里に新潟英學校が出來たのは明治五六年頃であつたと思ふが、最初英學の教頭として迎へた人は關信八と云ふ英學者の門下生で、後に仙臺から代議士に擧げられた首藤隆三氏であつた。その人が聘せられて、新潟の秋田屋に泊つてゐると縣廳から差紙が來た。これには明日何時に裃着用で出頭せよとあつた。書生あがりの英語の先生もとより裃の持合はない。と云つて明日に迫つてゐることなので、宿屋の主人に計つたところ、丁度宿に義太夫語がゐるからその裃を借りて行かれたらよからうといふので、それに從つたが、その裃は黑天鵞絨で金で紋を刺繍したものであつたが、それを憶面もなく着用して出頭したなどは滑稽である。縣廳では縣令が辭令書を芝居でするやうに半ば懷中から出してゐるといふ有樣で御上使そつくりであるのに、首藤氏も流石に夢心地であつたといふ。

* * * * * *

勝海舟翁が僅かに百三十噸ばかりの船で西洋まで出かけ、それが無事に日本に戻つたと云ふが、今思へばこんな船は日本の近海を渡る漁業の船位のものだ。それを以つて大膽にも、西洋まで行つて歸り得たなどは如何にも奇蹟であるが、また大膽不敵とも云はねばならぬ。むしろこれは僥倖といふべきで、西洋人をして之を評せしめたならば實に無謀と云ふべきであらう。

八

此處に一つ面白い話がある。かつて明治の初年住友家が別子の銅山に外人を雇人れたことがある。それはラロックといふ佛人で、これが神戸に來てゐた。此人が鑛山のことに精しいといふので、これを雇入れることに決したが、さて四國の伊豫まで行くのは勿論海を渡らねばならないが、此外人は和船は危險であると云ふてどうしても乘ることを承知しないので、住友家は之れには當惑した。當時は住友家の事業も振はない時分で、汽船を買ふ資金も無かつたが、已むなく無理算段をやつて或外人の持つてゐた小蒸氣船を一萬六千圓で買上げて、やつと此の技師を赴任せしめたといふが、これには困つたと當時住友家の總理番頭であつた廣瀨宰平氏がその自傳に語つてゐる。

九

明治十三四年頃のことであつたと思ふ。和蘭文明の輸入に大功のあつた、大槻磐水翁の歿後五十年にあたるといふので、その頃八十に近かつた磐溪翁が追悼の會を開催した。その時の趣向が面白いものであつた。先づ客として招いた人は一度蘭語の字典を手にしたことがあるものに限られた。それに合格の人は五十人かあつて、それが皆な當時洋學の耆宿とも云ふべき大家であつた。箕作麟祥や西周や西村茂樹や中村敬直や福澤諭吉や神田孝平などと云ふ歷々が悉く網羅された。日本人の外にはニコライやシーボルト(二世)などいふ人までも加はつた。シーボルトは差支で來なかつたがニコライは臨席して演說した。その斡旋役が福澤諭吉、岸田吟香などで、會場はすべて西洋式の裝飾をほどこし、洋式の飲食物を供し、

餘興としては陸軍の軍樂隊を招いて奏樂をやつた。陸軍の軍樂隊はその頃までは民間の依頼に應ずる事はなかつたのであるが丁度この會を開く時から、民間の聘に應じ得ることになつて、これが其の第一回であつた。萬端の趣向がハイカラであつた上に、岸田吟香は宴會なかばに西洋の例に倣つて盆を會衆に持ち回つて樂人にやる祝儀としての即座の寄附を募つたなども今日以上のハイカラであつた。

その時ニコライが立つて演說をした。ニコライは、その會より十五年も遡つた幕末に始めて日本へ來た頃のことを語つた。初めて來た當時は、日本には如何にも不安の空氣が漂ふてゐて、外出しても薄暗いやうな氣がして自由に呼吸も出來ず、氣づまりのするのを感じてゐたが、それが次第に日本の開けると共に呼吸をして一向氣づまりを感じない、如何にも愉快な天地になつたといふ感想を述べ、これも畢竟磐水先生の如き文明の學者が非常に努力された其の結果が今日に現はれたのだといふ祝辭を述べた。この祝辭は簡單ながら文化の推移をよく表はしてゐるやうに思ふ。

一〇

なほまた少しく遡つて京濱間に鐵道の敷かれた時のことに及ぶのだが、その開通式には天皇陛下の臨幸があつた。その臨幸に就て宮內省では鹵簿に就て工夫を凝らし、幸ひその前英國から馬車が獻上になつてゐるからこの機會に召されるのがよからうといふことになつた。然し馬車はまだ初ものので、御者もないので困つたが、兎に角馬の名人をその任に當てるがよからうといふことになつて、馬の名人某を以つて御者とした。然し御者で羽織袴も具合が惡いが、と云つて何ういふ服を着けてよいかもわからなかつた。然るに誰やらが御者の着るべき服を探し得たと云ふのを見ると、胸邊左右に肋骨形の羅紗で裝飾のある服で、なるほど圖などに見る御者の服裝に似よつてゐるといふて、それを着せて御者臺に座せしめたが、心ある外人は之れを見て祕かに笑つたのも無理はなかつた。此服は西洋人の寢卷であつた。それがヲークションに出

てゐたのを購つたと知れて、皆々大笑ひであつたといふが、陛下も後に待從よりこれを聞召され、ひどく興に入らせられ後年まで時々此の事を御追懷あつて御笑ひなすつたと承る。

また御者になつた人の語つたところによると、あの時ほど困つた事はない。馬を扱ふことは知つてゐるが車につながつてゐる馬を扱ふことは初めてである。さしてうしろには玉體、前には獸といふ其の中間に挾つてゐる自分は全く閉口して滿身汗を流した。然し僥倖にも何等蹉跌もなく濟んだのは全く天祐であつたと語つたといふが、さもありさうなことだ。

一一

千葉縣下銚子の犬吠岬に燈臺が設けられてゐる。卒然考へると、日本も早くから適當の地形に燈臺を置いたものだと思ふかも知れないが、實は日本が考へた自發的のものではなく、外人に對する謝罪の意味で建てられた云はゞ不名譽の紀念碑のやうなものである。大隈侯が參議時代に、此の燈臺が出來上つて巡視された。その時には外人も同船して隨行したが、外人は讃岐の毘比羅、伊勢大廟を拜したいと大隈參議に請ふた。毘比羅は兎も角も大廟は當時外人の參拜を許さなかつたので、これには大隈侯もちよつと考へられた。大廟にはおごそかの規定があるので、大隈參議は外人に向つて君等に我國の最敬禮が出來るか、それは跪いて拜をするのであると云はれた。外人は稽古をするから、是非と頼むので、それならばと破格に伴はれた。その時跪くことに慣れない外人は拜をする時に皆な後ろに仆れたのでおかしかつたと大隈侯は語られた。

此頃廢娼令が出て間もない時であつた。伊勢にはそれまで遊女の踊る伊勢音頭があり、それが呼び物となつてゐた。外人は之れを見たいと云ふので大隈參議は或る樓へ伴はれたが、最早廢娼令のもとにさういふ家には娼妓が置かれてゐなかつた。ところへ縣令みづからこれらの人たちを案內して行つたので、廢娼令を布いてゐながら斯樣な踊を見たいと云ふのは怪しからんと、娼樓の主婦が縣令に喰つてかつつたと云ふ珍談もある。

一二

以上の如き話柄を考へおこせばいろいろ思ひ出されるが、玆に少しく文學上のことに涉つて語つて見よう。明治の初年

は新らしきを競ふと云ふ風があつて、意外な人が意外の事をやつてゐる。横山由清や黒川眞頼などいふ人は何れも國學の大家であつたが、前者によつてロビンソン・クルーソーが譯されたり、後者に據つて羅馬字の單語の本などが出版されてゐる。亦漢學と西洋學兼備の中村敬宇翁はスマイルスの自助論を反譯した。これは前二書とは違つて非常に流布し、今でも原書は諸學校の教科書になつてゐる。必竟反譯のお蔭であるとも云へやう。スマイルスの此書は西洋ではそれほど重く用ひられてもゐないのに長く日本に珍重されてゐるのを西洋人が不思議に思つてゐるといふが、全く譯者の人格と文章とが重からしめたのである。此の西國立志篇の或部分は芝居にまで仕込まれ、上方筋では舞臺に上ぼしたこともあつて、其脚本は繪を挿み三册ほど出版されてゐる。此書が文學上ばかりでなく、倫理上にも相當の力のあつたことが認められる。

此外當時大いに世に行はれた反譯書を數へたてると種々ある。内田の「輿地誌略」だの、加藤弘之の飜譯にかかるブルンチリーの「國法汎論」だの或はモンテスキユーの原著「萬法精理」だの、中江兆民の「美學」などいふものは皆な廣く讀まれた。これらの書は、それぞれの原理を說いたといふやうなもので、當時世界に流布されてゐた最も名高い著述が比較的よく飜譯されて世に表れた。而もそれが或る知識階級の間に大いに讀まれたのである。就中日本に於て一時しきりに歡迎を受けたものはハバート・スペンサーの「進化論」と「社會學」とであつた。一體進化論といふものが、日本に非常に興味を以て迎へられたのであつたが、就中スペンサーの進化論に關する書が最も盛に讀まれたものである。著者のスペンサー自身でも、日本のやうな國に大得意が出來たといふことは不思議であつたと云はれた位で、スペンサーでなければ夜が明けない時代もあつた。

その後、歐化主義が盛に行はれ、當時の外務省の附屬であつた鹿鳴館、(卽ち今の華族會館)に、外人と邦人とが携へて踊つたりはねたりして懇親の關係を結ぶことに馳せた頃、或る夜會に假裝舞蹈會が催され、時の大臣後藤、井上、西鄕(從道)なんどいふ人たちが、みな種々な、思ひもよらぬ人物に假裝したりして、外人と交はり、盛に西洋の眞似をやつた。

その頃からだんだん外人の内地雜居といふやうなことも考へねばならぬ樣になつてきたのであつたが、しかし一方に於ては、一體外人を日本へ連れてきて雜居し、且つ雜婚をするといふ樣になるならば、その結果は果して如何なるものであ

らうかといふことが議論された。而してこれを斷定するものは、進化論者のスペンサーに訊すのが最上の方法であるといふことになつて、時の當局者が内々スペンサーに尋ねたことがある。ス氏は徹頭徹尾進化論から斷定を下す人であるので、雜居はよくあるまいと答へたのであつた。進化の原理からいふと、優等の國民と文化のおくれた生活程度の低い國民との混合は、優等の國民の血が勝つて、その血の壓倒を受けるといふ卒直な答を受けたのである。歐洲の文化に心醉した當局者が少しくこれには驚き、歐化主義には二の足を踏むやうになつて來た。これに見ても如何にスペンサーが我國に尊敬を受け、その學說が朝野を風靡してゐたかがわかる。

一三

その當時の日本に於ける新しい文學といふやうなものは、今から見れば甚だ幼稚なものであつた。西洋の小說などが追譯されて世間に現はれたが、第一小說といふものに對しての日本の識者の考が當を得てをらなかつた。日本で小說といへば、德川期の末路までは一の玩弄物で、今日尊敬される如くに、藝術品など云はれるとは思ひもよらなかつた。今の坪内逍遙氏が大學の文科を卒業して文學士といふので文壇に立ちいろいろな小說を書いたが、それに對して當時の時事新報(これは云ふまでもなく當時の文明の隊長福澤先生の率ゐてゐた機關新聞であつた)が、如何にこの坪内文學士の著作を評したかといふに、著作その物の出來榮を評するよりも、一體文學士ともいはれる者が、小說に指を染めるとは如何にもその意を得ぬ。斯の如きは學者の品位を傷けるものだといふて盛に攻擊を加へたことがあつた。文學といふものが理解されてゐなかつたことがわかる。

當時日本第一の新聞といはれた東京日々新聞は、世界の文明に通じてゐる福地源一郎、岸田吟香兩氏の主宰の下に出版したものであつたが、最初の頃は小說を載せるといふ樣なことはなかつた。勿論どの新聞もその創刊の頃は小說などを載

せる餘地などはなかつた時分でもあつたし、またこの日々新聞はよほど進んだものであつたわけであるが、その發達してゐた東京日々すら小說を載せなかつた。何故かといふに福地氏は、一體新聞は生きた事實を報告するので、そんな架空の娯樂に屬する閑文字を載せるべきものではないと云つたが、何ぞはからん、その福地先生は晩年にいたつては自から小說家となり、脚本家ともなつて名聲を馳せた人であつたのに初めの頃は斯樣な狀態であつた。畢竟初めは小說を藝術品と見なかつたのであらう。

當時、戲作者といふものがいくらか幅を利かしてゐたのである。例へば假名垣魯文といふ人は、古い脈をひいた最後の戲作者ともいふべき人であるが、戲作者となつて世に立つためには一度はこの人の門をくぐられねばならなかつたのである。卽ち師弟の關係を結んで、魯の字か文の字を頂戴してそれを名につければ文壇に立てゐといつた風な習慣が存在してゐた。そんな風であるから、小說といふものが重んぜられなかつたのも無理はない。

一面には原書の小說が讀まれ、その道に於て達人といふやうな人も可なりにあつた。例へば金子堅太郎氏の如きは、頗る此道の達人であり、また早稻田大學總長高田早苗氏の如きも早くより西洋の小說に指を染めた。寧ろ坪內逍遙氏よりも早かつた位であり、此外磯野德三郎氏だの、自分とは同窓であつた丹乙馬(英語に於ては天才であつたが、不幸夭折した)などは非常に西洋の小說を讀むに達者であつた。

又此頃漢字の素養のある人によつて小說が飜譯され或は飜案せられて世上に現れた。末廣鐵腸の「雪中梅」とか柴四郎の「佳人の奇遇」矢野文雄の「經國美談」といふやうなものが續々出てきた。そこで一概に小說を排斥することも出來ず、玆に文學價値が追々と認められるやうになつた。

かやうに小說を藝術品と認むるやうになつたに就いて、此處に初めて玩弄物と同樣に見られてゐたものが相當の價値のあるものと見做されるやうになつた。

當時、古い小說類のうちから、四大奇書を選んで新聞紙に標出したことがある。それは馬琴の八犬傳、一九の膝栗毛、種彥の田舍源氏、春水の梅曆であつた。この外に西鶴もあり近松もあり芭蕉もあるけれども、兎に角玩弄物扱ひとなつてゐたものを大奇書と考へるまでに至つたのは一進步であつた。

一四

文學上の話の序に少しく明治初年の教育上のことに觸れて見たいと思ふ。何しろ勅語に「廣く知識を世界に求む」とあるに基き、維新の草創は何も彼も外國より求めた。其の爲にあらゆる方面に外國人を傭ひ入れた。例へば學校に就いていふと帝大の如きは何十人といふ外人が來てゐて、私立でも外人の聘せられてゐない所の無かつた位で、隨つて英語を學ぶ學校が盛んに各所に起つた。外國語學校の如きは云ふまでもなく各國語を敎へたものであるから各國の外人が聘せられた。その他、政府のいろいろの事業について、顧問とか技師とかいふ格で聘せられたものは各部に甚だ多かつた。

これら多くの外人のうち、何れの國人が最も多かつたかと云へば、勿論英、米、これに次ぐものが佛で、それに次いで獨、伊、などで、各々の專門によつて來朝したのであつた。

日本の文明は、そこに線を劃して區分することが出來るならば、明治に入つて外人の感化を受けたこの時代を以て劃すべきであらう。而もそれは殊に、他國人よりも多くの人々の來朝した英米に負ふところが多いのである。

當時の敎育制度は今日のやうに劃一制でなかつた。隨つて學校は其性質により思ひ思ひのことをやり甚だ自由であつた。それ故學校には特徵があつた。例へば官立の學校にしたところで帝國大學はおのづから帝國大學の特色があり、工部省で設けた工部大學は、おのづからそこに工科大學としての特色があつた。また司法省が設けた法律學校も、帝國大學の法科とは異なる所があつた。その他北海道の農學校も亦一特色を持つてゐた。それだからそれぞれの學校より生れた人物にもおのづから特徵があつて、現今に於けるが如く、何處から出た學者も似たり依つたりと云ふごときものでなかつたのである。その是非の論は且らく措き兎に角當時と現今とは大いに相違があつた。

當時學校は正則を主とした。隨分極端に外國の制度を採り何も彼も外國に倣つて、宛ながら外國の學校を日本へ移して來

たやうの趣があつた。無論今日の如く國語漢文などで多くの時間を取るやうなことはなく、中學程度の學校でも、教師は外國人が多數を占めた。日本人の教師はほんの補助としてゐたに過ぎなかつた。また外人の教授振も彼等が本國に於て本國人に教へると少しも變はることがなかつた。故に中學程度の學生も教室では日本語は許されなかつた。よしんば許されたとしても外人相手に日本語を使つても解らず、曲りなりにも洋語を使はねばならなかつた。

高等學校に相當する大學豫備門あたりには多くの外國教師の外に日本人の教師も居つたが、それらも教室では洋語で教へた。從つて生徒も洋語で應答をせねばならなかつた。そんな譯から外國語は今日よりも幾倍も進んでゐた。

中學時代から高等學校に相當する豫備門に於て、飽くまで外國語を叩きこんで、大學に入るのであるから、その頃の大學の卒業生は、今のと較べて外國語の造詣に於て甚しい相違のあるのも故あるかなだ。當時は何んでも彼でも外國に摸倣した。其の摸倣のため、弊の生じたこともあつたに相違ないが、教育制度の外國摸倣に、大なる效果を收めたものは蓋し外語の熟達であつて、文化草創の場合、これ丈は後年よりも誇るに足るものがあつたと云ふてもよからう。

一五

學校の話に關聯して、少しく當時の外國の教師のことにも及んで見たい。自分が教を受けた外人だけでも記憶にあるものは、十數人もあるが、それらの人々を記憶から呼び起して見るのに、忘れ難い外國教師が三四人ある。大學文科の教授として英文學を教へた人にホートンといふ人があつた。英國人で品格のよい相貌の人で、何でも貴族の系統だとか云ふたが如何にも溫厚な紳士であつた。この人が英文學の「クラシック」を集めた文集や、シエクスピヤの作を講じたのである。氏は頗る眞面目な人で、なかなか教授振も懇切で、その態度は常に嚴肅莊重で笑ふことも怒ることもなかつたので、學生は深く此人に尊敬を拂つてゐたものである。

この溫厚なる教師に對して吾々學生が無遠慮を極めたことを思ふと、氣の毒だつたと思ふこともある。笑話の一二をあ

げると、教はつてゐる文集のうちにエドマンド・スペンサーの結婚の詩があつた。その中に閨房に入る一段が、原書には全文が載つてあるけれども教科書にはそのところが省いてある。そこで學生等は圖書室に入つて省かれてゐる處を調べておいて、先生にこの所はどんなことがあるのだと質すと、先生頗る眞面目に "You may guess" と云つて答を避けた。先生は微笑も湛へないので學生連は二の句が次げなかつた。

いまひとつこの先生に就いてのエピソートがある。この當時大學には實地演習といふものがあつた。土木に就いて云へば橋を見に行つたり、植物學の學生ならば草の採集に出かけるといふことがあり、法律では實地の訴訟傍聽に出かける樣のことがあつた。然し文科に於ては、實地演習のため、外へ出る樣な事が全く無かつた。ところが或る時橫濱に外人が沙翁劇を演ずると云ふを聞いたのでホートン先生に、平生講釋を承たまはつてゐる劇の實地を見たいから橫濱へやつて貰らひたいと談判に及んだ。この時は先生も贊成され、早速總長に交渉されたが、加藤弘之總長はそれは成らぬといふて拒まれたので、ホートン先生は氣の毒さうに學生等に申譯をされた。これはあながち學生の惡戲ではなかつたが、先生には氣の毒であつた。

* * * * * * * * *

その他になほエドワルト、モールスといふ動物學者があつた。動物學などは受けのよくない學科であつたが、このモールス先生は非常な人氣を博した。といふのはその人が如何にも面白い人で、日本に理解があり、親しみやすい性格の人で、講義が面白く、それがは半ば言葉で半ば繪であつた。先生の黑板に描く繪は實に妙を得たもので、五色のチョークで黑板に說明がてらにかく禽蟲は瞬く間に出來るが、先生はいつも左右の兩手を同時に使つて蜻蛉の羽翅を描いたりして、如何にもそれが達者で黑板の圖を消すのが惜しいと思はれるやうであつた。動物學のやうなものに興味をもたせたのは全くこの人のお蔭である。氏は日本に深く趣味をもち、日本の貝塚を掘つて考證を加へたり、陶器を研究したり、謠曲を習つたりした。

なほ爰に逸す可らざるはフエノロサ先生である。氏は米國の大學を卒へると直ぐに日本に來たのであるが、この人の頭

腦は如何にも明晰で、この人に一度教はると、深い印象をのこした。この人は大學に多く重要な課目を擔當し、哲學、社會學、經濟學、政治學の如きは皆な氏の擔任であつた。その教授法は本を讀んだり讀ませたりするのではなく、講義の草稿を自から作つてそれを筆記させたもので、それが簡にして要を得たから學生の頭腦には深く入つた。氏は日本在留中美術に就いて深く研究を重ね日本美術を大いに發揮したことは誰も知る通りである。

外國教師のことを思ひ起すとまだいろいろあるが、大體に於て當時日本に傭はれて來た學者は立派な人が多かつた。併し多少の例外もあつて、隨分こまらせた外人もあつた。自分の鄕國新潟學校へ聘されたキングといふ外人のごときは其一人である。此人の經歷は忘れたが、極めて人格の低い人で學生からも輕蔑を以つて迎へられた。ある時此人に就て一樁事が起つた。ある朝キングの云ふには、昨夜自分の寢所を襲ふて自分を殺害せんとしたものがあると言ひ出したので、大騷ぎとなつた。縣廳では大いに狼狽して、二日間新潟市民に禁足を命じて嚴重に調べた。ところがその結果、キング自身の芝居で償金を得んための手段であつたことがわかり、キングを解傭することに至つた。

一六

爰に亦ダンといふ米人を石油事業に傭ひ入れて大失敗をやつた一話がある。之れを傭ひ入れた人は、石油史に名のある石坂周造といふ人であつた。この人は幕末の慷慨家で、首を切られるところを逃げてやつとのことで命を完うした人だが、この人が明治の初年に相當の資本を集めて、信州に石油の會社を設けた。そこで誰を技師に賴んだかといふと、函館にゐた米人ダンといふを技師長に傭つた。ダンは多少の學問はあつたが、石油にかけては全くの素人で、米人だから多少石油のことは知つてはゐたらうが、無論採掘の法などは知らなかつた。それを技師長に賴むのも亂暴だが賴まれるものも亦亂暴である。而も一年一萬圓といふ、當時に於ては莫大な給料を以て三年間の契約であつた。然し實際に於て少しも成績があがらなかつた。それ故雇を解かうとすると、契約があるから三年分の給料を出せといふ。一年も經過せず、成績もあがらぬのに三ヶ年分の給料を出せとは不當であると、遂に裁判沙汰になつたが、その訴訟は石坂の敗訴に歸した。今から見れば當時外人に對する法權が弱かつた爲、外人に勝を與へたのであるが、併し會社に於ても弱點があつたといふ譯は、この會社に參加した者は多くは公卿華族などであつて、其の家扶や家令が勝手に共同した氣味もあるので、訴訟沙汰となつては、主人に對して面目がないと云ふて、家扶が切腹した者すらあつた。コンナ内方の事情があるので或る筋から三萬圓足らずの金を出してヤット治めたことがあるが、ダンは後に公使になつて來た人に不似合に人格はあまり良くなかつた樣である。

此頃外人の人選を誤つて意外の失敗をした例は以上に止まらないが、當時の事情は何も彼も外人に依賴し、外人萬能主義で、外人は何んでも知つてゐるものと妄信した爲めに間違も起つたのである。外國の宣教師から兵法を教はつたりした時代もあるから、思へば無理もないことが、今から見ると實に滑稽千萬である。

日本新文明の基礎

子爵　金子堅太郎

一

明治初年より今日にいたる五十七年間に於ける日本の文明の進歩といふことに思ひをいたすならば、先づ思ひおこすのはかの明治二十三年の憲法發布と帝國議會開設である。これは實に世界の政治家、學者、のみならず多くの海外諸國民を驚かすところのものとなつた。西洋諸國は、日本に於て憲法の發布されるなどといふことは不思議であるとまでに思つてゐた。されば議會の如きも、アングロ・サクソン人によつて初めて成立せられ、可能とされるところのもので、その生活又は傳統を異にする日本人の間に之が行はるべきものとは彼等の多くは思はなかつた。實際、それより以前、トルコはこれを實行せんとして失敗に歸したことがあつた。これなどから見ても、これがアジヤ民族の間に行はるべきものとは彼等には思へなかつたのである。自分が明治二十二年、歐米諸國を廻つた時に實際聞いた批評は、多くはかくの如きものであつた。然し、自分は日本が此度憲法を行ふやうになつたまでの經過を、日本の歴史に基いて說いたところ、「左樣か」とは云つたが、腹の中では、「何がアジヤ民族の、而も一小島國たる日本にアングロ・サクソン人が生んだものが眞似られるものか」と笑つてゐたやうである。

然るに憲法發布を見、帝國議會の開設となり、更に日清戰爭が開かれるや日本は連戰連勝の勢を示すにいたつた。これは實に外國が想像だにしなかつた日本の世界的雄飛の第一歩であつた。卽ち歐米の進んだ文物を日本はよく容れることが

出來たといふことである。かくの如く歐米の文物をよく消化してこれを巧に利用し、而してかの强大な支那を征服したといふことを聞いた歐米人等は、全く驚歎の聲を發したのであつた。なほまたまた日露の戰爭となり、再度强大國を征服したのであつた。また近くはかの歐洲大戰に參加して、このアジヤの一小國が、如何に歐米の文明を消化し、これを利用するかといふことを玆に實證するに至つた時、歐米人は驚くのみかむしろ吾等に恐怖を感じたのであつた。

二

數十年の間に於ける吾等のかくの如き發達は、實に世界無比の出來事であつた。歐米人が三百年の年月を積んで而して得た彼等の文明を、僅々五十年間に輸入して日本の文明を築いたといふことで、歐米人等は日本は誠に恐しい國であると感ずるやうになつた。

日本が、實際、歐米の文明に基いて僅かな間に非常な進歩を示したといふことは、何人も否むことは出來ない。卽ち歐米の科學を取り入れ、國を立憲政體とし、教育、軍事等も歐米に倣ひ、商工業の設備まで彼等の教を俟つたことは云ふまでもない。かくの如くにして歐米よりの新文明に基き新日本の文明を築くにいたつたといふことは、全く歐米先進諸國の援助に基いたもので、これは吾等日本國民として忘れてはならない筈である。例へば陸海軍の顧問として來た者、當時の教育界或は憲法、國法、諸法典の編纂に寄與した者、或はまた商工業の計畫にあづかつた者、其他精神界に於ては宣教師等の如き、卽ち各般の吾が新文明の建設にあづかつた者は歐米人であつた。これは吾等の自から深く銘して常に感謝してゐるところである。

三

外人に云はしむれば、日本の今日あるは、實に歐米の文明が輸入された賜物であり、これはペルリ來朝以後海外の新文

明に據る急激なる進歩であると見るのであるが、然し歐米の文明といふ種子が蒔かれたとしても、その土地が瘦地なれば芽ぐみ、花咲き、實るといふことは困難でなければならない。否、不可能でなくばなるまい。良き種子は、肥えたる地に根をおろして初めてよき實を結ぶのである。さればたとへ歐洲文明といふものが良き種子であつたとしても、これが蒔かれた土地が瘦地ならば花咲き實るといふことはなかつたであらう。歐米人等は直ちに文明の種子を蒔いて與へたといふことを云ふのであるが、然し吾等は、種子が與へられたことを忘れぬと同時に、その土地がその種子を充分に實らせるだけの肥地であつたといふことも忘れてはならぬ筈である。

吾が建國より二千五百年、また支那文明の渡來より一千五百年――その間に於て吾等みづからの文明を築きつゝあると共に、支那文明の渡來よりはその齟齬と消化に年月を積み、而して茲に立派な日本の國民といふものを作つてゐたのである。既に足利の末期に於て、日本に來た歐洲人が、歸國後、その國王に、日本といふ國は立派な國であると感心した旨を上奏したことがあるといふ位である。

織田、豐臣、德川にかけての二百七十年といふ長い間、日本は卽ち封建時代として、近代文明の新日本に到達する基礎を固めたのであつた。卽ち國民を强大にすること、忠君愛國の魂を基礎づけたこと等は、實に二千五百年以來の日本國民の精神をいやが上にも鍊磨したのであつた。而してこの間に雄大なる人種としての日本を築いたのであつた。

一方から見れば、この間に世界各國との交通が閉されてゐたといふ不利があつた如くであるが、然しこれはむしろ日本獨自の基礎を强固ならしむるに好適な時代であつたとも云へるのである。而して內的に、歐洲諸國に劣らざる文明を築いてゐたのであつた。この點に於て日本の封建時代といふものは、他の諸國にあつた封建時代とは、かなり性質を異にしてゐるものである。實に日本の今日の文明は、二千五百年來の歷史に基いてゐると同時に、この封建時代に一層、新しき外國文明を入れてそれを消化する丈けの力を充分に養つてゐたのであつた。

かくの如き基礎を有する日本が一朝開港すれば、そこに新しき歐洲文明といふものが入り來つて、たちまちそれが花となり實となつたといふことは決して不思議ではなかつたのである。一國民或は一民族の文明といふものは、一朝にして起るものに非ざるは歷史に徵しても明かである。歐洲の文明も一朝に生れたのに非ざること勿論であるが、これが異邦に渡つてその地方、或はその民族の新文明となるにはこの基礎がなければならない。實に日本も、只に歐米の文明を目前追ふてのみゐるのではないこと勿論である。卽ち二千五百年來に蓄積され、鍊磨された國民精神は、一の導火線を得て茲に眞の活躍をなすにいたつたのである。

四

多くの外人等は、動もすれば、日本が今日にいたるその近因たる、「歐洲新文明の輸入」といふことのみを見て、日本の文明は歐洲の文明が新に築いたものであるかの如くに、皮相の見をなすものも少くないやうであるが、これは歐洲が今日の文明の域に達するに長い年代を重ねて來た如くに、日本の今日に達するまでには、矢張り國民精神の建設と文明に達する習練とが積まれてゐたのであつた。ただ歐洲の文明は、彼等みづからの、逐次の所產の綜合であるのに對して、日本の文明は、歐洲のそれによつて、暗示され、誘導されたといふ點に於て異るが、その基礎たる精神の建設時代といふものは彼等と同樣なる長い年時に於て多くの犧牲や習練を經て來たのであつた。蓋し、日本の今日の文明に達する丈けの資格と技倆は既に充分に培はれてゐたのである。

時あたかも、かくの如くして充分なる基礎の備へられた時、新文明――而も人類の當然到達する機運に接觸したのであるから、茲に日本の新文明が一時に築かれるに至つたのであるが、これは上述の如き歷史に基いて見るならば當然なことと云はなければならない。

かかる意味よりして日本は新舊東西兩洋の文明を齟齬し、調和してゐる世界唯一の國と云ふことが出來るのである。これに對する多くの外人の皮相の見は、ただ歐洲文明が移されて以來の變遷に基いて、歐米人が數百年の苦惱の後に達した文明に、日本人は五十年を以て達したと驚き、或はこれを怖れるといふが如きであるが、これは彼等が日本の歴史を知らざるが故の結論でなくばならない。加之、邦人間に於ても、動もすれば、日本の今日の文明は、全く歐洲文明によつてのみ達し得られたとなすが如き者のあるのは遺憾に思ふところである。

かくの如き歴史に基いて達したる今日の日本の文明は、決して歐米のそれに劣るべきものではない筈である。むしろ世界の總ての文明を備へてゐる國民として、今日の文明國間に、吾が日本の右に出づるものはないのである。而してかくの如き基礎に立つた日本の文明は、將來の宇代の文明に貢獻するところのものたることを信じてやまぬのである。(談)

新日本建設の基礎を固められし福澤先生

鎌田榮吉

二百五十年といふ長い間の鎖國の夢は、嘉永年間にいたつて初て醒され、かなりの狼狽を演じたことは人のよく知る所である。斯の如くにして舊來の鎖國主義の非を悟り、日本は茲に新文明を起さねばならぬとに氣附いたのであつた。即ち海外よりの新文明に接して、舊來の風習も改むべきは改め、又海外の新しき風習文物たりとも採るべきは採つて、而して舊來の日本を新文明の域に立ち至らしむる爲には、多くの先輩諸氏の力があづかつて大なるものであつたとは云ふ迄もない。

かくの如く、日本の文明史上に一新機軸を劃するの時、一方には東西兩洋の文明を結びつけることに努め、また他方に

於ては國家の革新の期に當つてその安寧と隆盛との爲に盡した人も少くなかつたが、實に福澤諭吉先生はさうした時代の建設者のうちにあつて殊に功の大きかつた一人である。かうした方面に於ける先生の事業は、多くの書物の刊行を以てして、新しき思想を普及せしめると共に、一方に於ては國家の安寧を保持せしめることに努められたことである。實に先生の著した書物といふものは著譯大小を合して、六十有餘種に及んでゐる。これは總て先生が當時の一般に對して新文明を說いた檄であり、また舊來の長所を亂さずして新文明の境涯を生ましめんとする指導者の言であつた。先生はこの舊日本の境涯より出でて新日本の建設といふことに非常な力を注がれたのである。そのためには生命を危くしたこともあつた位であつたが、かくまでも眞摯に、而も畢生の努力を以て、即ち新日本の建設につとめられたのであつた。

かかる機に當つて先生の着眼する所が鋭いものであつたこと、また卓拔なるものであつたことは人の許してゐるところである。實に先生の說かれたところのものは、當時に於て、その時代を導き、また固めてゆくものとしなければならないところのものであつた。或はこの時に當つて、先生の卓拔なる指導がなかつたならば、當時の急激なる變遷に遭遇した時代として、社會組織の上に、或はまた思想の上に、危險か、混亂かが現れたかも知れなかつた。

先生の思想を、よく社會に貫徹することが出來たのは、先生の書く文章が平易であつたといふことである。先生の文章にして解し得ぬといふところはないのである。

然し先生は決して漢學に疎い人ではなかつた。漢學者を父とし、先生もまた漢學に造詣深く、寧ろ學者としては漢學の方面に於て立たるべき人であつた。然し、先生の卓見は、社會を動かす力が何れに存するかを知つてをられた。即ちその力となるところの大きなものは士族であり、平民であり、婦女子であつた。然し大多數の士族は漢學に通ずる者ではなかつた。況や平民、婦女子に於ておやである。實に社會一般の思想といふものは、かかる多くの人士の間に釀されるものであるといふことを知られた先生は、先づこれらの一般の間に文明の思想といふものを抱かせようとされたのであつた。即

ちその爲には文章の平易といふことが第一の要素であり、主眼であつた。

當時に於ては難解なる文章を書くことがその博識を示すことの如くに考へられてゐたのであつた。一例を以てすれば、また、といふ場合に於ても見、視、觀などがあるが、これを使ひ分けるのが卽ち漢學者の得意とする所なのであつた。然し先生は、また、といふ場合にはいつも「又」を用ゐ、みる、といふ場合にはいつも「見」を用ゐて平易にその內容の理解出來ることに苦心されたのであつた。卽ち一般への普及を旨とするものとしては、かくあらねばならぬといふことに留意されたのであつた。

先生のかくの如き、新文明の普及と、新日本の建設に對する態度の指示とは、先生のたゆまぬ努力に依つて進められ、やがて文久より明治へと入つたのであつた。

その間に攘夷論者が橫濱を燒いたといふが如き事はあつたが、然し大勢に於て、王政維新、廢藩置縣、その他百般の改善といふことが大なる犧牲を拂はずに濟んだといふことはそれまでに、かかる機運を受け入れるまでの基礎が出來てゐねばならなかつた。その大きな基礎を固めることの出來たのは、實に先生の力があづかつて大なるものであつた。

先生の著書に依つて新しき思想、卽ち新文明の知識といふものが一般に植ゑ附けられてゐた。若しかくの如き、充分なる準備を與へられず、遽かに一般の生活が變化を來すといふやうなことであつたならば、或は國家の安寧を危くし、隆盛を阻むが如きに至つたかも知れなかつたのである。然し、さうした凶事に遭遇することなしに、新日本の境涯に順を追ふて入り得たことは實に先生がさうした時代に達する基礎を一般に前以て貫徹せしめ得たからである。卽ち今日の言を以てすれば、卓拔なる見識を平易に一般に理解せめして、先づ輿論を作つておいて、而して社會の改造へと步を運ばしめたのである。かくの如くして玆に日本の文明といふものを平和のうちに順當に築きあげることが出來たのである。この、先生の力たるや大なるものと云はざるを得ない。

鎖國の夢を見てゐた時分から、西洋文明を入れて生活を刷新したその間の經過といふものは、支那に於けるが如きとは異り、順序よく圓滑に運んで、その刷新の意をおだやかに達し得てゐるのである。かくの如くに時勢が運び得たといふことも、さうした變革の基礎を固めた先生の力がまた大いにあづかつてゐたものである。

まだ兵書か醫書かの外には洋學の範圍が出てゐなかつた頃、先生は緖形洪庵先生に從つて、當時まだ自由を得てゐなかつた、理科に關する研究を積まれたのであつた。これは先生の思想の根柢に科學を基礎づけたといふことである。實に當時、安政の頃などに、日本人は夢にも理科などといふことは考へてゐる者はなかつた。その頃にその研究を積まれ、やがてさうした根據から政治、經濟へとの研究に入られた。從つて先生の知識思想は、常に合理的な基礎に立つたもので、新しきを說きながらも不合理な突飛なことは決して云はれなかつた。時には冗談に、士農工商ではなしに、商工農士が正しい順だといふやうなむしろ誤れば生命にもかかはりさうな突飛なことも云はれたには云はれたが、然し、先生の說かんとするところは常に何人も首肯し得る、また首肯せしめられる理論であつた。これは一面に於て、かうした變革に際しても、一般が危險思想といふが如きものに走ることなく、而もなほ新しき路へと進んで行くことが出來たのは、時の指導者に既に順序よく理論を進めるといふ力があつたからである。從つて社會の變革、刷新も順當に行はれて行つたのであつた。この點に於て先生は時代に一步先だつた指導者であつた。例へて云へば提灯持は後に立つたり、一町も先に立つたりしては役に立たないのであるが、一步先に立つて道を示す時に初めて功があるのである。先生は實に、時代に一步先んじて道を示す時には灯をかざした功勞者の一人であつた。而のみならず、舊日本より新日本に移ることを、なめらかならしめた功勞者の一人でなければならない。而して先生がよく社會を導き得たのは、その卓拔なる見會と平易なる文章とであつた。

また當時に於ては、先生に對しては反對を主張した者も、後には服するに至つたのみならず、從はざるを得ぬのを發見するに至るのであつた。實に先生はこの時代に於ける大きな功勞者の一人でなければならない。（談）

往時の日本鑛業と工部大學の沿革

工學博士　石橋絢彦

往時の日本鑛業と日本の經濟界の一面

日本の工業は何といつても工部省の設置に依つて初て隆盛の機に向つたものであることは云ふまでもないが、然しこの機に到るまでの過程は、決して單純ではなかつた。一方、鑛業方面に就いて見ても、この工部省の設置以來はそこにかなりの變革を示してゐるがこれが、また日本の經濟界の變遷を語るものとして興味のある問題である。

幕府時代に於てはこの鑛山の事業といふものは幕府直轄のものが多かつたのである。然し幕府が困つてゐたのは銅の問題でこれが、和蘭支那にかなり持ち出されたのである。支那との通商條約に依て、規定は設けられてゐたが、それでも日本の銅の價が安いために盛に支那に出たのであつた。近藤某氏の著「通商一覽」にはこの支那に出される銅がどの位までに規定されてたたかが記されてあつたと思ふ。また當時、實際日本から支那に向けて出された銅はどの位の量であつたかは、太田南畝(蜀山人)の長崎日記のうちにあげられてゐた。

そんなわけから、銅を出すといふことには非常に苦心をして、銅會所といふところに集め、それから長崎へ廻すといふ順を經ねばならなかつた。

當時は銅を出すといふところはあまり多くはなかつたのである。幕府直轄の外にはほんの僅かなものであつたが、幕府直轄のものはすべて大官がこれを支配してゐたのである。太田南畝なども、その運送の方の係であつたのである。

ともかくも、そんなわけで、銅のことはかなりやかましかつたのである。然しまた一方金もなかなか古くからやかましかつた。信長前

後の時代では金の出るところとしては佐渡が一番で、上杉氏の領土内で掘り出されてゐたのである。それが秀吉時代になつてからはその管轄が米澤に移した。さうして盛に金を出したのであつたが、その金で法馬を三十六個(?)も造つて大阪城へ軍用金として藏しておいたといふことである。その金額は大したものである。

豐臣氏が亡びて家康の時代になつてから、また金の採取が盛になつて大久保石見守長安といふ人がその奉行をしてゐたが、この石見守といふのはもと甲州の能役者で、甲州金を掘ることをやつてゐたので、德川の世になつた時その採掘を提議したところ家康から用ゐられたのである。そんなわけで石見守といふのは士分でなかつたのをとりたてられ、大久保豐後守といふのがあつたので、その分家といふことにして貰つて、大久保石見守になつたわけであつた。而して一躍十二萬石といふ祿を得て、專ら採金に努めたのである。卽ち慶長年間に盛に金が出るにいたつたのである。

三浦安針が和蘭船の船長として、慶長元年の三月に來つて、大阪城で家康と會つたが、その後三四年してから和蘭人がちよいちよい日本へ來るやうになつた。その當時は和蘭はジャバを領してゐて、バタビヤをその主府としてゐた。而して寛永の初年頃からは、日本からもこのジャバに商に行くやうになつた。卽ち御朱印船なるものがそれである。

この頃は丁度日本で盛に金が出てゐた頃で、金一兩の相場は銀五十七八匁といふことであつた。然るにバタビヤに於ける相場といふものは九十二三匁といふことであつた。それだけの差があるのだから日本の金貨はどんどん海外に持つて行かれたのである。秀吉の時に造つた慶長小利が、今なら七八百圓の相場のものが、十兩だつたのだから盛に持ち出されたのであつた。新井白石は此時の金高を調べて「折たく柴の記」中に記してあつたが、非常に多額の金が海外へ出たのであつた。

後、五代將軍の世となり奢侈に耽り、從つて金がなくなつて來たといふことになつて、大阪城に藏してあつた法馬をとりよせることになつた。勿論そのときまでには多少使はれてゐたので、元の三十六個はなかつた。而してその金で金貨を造つたのだが、當時の奢侈にはそれでもなほ足りることは出來なかつた。そこで遂に混ぜものをした惡貨の製造といふことになつた。そんなことをしてひたすら奢侈に耽つてゐたのである。一方金の不足と惡貨の濫發によつて、物貨は昇つて行

くばかりであつた。一般人民はその爲に苦まねばならなかつた。

かういふ狀態にありながらも、當時の學者であつた荻生徂萊は、一向經濟學方面には注意を向けなかつた。五代將軍も自慢の學者であつたが、この兩名の學問といふものはたゞ文字の上のみの學問であつた。それ故に、經濟上の苦境がおそひ來つても、これに處する道は別に講ずるすべもなかつた。

次いで六代將軍の世となつたのであるが茲に於て悪貨といふものが、世を如何に害するかといふことを見ることが出來たのである。この學者は新井白石であつたが、白石は經濟に對しても相當の理解があつたので、かうした狀勢を何とかせねばならぬと思つてゐた。然し惜むべくは、いまだ實をあげぬうちに白石は他界せねばならなかつた。然し白石は、この悪貨制度を直さねばならぬといふ忠言を遺して行つた。

やがて七代將軍が八歳の幼い身を以て立つことになつた。この時の家老は眞鍋といふ人であつたが、これもまた元能役者であつたのがとりたてられた人であつたため學識もなく、茲にこの狀況を改めることも出來なかつた。七代將軍は幼にしてやがて他界され、八代將軍が紀州から入ることとなつた。

この八代將軍は政治にも經濟にも、また社會の事情にも通じてゐられたので、將軍となられるやいろいろの改善が行はれた。將軍によつて無名の者が拔擢された者も少くなかつた。またこの時曆が改正された。それまでは曆といふものは公卿が作製するのであつたが、この曆は極めて不信用のものであつて、日蝕があると曆には記されてゐるのに日蝕はなかつたり何とも記入されてない日に月蝕があつたりといふやうなわけで、とにかくいい加減なものであつた。

當時天文の助役をしてゐたのは成島道筑といふ僧であつたのが、學問があるといふのでとりたてられ、成島圖書守となり、文章も書いたといふことは、その曾孫成島司直の著「德川實記」のうちにも見えてゐる。

當時長崎で通辯をしてゐた者を用ゐ、これに天文を說かせて、正確な曆を造り、これを京都へ持つて行つた。しかし公卿等は、さうした曆が流布するやうになつては自分等の職が失はれるので、容易には採用されなかつた。

かくして八代將軍も歿せられ、九代將軍の世となつて年號も曆が改められたのを記念する意味から寶曆とつけられた。而してこの時の一大英斷は、諸大名に對して年貢の十分の一を二十ヶ年前借りをしたことである。かゝる例はそれ迄の日本の經濟學史にはない。而して勤儉を專にし、金貨の改鑄をして漸く五代將軍以來の悪貨幣を改め、同時に社會の狀態を改めたのであつた。後享保の年には大きな饑饉があつたが、その時にはこれに堪へるだけに時の經濟狀態は改められてゐたといふことである。かかる功にたづさはつた時の學者といふのは室鳩巢であつた。これはたしかに德川朝の中興であつた。

後、ロシアが日本を狙ふやうなこともあつたが、別に事もなく、樂翁公の出た時代として太平であつた。しかしまた悪貨が出るやうになつたけれども金は銀の六十匁といふ相場は依然として變らない。今日の貨幣制度もさうであるが、一定の相場をつけると何處までもその價を動かさぬのである。そんな爲に結局爲替相場の變動なども生ずるわけであるが、當時に於ても、この銀六十匁といふ相場はいつまでも變らなかつた。

さうしてゐるうちに、やがてペルリが浦賀へ來た嘉永五年となつた。而して米國の模樣に就いてみれば、金の相場は米のそれよりもづつと安いのである。卽ち銀四十匁餘で金一兩が買へるので、茲にもまた盛に金が海外へ出るやうになつた。然しそれは間もなく禁令によつて止められることにはなつたが、しかし私かに賣る者は少くはなかつた。高島嘉右衞門は金貨を賣つたといふことで入獄せねばならなかつた。その後に於てもやつぱり金の相場といふものは變はつてゐないのである。

現在でも日本の金貨は、金九、銀一であるが英のは金三、銅一の卽ち十八金といふのである。日本の金貨をかういふ標準に置くといふことはたしかに損である。經濟學者はかういふ點に一向留意してゐないやうであるが、これは經濟學上に大きな問題だと思ふ。

聞くところによれば萬國通貨といふものを造るといふことだが、それは良い事と思ふ。兎に角金の品位を各國共に一定せねばならぬ。一國內で不變の相場を附けてゐても對外的に見る時、外が變動すれば、國內のものは結局損になるわけである。卽ち爲替相場の變動で動くといふことは、實質上の損失である。經濟學者がこの點に就いて云のを聞かぬのは不思議である。

昔時に於ても金貨をバタビヤに持つて行かれるのには大いに困つてゐたが、その品位を直すといふことは氣がつかなかつた。

銅も和蘭や支那に持つて行かれ、殊に酷いのは足利時代に、銅を支那に送つて貨幣にしてゐたといふやうな時があつたといふことである。これは朝鮮の本に見出された。

ともかくも、かうして吾々は銅と金とに就いては往昔からにがい經驗を有つてゐるのである。而もそれはすべて對外的の問題である。然し多くの經濟學者等はこの點に就いてはあまり知るところが無いのか、無關心の樣なのが不審でならない。今茲に日本の昔日の鑛業といふことに就いて思ひおこすとともに、かういふ對外的のにがい經驗に基いた、日本の經濟問題といふことを考へたいと思ふのである。

日本工業界の基礎となれる工部大學の沿革

山尾庸三、志道聞多(後に井上馨)伊藤俊輔、遠藤謹助、野村彌吉(井上勝)、といふ五人が長州藩の村田清風といふ人の周旋のもとに外國へ行くことになつた。この手びきをしたのが英國一番館ヂャージン・マセサンといふ人であつた。それは文久年間のことであつた。

それから程ない頃のことであつた。長州では勅使の命とあつて、英、蘭、米、佛等の商船、軍艦が馬關を通る度毎に砲擊して了つた。勿論その勅使といふのは外國船を擊てとは書いてなかつたのであるが、然し擊つなといふ意味でもなかつたのであるが、長州ではこれを擊てといふ勅命だと解してしまつたのである。茲に大戰爭といふことになつて、その翌年は長州が擊ち返されたわけである。四ヶ國から擊ち拂はれて長州は敗戰せねばならなかつた。而して降服狀を出した。その砲擊には例の高杉晉作などが加つてゐたわけである。

この椿事が始つたのを外遊中にあつて聞いた、時井上、伊藤の兩氏は心配になつたので途中から引き返して來た。而して井上氏は長州に向つて降服狀を書かせることとし、やうやくこの亂を治めたのであつた。

五人のうち、後の三人が海外に殘つてゐたのだが、そのうち遠藤謹助は經濟學を、野村彌吉が鐵道を、また山尾庸三が造船といふそれぞれ專門の研究を積んで來たのであつた。而して三氏は明治三年に同時に歸つて來た。その時は丁度明治の維新に入らんとする時の、混亂たる戰爭も終り德川も王政維新に服したといふ時であつた。然し德川の江戸城も何等手がつけられてゐなかつたのであつたが、然し、燈臺だけは外國との條約があつたのでその建設をやつてゐた。それは神奈川縣知事でやつたのであつたが、この燈臺といふのは、前述、長州藩が他國よりの砲擊に敗れ、何うすることも出來なくなつたので、その始末方を政府へ賴んで、三百萬弗の償金も拂ふことになり、而して十三ヶ條の馬關條約も結んだのであるが、その時、外國船の通過の爲に、新潟、横濱、函館等、とにかく外海へ向つての十ヶ所に燈臺を設けるといふ附帶條約があつた爲であつた。

そこで當時日本にゐたアール・コックスに賴んで燈臺を建てる人をよこして貰ふやうにと云つた。當時は香港まで出れば外國への電報が通じたので、香港から電報を打つて、スコツトランドで有名な燈臺の技師スチブンソンといふ人に依賴した。そのスチブンソンが指名してよこした人が卽ちブラントンであつた。これが燈臺の出來る初めであつた。それ以前横須賀に燈臺を建てるといふ話はあつたが、外國との條約のもとに出來たのはこのブラントンの建てたのが初めであつた。

一方遠藤謹助氏が歸國するや、大阪に造幣局を建てた。卽ち氏は日本の造幣の祖である。茲に初めて日本に金貨制といふものが出來たのであつた。それまでは太政官紙幣で、卽ち上述の日本が銅、金の爲ににがい經驗を積んでゐた時代が、それ迄續いてゐた譯である。それまでは金六十匁であつて、金一匁は一錢六厘といふまるで商品にはならぬやうな相場であつた。まつたく當時の日本の貨幣制度といふものは亂雜であつた。これを遠藤氏は整理したのであつて、吾經濟界の功勞者の一人でなくばならぬ。

明治二三年頃に山尾氏が歸朝した。而して當時全く衰へてゐた鑛業の振興を建議するに至つた。これが政府に入れられ、

新に工部省といふものを起すこととなつた。

これより先、幕府時代に計畫されて、小栗上野介といふ人によつて、横濱造船所をつくるといふ設備のもとに、横濱製鐵所を建てようとした。又その頃、鍋島侯は長崎に造船所を建て、諸機械を外國より買つたのである。然るにやがて廢藩置縣となり鍋島侯はこれを自分で持ちこたへることが出來ず、政府に獻上といふことにして了つた。而してこれを兎に角石川島に一時置いたのである。然しこれに對しては政府も手を出すことも出來ず、民部省に於てもその爲に保存しておいたのである。二十四年の初、これをまとめて仕事を始めようとしたのが即ち山尾氏であつた。然しその爲には第一、人を養はねばならなかつた。そこで工學寮、燈臺寮、電信寮、鐵道寮、營繕寮、鑛山寮等、その他ともに十寮が設けられた。その工學寮が即ち後の工部大學であつた。而してこの工部大學へ長として來たのがヘンリー・ダイエルであつた。その第一期の書生として自分は在學したわけである。

また一方には、今まで全く忘れられてゐたかの如き感のあつた鑛山といふものが山尾氏によつて着手された。而も山尾氏の最も力を盡したのはこの鑛山で、その中でも釜石鑛山は殊に氏の力を注いだところであつた。それと同時にまた長崎造船に對しても氏は非常な力を注がれた。

栗本鋤雲といふ人はもと醫者であつたが、外國奉行をして函館にをり、常に外人に接してゐて、當時勘定奉行であつた小栗上野介とは親しくしてゐた間柄であつた。

栗本氏は條約のことで佛、露に行つたことがあるが、佛國で造船を約して歸つた。ウエルニーといふ外人はその時伴はれて來たのであつた。又佛國から來た燈臺の係の人があるが、それはチボシーと云ひ、品川、觀音崎、野島ケ崎の三燈臺は氏の建設したもので、日本で最初に灯のつけられた燈臺であつた。それは明治二年一月であつた。まだその頃にはブラントンの建てた燈臺は灯がつかなかつた。

釜石、佐渡に力を注いだ山尾氏の爲に政府は非常な費用を費した。この間は實に工部省が日本工業の基礎的準備につくした時代と云つてもよいのであつて、その間、非常な費用を要してもそれは償はれるところはほとんど無かつたと云つてよい位であつた。

鑛山に對する鐵道の敷設、また從來狸掘の穴であつたのを改めて充分の鑛道にするといふやうなことに大金が費され、殊に釜石の如きは最初から大仕掛の計畫であつた。

造船處は長崎の小野濱にもあつた。これは幕末に勝海舟翁が毎年政府から三千圓づゝを貰つて海軍練習處とした。而してこれは幕府のものであるなどといふ小さな考へ方ではいかん、將來の戰爭は全國一致して戰はればならぬのであるから全國の者を養ふのであると云つて、坂本龍馬を教頭にした。ところがこれは幕府に謀反をするものであらうといふことから、海舟翁は敬遠されて江戸に廻されて了つたが、これは後に工部省のものから海軍の所有にと變つて行つた。

山尾氏はまた美術學校を開いた。またその他土木寮などもあり、硝子製造所なども起された。今では淺野のセメントで知られてゐるのも、當時セメント製造所として起されたものが明治十二年拂下げられたものであつた。

ともかく、工部省がいろいろな新事業の爲に注ぎ込んだ費用は七百萬圓位だつたといふことである。ところが明治十三年か四年に太政官經費節約、新事業はせざること、在來の事業は範圍を緊縮することとなつて、流石の山尾氏も手の出しやうがなくなつた。やむなく、伊藤公の大臣の時だつたので、參事院議官となつた。而して敬遠されて了つたわけである。

その後に工部省に來たのは佐々木孝之氏であつたが氏は工業の事は知らず、手のつけやうもなかつたが、後、渡邊洪基氏が入つて巡視したところ、いづれも儲かるところがない。そこでこれを維持してゐてもしかたがないからといふので、之を民間に拂下といふことになつた。

民間拂下となつた御池の鑛山が二十年々賦で二百萬圓ばかりであつた。そんな風にして他のものも民間に拂下げられたのであつた。然しそのうち工作局といふのだけは海軍が引きつぎ、赤羽根にあつた。また工部大學は明治十九年一月より